川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成三年五月二十五日　印刷
平成三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七六九号



日川協加盟

No.769

六月号

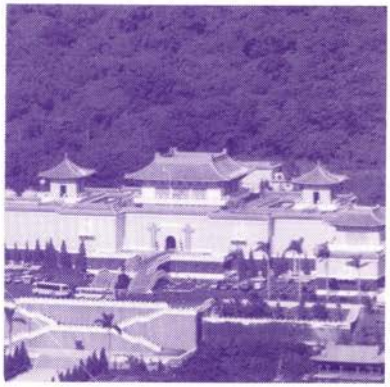
台北・日月潭の旅

故宮博物院の見学と観光

□９月24日(火)～27日(金)
□４日間　□定員20名
□費用　14万8,000円
（全食事付・添乗員同行）
□申込締切　７月末日

阪急交通社取扱い

川　柳　塔　社



故宮博物院

日本川柳秀句集（第５集）
日本川柳推薦句集（第３集）

発刊予定　平成３年11月
掲載内容　日本川柳推薦句集　約３０００句
　　日本川柳秀句集　約　１００句
応募作品　昭和63年10月以降の自作品５句以内
参加料　３０００円（秀句集・推薦句集各１冊贈呈）
参加締切　平成３年７月末日
選　者　渡邊蓮夫・亀山恭太・西尾　栞
申込先　大阪市中央区谷区７丁目１―39
　　新谷町第２ビル２０６
　　日本川柳協会

残暑見舞広告

★個　人　一口　二、〇〇〇円
★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　②半頁　九、〇〇〇円
③2/3頁　一二、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円
▼原稿締切　６月25日

川　柳　塔　社

太平記

西尾栞

今、日曜午後八時のお待ちかねのNHKの大河ドラマ「太平記」に登場する後醍醐天皇の皇子大塔宮護良親王の呼び名をめぐって、侃々諤々の論争がまきおこっている。視聴者から「放送では、オオトウノミヤモリヨシ親王」と呼んでいるが、「ダイトウノミヤモリナガ親王」が正しいのではという問い合せが殺到している（NHK広報室）。

実際、少なくとも二十代後半以上の年齢の人たちは、ダイトウノミヤモリナガ親王と学校の歴史教育で教わってきた。親王の身でありながら鎌倉の土牢に入れられた話を聞いた。その土牢の写真も見た。それだけにNHKに殺到した視聴者の声は、歴史上の人物の呼び名を間違えるなんてという抗議に近いものだったらしい。皇太后の呼び名「良子」は、ナガ子でヨシコではない。矢絣の着物を着て汐干狩をしておられた可憐なお姿を見て、ナガコ姫を国民はどれだけ慕わしく思ったことか。このナガコ女王をヨシコ女王と呼んでは、イメージダウンも甚だしい。

とうとう三月二十四日の放映の「太平記」では、冒頭に「注釈」を入れる異例の事態にまで発展した。「いずれの呼び名が正しいという絶対的な論拠はない。しかし、現在の歴史学界では、オオトウノミヤモリヨシ親王が一般的になっており、権威ある歴史事典などは殆どこの呼び名になっているし、今、高校の教科書もその表記をとっている。そんなことからドラマは考証の先生方と相談をして教科書にある呼び方とした」（NHK広報室）。教科書が変ったのは約九年前のことだが、その表記変更に大きな影響を与えた上横手雅敬（うわよこてまさたか）京大教授は、「戦前から歴史教育では、ダイトウノミヤモリナガ親王と呼んできましたが、学界では、オオトウノミヤモリヨシ親王説も存在していたんです」。論拠としては、教授によると、大塔宮をオオトウノミヤと表記する歴史的文献もあるし、現に鎌倉宮ではオオトウノミヤと呼んでいる。護良親王については、兄弟の尊良（たかよし）、世良（よよし）、義良（のりよし）とする文献もある。だから護良をモリヨシと読むのが自然で正しいのだそうだ。

ところが護良親王ゆかりの鎌倉宮では通説と学説の折衷派で、「昔からオオトウノミヤモリナガ親王とお呼びしています。今更そんなこと考えていません」（社務所）と言う。

最近、日本語が乱れたと言われているが、変った呼び方をすれば新しいと思って「喫茶店」をキッチャテン、魅力をミリキなど、変な世の中になりつつある。私等の先生麻生路郎は、僕の名字はアソウであって、アサブではないとよく話されたことがある。林荒介さんも、コウスケであってアラスケではないと宣伝これつとめないと後世になって侃々諤々しなければならない。日本文字はいろいろに読めるから面白いのである。それだけ文化が高いのだと諦めるか。

座右の句
飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ　（葭　乃）

私の句
富士山に登る夢見ている米寿　清水利武

川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　太平記……西尾　栞…（1）
何を信じるか……高杉鬼遊…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（35）
川柳の群像　深井凡々……東野大八…（40）
■古川柳　柳籠裏三篇研究（八丁）……（42）
水煙抄……黒川紫香選…（44）
秀句鑑賞┌同人吟……土橋　螢…（39）
　　└水煙抄……舟渡杏花…（69）
大空のこころ(6)……橘高薫風…（65）
平成三年度　路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……（66）

何を信じるか

高杉鬼遊



〝核のない平和が欲しい鳩の夢〟、これは三月十八日のよみうり時事川柳に載った島根の人の句である。〝核のない夜明けを鳩が待っている〟、これは一九八八年の日川協の大会賞に選ばれた私の句である。また、『川柳塔』三月号に載った、〝木の仏　石の仏もあたたかい〟と、拙句〝木のほとけ石の仏もあたたかし〟は、漢字・仮名のほかに下一字が違っているだけで、他の人の名で発表されている。こんなことはよくあることで、いまさらの感もないではないが、二句とも私に関わることなので採りあげた。

課題吟の場合は同想の句がよくあり、中には一字一句の違いもないまったく同じ句がかち合うことがある。想が平凡だと言ってしまえばそれまでのことで、人が作ることだから同じような句ができて当然である。しかし、それでよいとは言えない。作句、選句の難しさをいまさらながら痛感する次第である。

記憶違い、考え違いなどあって、人の句を

銀河系……河内天笑選…(70)
茴香の花……小出智子選…(74)
「ロマン」……松本文子選…(76)
一路集「楽　器」……小池しげお選…(76)
「慰める」……津守柳伸選…(77)
初歩教室「合鍵」……辻　白渓子…(78)
本社五月句会……(80)
各地柳壇（佳句地十選／吐田公一）……(84)
出雲川柳会紀行……高杉千歩…(98)
城北川柳会吟行……松本ただし…(99)
柳界展望……(100)
六月各地句会案内……(101)
■編集後記……正坊・楓楽・射月芳…(102)

座右の句

添乳して棚に鰯がござりやす　（古川柳）

私の句

食べなさい眠りなさいと言う野心　新　正子

自分の句と錯覚することもある。ことは句だけのことに限らず、時には誤解を信じることがあるからおそろしい。

「私は相手の欠点と　済んだ事は言わないことにしている　言うても戻らぬし　性格はなおらぬ　それに相手から言うと私も同じこと　謂わばあいこだ　人間は欠点だらけだ　一つでも美点があればよいではないか　それで赦し合うのだ　赦さねばならぬ　私は赦すのだ　私も赦してほしい　もう　やり直しは出来ない仲　それは一年目でも　十年目でも　五十年目でも同じ事　固く結ばれた縁を私は信じる　気拙いことを言う様だが　これは敢えて夫婦間だけでない　万物に対して皆同じと思っている」。これは、ふあうすと川柳社の主幹だった故椙元紋太さんの名文である。私はこの文が大好きである。会ったこともないのに、人柄まで偲ばれてならない。こんなよい文章を書かれるのは、人生の達人だと思う。天性的なものもあるだろうが、要は書き手の人間性にほかならない。

こと川柳に限らず、出合いによっていろいろなことを識り、そして教えられる。よい時代を生きてよかったとよろこんでいるが、他方ひとがひとを信じられないのも現代なのである。よいことずくめなどこの世の夢だと思うが、そうありたいと希って生きる自由を大切に持ちつづけたい。



西尾栞選

春うらら犬も私も涅槃像
追伸は親の甘さを見抜かれる
また恋のかさぶたふやし春は逝く
逆縁を思う紋白蝶がとぶ
妻や子に黙って渡る丸木橋
回り道カボチャの車が動かない

今治市　野村京子

なにが春　二月に母が逝きました
母の死へ匂いが足りぬ沈丁花
早春の冷え骨壺はことりとも
喪の耳にきく梅だより花だより
朧月　風やわらかに亡母の影
春の雲　光を抱いて温い白

京都市　都倉求芽

右顧左眄してるわたしの民主主義
人生劇場　パフォーマンスにハプニング
日米の摩擦が亀の甲羅まで
死に方も自分で選ぶ尊厳死
専務車掌がやけに優しいJR
おみくじをゲームのように引いている

大阪市　板東倫子

親離れ子離れ他人の事ながら
亡母は尊し西日のあたる台所
侮っていると鏡に裏切られ
空の高さよ商店街は定休日
ロマンスに縁なき髪となりにけり
肉を焼く一瞬バグダッドの異臭

松原市　谷垣史好

自転車の長女さわやかなり五月
猿の次郎の野性が怖い時がある
燕夫婦のおしゃべり聞いている午後よ
鎖より重い名刺になりました
一言で眠れる眠れない雀

竹原市　小島蘭幸

哀しみの果ておみくじは吉と出る

大阪市　西出楓楽

ハッピーエンドのその後のことが気にかかる
減点法で見合するからまとまらぬ
脳のしわのびてきたらし物忘れ
インスタントにひと工夫してプロの主婦
五月闇　話のわかる人が欲し
平和とや甘い果物ばかり増え

和歌山市　西山幸

姿見でいまの私と向かい合う
鏡の中のおんなも同じ疵がある
ほろほろと酔うて自縛を解いてみる
色即是空ああいつからの泣き上戸
忘れた筈の名を呼んでいる桜の木
目玉焼ひとりぼっちを笑う目だ

鳥取県　土橋螢

卒業をしたら帰ってこいという
合掌の手からこぼした欲ひとつ
花びらに触れてみたくて風光る
口紅をつけて女が攻めてくる
唯我独尊　足跡は消してある
旅びとに彼岸の寺の鐘が鳴る

熊本市　永田俊子

ひい　ふう　みい　おぼえて欲をかぞえ出す
おままごと菜の花きざみ時きざみ
はん女の舞ひとさし欲しい花吹雪
清く生きて子孫に残すものがない
とり返しつかないけれど後ろ向く
忘れたい齢を他人が指を折る

和歌山市　福本英子

クチナシが咲いて去年の傷うずく
花衣　年齢相応が気に入らぬ
愛しいと思う消ゴムちびている
私を磨く砥石にある窪み
太陽の塔も二十歳を過ぎた貌
曇り空今日は息子の面接日

松原市　玉置重人

きっちりと眠り薬と便秘薬
思惑がはずれた椅子が回らない
シナリオに無かった古稀の坂だった
パチンコのおかげで溜まるチョコレート
帽子掛け今日は妥協をせぬつもり

下関市　石川侃流洞

バンザイの背中はみんな隙だらけ
健康食老残とても夢を持ち
開発誤算　桃は流れて来ない川
悠然と蜘蛛が世間を股のぞき
レントゲンだって叶わぬ妻の目だ

今治市　矢野佳雲

出不精な家内の好きな花作り
花切ってあげた匂いが手に残り
夫婦して唄える歌がくい違い
顎をこう引けと写真屋指図する
帰れない郷里がこんなに近い地図

岡山県　嘉数兆代賀

あったかい言葉が欲しい老いの部屋
消えそうな灯りで命かばい合い
雨季つづく鬼も般若も眠りこけ
とぼけたいとぼけたくない独りの部屋
馬鹿笑いしたら心が晴れますか

堺市　河内月子

意地悪もしながら夫婦続けてる
両親の喜ぶウソをたんとつく
私がボケない保証なにもない
気を許す相手にされて肩が凝り
罪なこと言うてしもうた春の宵

鳥取県　松下たつみ

波紋辿ると道は一本だけでない
ぼけておくことで私がすくわれる
夕やけに子どもは燃えたままもどり
企みの指にはとまらないトンボ
規則にはふれるが人情味に厚い

倉吉市　奥谷弘朗

忍従を美徳と信じた過去がある
暗算は苦手女房に歯が立たぬ
平凡という幸せが解りかけ
女房の福耳信じて生きてます
駆け引きのうまい男のふところ手

名古屋市　越村枯梢

アイウエオ素直に言えぬ入れ歯かな
そう言えば脇役だったループタイ
極楽へ着いたと父の夢枕
凡石に磨きをかける愚行だな
蔭膳に長寿の箸が添えてある

倉敷市　小野克枝

善を積み母は仏になりました
父　母の祈り一途に薬を打つ
銭の要る話に拍手揃わない
又ひとり敵を作った濁り水
一歩二歩初心忘れぬ亀となれ

廿日市市　林野甦光

塩おくる美談ひとひら春の耳
三浪の頭に刻み込む火薬
灯明を上げて脳天カラにする
どっちから風がこようと休肝日
花を横目にメロン掬って食べてます

島根県　堀江正朗

桜さくら昔誇ったままですか
盲人のお喋りどこか間が抜けて
空想で追うてみたとて雨の音
半世紀　闇の深さを埋めきれぬ
笑うときどんな顔している僕か

島根県　堀江芳子

越えて来たツバメよ海は澄んでたか
病み上りの散髪夫を春にする
耳じっと澄ます逢いたい声がして
体かわす如く上手にとぼけられ
若葉陰いのちの泉だと思う

東大阪市　森下愛論

ひとり旅恋を拾いに行きました
生酔いで二重人格覗かせる
不都合は知らぬ存ぜぬ酔いつぶれ
泣いている子囲んで子等にある意見
入れ歯外せば亡き父に瓜ふたつ

富山市　舟渡杏花

通り魔のような小石に砕かれる
にんげんの風化を抱いてくれる壺
何のヒントか目の前の紐一本
致死量を他人のサジで計られる
マスコミへたれ込む震え止まらない

高知県　赤川菊野

酒ぐせを知っているから距離をおく
かと言って棄権するのも気がとがめ
近道は止そうゴールが見えたから
上げ底のような政治に踊らされ
還暦を過ぎると日めくり駆け足で

笠岡市　松本忠三

年寄りとして奉るのが気にくわぬ
駆出しの頃がなつかし無鉄砲
一言が多くて万事けむたがる
純白の心に染める色は無い
立板に水お隣の奥さんか

玉野市　小谷仙山

一票の種に老人福祉法
善悪の差別がつかぬ高いびき
腹の虫何時まで押え切れますか
ハイハイと二つ返事も時により
余花の雨静かに花の私語を聞く

加古川市　吐田公一

風袋の割には中味軽すぎる
転居して何する人ぞ両隣
雑音が聞こえて来ない都落ち
雨風も知らず育った胡蝶蘭
人妻の恋はテレビの中で燃え

高石市　浅野房子

あさまだき牧場は今日の歌うたう
ありがたい話を聞いている正座
年金で食べて行けますおかげさま
気が付けばいつでも独りで食べている
一定の距離を保ってまだ他人

七尾市　松高秀峰

反対をするから敵と限らない
癌よりもボケを心配する夫婦
晩成も成らず定年振り返る
年金の顔が並んだパチンコ店
的はずれ返事でわかる遠い耳

竹原市　森居菁居

光陰は矢の如しとやエビネ咲く（父三回忌　三句）
せめてもの救いと思う母達者
あきらめが漸くついた三回忌
頑張らなくちゃあ大学が二人
装いを春にして出る適齢期

豊中市　田中正坊

六月の風は歩調をとりたがる（召集記念日）
剣よりもペンの力を信じよう
にんげんの顔は心のメッセージ
風光るジューンブライドが美しい
トレンドに振り回されず抱く初心

豊中市　安藤寿美子

有象無象と言われ税金はとられ
ペンタゴン　ハイテク兵器蔵ざらえ
紙屑になるなと大木を撫でる
キッチンの棚カイワレが萌えている
四つ辻は夕焼けママを待っている

京都市　山本規不風

無いようで有る神通力があったのか
見つめると大仏様になって来る
みんな忘れてからだが軽うなりました
闇暫く　明るうなれば浄土です
こだわりのまま好きになる鬼薊

堺市　楊井二南

本読みの席でも主役力ませる
丸出しのエゴはおいてきぼりをくう
憂さ晴らし南で時を稼ぎたい
満ち足りた風情の花が散り初める
腹芸は切羽詰ってから出そう

藤井寺市　吉岡美房

選挙戦　自社公民が判らない
蝶々は宣伝カーの嘘を逃げ
落選の候補にほしい迷子札
恋人の歩幅で心斎橋は春
ポケットに春の手紙が溜ってる

松原市　佐藤奏月

梓弓吉野は桜一色に
満開へさくらさくらと血がさわぐ
目を病んで心の襞がよく見える
愛されて愛して子鹿物語
あの人にこだわるこれは恋かしら

西宮市　門谷たず子

老いのロマンをぬくめ合うてる珈琲館
偶然のえにしがすこし重くなる
同罪の傷を背負って夫婦坂
関東煮の薯をつきさすジェラシーか
髪切ってわたしを放つ空の青

美禰市　安平次弘道

偏差値を信じて教師堕落する
カード繰るたびに善人だまされる
奈落からあしたへ投げる果し状
保護色を信じ控える自己主張
安全牌に勝負度胸をみくびられ

柳井市　弘津柳慶

席をゆずって明るい心で駅を出る
消費税もう過去のもの選挙戦
お茶にしますかと妻が探りに来
こたつからカアチャン電話鳴ってるよ
カアチャンよそろそろ会いに行ってやる

箕面市　坪田紅葉

卒業に入社祝いと声かかり
こもりいて風邪なおったが気が弱り
ほろ苦い春の香りの京料理
新しい旅立ちをみる顔と顔
お灯明またたく今朝はよしと出る

神戸市　中村ゆきを

ピアスして星の王子を気どりたり
またここもビルの谷間となる神社
窓際のときの勉強役に立ち
新幹線電子手帳に囲まれて
黒部にて雲眺めてる便り来る

西条市　片上明水

草引いて隣の草を覗き込む
病窓を花に合せて開ける幅
上向いて歩いてみても愚痴が出る
椅子獲り話が消えて風薫る
大阪と京都の旅は別な服

香川県　松村迷観子

遅咲きと言われる椅子が待っていた
かきわけて渡る人生裏がくる
喜んで泣いている顔見てる顔
一服の茶が空間を埋めてくれ
常識と言うしきたりのむつかしさ

松原市　小池しげお

ポケットの銭で間に合う新世界
よそゆきの言葉へ金魚立ち止まり
妻の留守　妻の鏡を覗いてみ
あのことで怒ったままの襟ぼくろ
座蒲団を出すのは少しあとにする

大和高田市　岸本豊平次

坪庭のめぐる季を知る雪柳
いい人はいい友達を持っている
同病が漢方が良いと宅急便
日めくりの捨てては惜しい日もあって
六十の手習いで聴講菜根譚

宇部市　平田実男

若者へ自分を変えて対処する
先生と言えば小使い代りもし
言いなりになって絆が細くなり
野良仕事よりも疲れる孫の守り
夫がするときは気になる電話代

西宮市　奥田みつ子

小半日　海を見てきた片想い
波の音　自問自答をくり返す
初志貫徹　いくたび花は散ろうとも
夕桜　いのち放電するごとし
柳萌えスポーツ欄も賑やかに

宝塚市　丸山よし津

無料パス老人だよと肩叩く
カレー皿母の情けを大盛りに
調理器具きゅうりを刻む音消える
灯明を電気に変えて気に入らぬ
風船の意地青空へ消えて行く

堺市　高橋千万子

ふたごころユリの香りが胸をつく
身動きの出来ない席が自由席
夜ざくらに四月の夜の肩が冷え
捨てたとは言えず一緒にさがす顔
人間不信　荷物を椅子に老い二人

堺市　藤井一二三

咲いて散る雄々しさ点滴など要らぬ
変り身の早さは桜から若葉
太棹にのせて思いのたけを哭く
人が人形になり人形が人になり
去年の秋の煩いにああ半七が羨まし

呉市　槇田英詩

さりげなく偶然らしく逢うてます
ニアミスの愛しい人とそれっきり
山好きの仲間と山の水を飲む
沢庵の尻尾が妻の口へ消え
乾杯のない式場は数珠をもち

高槻市　川島諷云児

頂点に針の莚が敷いてある
身のほどをわきまえ影に甘んじる
合鍵に男の度胸試される
受け売りにしては見事な美辞麗句
妻の歩に合わせる旅の時刻表

今治市　越智一水

やさしさが罪をつくった恋となり
怒るのがあきて笑いの老夫婦
春の宵　妻にやんわり連れ出され
老妻とウインドに立つ春の宵
老いてこそ人生は花歌うたう

西宮市　林はつ絵

ブランコに揺れてわたしが見えてくる
胃の底に遠いかなしい嘘一つ
消しゴムのあとに灯りがさしてくる
セットの茶器は毀れる時をさけられぬ
一部屋の城でたまごを抱いている

尼崎市　春城武庫坊

シナリオの通りに桜咲いて散り
桜満開　散る決心はついている
遠い日の歴史語らず花吹雪
煩悩の重さが違う遍路道
向う岸への風を待ってる竹とんぼ

守口市　羽原静歩

大姉　居士やがて同居の日もあらん
鍵一つ持てば孤独が攻めて来る
ふるさとの喜怒哀楽も電話口
カルチャーの日の母さんそわそわと
オットリ型チャッカリ泣かして告げに来る

西宮市　西口いわる

青春も老後も入れてあるポケツ
浮灯台もかもめも春の波にのる
山門へ散り敷く花を踏みながら
後ろ髪引かれるような椿の朱
夕ざくら幻想的に暮れていく

鳥取市　両川洋々

友の訃へきょう一日は酒を断つ
予備校のページに忍の文字ばかり
泣ける日はまだ幸せと妻よ知れ
フセインよその後のひまをどうしてる
返品と下取りきかぬ僕も老い

鳥取県　林露杖

桜咲く鳴呼美しと思うだけ
地方選吾が家に保革伯仲す
軍友の訃報聞く日の花便り
邂逅に花の峠の老い語る
からからと渇く詩嚢を振ってみる

嘘じゃなかったとうとう春がやって来た
さくらさくらもうすぐ母の三回忌
梅さくら今年の春はつつがなし
日ノ丸の旗よ卑屈になるなかれ
花が散り元のひとりに戻るなり

鳥取県　新家完司

お隣が眠気を移す法話きく
数え唄一〇〇で峠を越えました
帽子かぶせた一升びんを抱いている
人生の大先輩の姑といる
いつきても寝ている犬を飼っている

鳥取県　土橋はるお

君のため小指をいつもあけている
気紛れな指がからんだだけのこと
うっかりと鏡に顔を置いてきた
薔薇咲いて甘美な詩に誘われる
脳天に青空だけを詰めている

鳥取市　小谷美っ千

酒が好きうたた寝が好き濡れ落葉
満ち足りて三Kという手を嫌い
自分史の出口へたどるちびた靴
厨房が病んでスプーンで食べている
花の香に酔いしれている平和論

松江市　恒松叮紅

妻退職古い生活よサヨウナラ
モルモットに効いても僕には効きません
教育ママが育てた指示待ち症候群
女ではネと厚い意識の壁がある
聖母マリアを犯した医学

松江市　柳楽鶴丸

度忘れも笑い話の内はいい
にらめっこさえも女に勝てぬ世ぞ
幸せな国だと思う飛行雲
地上げ屋も目がとどかない山桜
仏壇にまだ嫁さんがなじまない

松江市　舟木与根一

スパイスを効かせベテラン追いかける
訃を知らす便りへ花は散りいそぐ
ベテランと争うだけで溺れそう
リゾートへ地蔵を移す場所がない
二次会へ履き間違えた靴で行く

米子市　小西雄々

萌え出でて温い峠となりにけり
哲学も持たずに山を越して来た
くるぶしも嬉しい春に触れさせる
木洩れ陽の甘い科白に騙される
舌打ちの音から戦はじまった

米子市　林荒介

米子市　林　瑞枝

ふたり旅暫し現実眠らせて
仁徳天皇お出まし欲しい新都庁
離婚流行　子はかすがいともう言わぬ
紫陽花の青が明暗分けて咲く
裸婦という画題で妻を美しく

米子市　石垣花子

病みながらかばってくれてた大きな手
これからが恐いと思う喪の帽子
女坂　参道までは連れが有る
胃の痛み峠越えたら消えていた
初物へ財布仲々折り合わぬ

米子市　政岡日枝子

花卍　浮世の義理の哀しけれ
旅人は抱きたい人とすれちがい
弟は一歩下がって笛を吹く
全面的に足場信じちゃいけないよ
時計より早く動いて叱られる

米子市　菅井とも子

忘れたいことがあるので香をたく
二つ目の砂糖を匙がたしなめる
人声が恋しく路地をゆく帽子
たくましい牛にしようと山に出す
故里の良さがわかって旅終る

米子市　野坂なみ

陽だまりへ移してあげる父の傘
灌仏会わたしも渇き止んでいた（花まつり）
それなりの仕事与えて手を守る
自己採点辛くて喉が渇きだす
いろは坂辿れば晴れやかな景色

米子市　寺沢みど里

スプーンの中に真っ逆さまの私の絵
さまざまな水をくぐった掌のゆとり
嫁がせた頃がわたしの峠道
お目当ては珈琲午後のペダル踏む
点線をなぞり自画像書き直す

米子市　田中亜弥

梅が香にさそわれ命干している
金の無い気楽さこれで良かったの
ハナハトマメわたしの歳を数えだす
夫と会うひととき魔女になりきろう
欠伸にも言い分がある昼さがり

米子市　澤田千春

来た道を辿れば亡父の笛がなる
すばらしいものを掴もう両の手で
雨の午後刺をみがいている薔薇だ
神様はみんなご存知舞台裏
カンカン帽今も廊下にかけてある

米子市　光井玲子

ふりむけば生きた暦がいとおしい
口紅をぬれば息切れかくせそう
あじさいのお洒落に逢える雨が好き
無駄口は多いが温いお人柄
欲求不満か渇いた声でカラス啼く

米子市　新正子

音楽はアダムとイヴの胸の音
チューリップとバラは知ってるお殿さま
わたくしをふるさとと言う夫がいる
癌検に女を置いて行く乳房
父　母を越えただろうか霊柩車

米子市　白根ふみ

発狂の藪椿から火が香る
森を辿ると触れるものから協和音
春がすみみな仙人にする峠
夏帽子つばめ前線からかぶる
食餌療法に厳しいスプーン持っている

米子市　茂理高代

子育ては手抜きが出来ず本を買う
鉢巻を外すと愚痴がこぼれ出す
鍋みがく忘れる事が好きになる
影法師おどおどするのやめておけ
悩むなど馬鹿ばかしいよ花の下

寝屋川市　江口度

退職の鼻唄と出る社長室
年金の手続覗く揚げ雲雀
恥ずかしながらお寺参りはまだ早い
お別れのテープ港をカラフルに
笛が聞える明日の米に踊らねば

寝屋川市　稲葉冬葉

春炬燵こわい話の酸性雨
その時の言葉はたりぬ方が良い
テレビから貰う料理のアラカルト
嫁さんが気持よく揃えてくれる靴
枸杞の実を信じて食べている病い

寝屋川市　岸野あやめ

防衛大卒業しました四月馬鹿
片減りの靴だよ深い吐息だよ
誘われて棘ある花のかぐわしさ
婆ちゃんのニュースソースは美容院
古稀過ぎて宥せぬことのある夫婦

寝屋川市　柴田英壬子

使い傷みの指に扇子がままならず（珠若流おさらい会　二句）
ひとつ所作忘れあたまが真っ白に
札束を積まれて冴えてくるあたま
ひと言の波紋　杯置いたまま
ストレスを消すほどお酒飲めませぬ

寝屋川市　平松かすみ

極楽へどうぞいっぱい花かざり（三月十七日別れ）
老衰のひとも羨む仏様
占いが教えてくれていた別れ
お小言も涙も残る日記帳
回転の速い姑さん偲ぶ雨

寝屋川市　堀江光子

春うらら相変らずのいそぎ足
変りないよと変りない処方箋
波風を立てぬ女の苦労性
饒舌が次第に消える石の庭
その波を今日はひとりの旅にきく

和歌山市　堀端三男

選挙前だけは合掌してくれる
ありがたいことに減らない花便り
雰囲気に自ずと頭下げている
初志貫徹などと煙草はまだ止めず
紙屑でないが老人吹き溜る

和歌山市　若宮武雄

見たことはない天皇の急ぎ足
殊の外あざやか火葬場の桜
春雨に濡れては毒という世相
うらぶれるだけ紫陽花の色直し
損をするばかりでもなし物忘れ

和歌山市　内芝登志代

おいしい水頂く恩は忘れない
祝日に国旗だすのにいる勇気
芽出し時老母の持病を案じてる
よく吠える犬を頼りに独り住む
強がりを言って夜空を見上げてる

和歌山市　桜井千秀

瞼病で優しい瞳避けておく
神様のお告げは独り真に受ける
ゴマスリも並大抵で出来ぬこと
自己暗示今日より明日は良き日なり
通り魔のように若草踏んでゆく

和歌山市　木本朱夏

彼岸過ぎ逢う約束の無人駅
心の整理つけねばならぬ桜咲く
花を見る人ごみにいて偏頭痛
ひとり居て岩波文庫うす埃
呪文のように世界平和を祈ってる

和歌山市　内田結実

すぐ弾む女が空ける大ジョッキ
春うらら浮いた噂が漫歩する
ベランダの花弁へ蝶の薄情け
憑きものが落ちておんなになれぬ宿
胃の底で錆びた刃を眠らせる

和歌山市　山川克子

人生ってそんなもんですよとお酒
グッドバイ次のドラマに期待して
酒タバコよりも交通事故注意
ワンテンポずれてはいるが支障なく
妻もああ言うていますと奥を指し

和歌山市　福井桂香

願望がめらめら燃える紅椿
発想があふれて私のペンが無い
ひらがなで包むと愛はやわらかく
青春へいまさら戻れない時計
身構えるたびに自分が小さくなる

和歌山県　寺田裕美

しげしげと猿に衣裳と言う目線
藁一本もしもの時へ取っておく
曲り角良心おとさないように
お花見の肌着は冬をまだ越せぬ
天皇の帽子へ入ってみたい鳩

和歌山市　田中輝子

行間に試行錯誤の海があり
謝られるたびに傷口うずき出す
封筒よはがきよ修業大事だよ
ボストンバッグの重さを語ってはならぬ
描き足してくれる夢あり桜の木

岸和田市　福浦勝晴

企みを注ぐ盃に気がひるむ
タコ焼をむしゃむしゃおんな不貞腐れ
公園のベンチけだるい昼の月
豪勢にはしゃいでひっそり胃のクスリ
夜桜へすこし気になる軽い咳

岸和田市　高須賀金太

晴れてたらどこかへ行こう夢提げて
ふかふかの椅子は苦手な天邪鬼
妻の描く絵にはやさしい思いやり
腹立てて蹴る石ころが見当たらぬ
青信号ばかりはとても草臥れる

岸和田市　島崎冨志子

ボリュームをあげて深夜を一人居る
不自由な一日でしたテレ不通
うれしい日今日一日が短すぎ
ああうんの夫でも側に居る安堵
春うらら夫をさそう靴磨く

岸和田市　原さよ子

花見がてらの参りと大師知っている
尼寺の賑い花の咲くあいだ
えさを食む鳩の群れにも花吹雪
春の野の子等の歓声よく響き
若い気でいても背中に歳がある

岸和田市　古野ひで

神様は気まぐれ人生の運不運
春うらら胸ふくらます赤い靴
散り際も詩情豊かに花吹雪
夕桜二人の影に彩を添え
タラップを美味しい空気吸うて降り

岸和田市　岩佐ダン吉

いたけだかに愛国心を聞かされる
一兆円減税やはり鉤針となりました
息せききってランドセル君よく喋り
朝風呂に入り中流だと思う
高笑いそして悲しくなってくる

唐津市　田口虹汀

老いの血を湧かしてくれる甲子園
行住座臥筆とノートのある限り
喜びの螺旋階段喜寿傘寿
四十年経てば塒も忘れ勝ち（四島返還）
母娘して赴任の夫を解剖する

唐津市　久保正敏

妻の手綱切れて老年期に入る
句想する風呂の長さへ妻の声
襲名に無能と書かぬ血統書
フロントの目にはどうでもよいコンビ
ジーハード　アラーの神の身の置き場

唐津市　仁部四郎

出征の唄を狛犬覚えてる
好調な盃医者は趣味の弟子
幼稚園時代の絵から諭される
よそ目には散歩　哲学我に在り
咲く順を守り野の花強く生き

八尾市　宮西弥生

春霞　山の向こうを信じよう
わたしにはゆずるものなし情けあり
離れても絆はたしか花便り
新しい明日をくれる古都の鐘
八十歳目指す女のリフレッシュ

八尾市　宮崎シマ子

三百六十五日めぐって桜美しい
えらいわね嬉しいね美しいね　桜
物忘れの度に和んでゆく夫婦
子には子の思案　共産党にいる
お好み焼らしい匂いの笑い声

八尾市　鷲見章

腑におちぬ僕に円形脱毛症
活性へ過疎の奇祭が陽を浴びる
妻病んで試行錯誤のフライパン
美しく老いてえくぼを失わず
胎教へピカソを避ける美術展

八尾市　高杉千歩

遊びの輪ひろげ老いを叱咤する
ごまかしの高い水に頼ってる
単細胞でいつも抱いてる無精卵
負けて勝つ妻は動かぬことにする
地つづきであれば来世もこの人と

八尾市　古川覚然坊

ストライキ言い度い限り塀に貼り
チャン付けで呼んで妻より古い仲
ご先祖の土地で過分の暮しする
泳ぐ子を気づかう母は泳げない
板塀の空地勝手に値踏みする

出雲市　金村青湖

六十路まだ己が見えぬ風の駅
青春を捧げ尽した日の軍歌
しのび逢う部屋は港の見える丘
花曇り不漁続きの船溜り
重ね着を一枚脱いだ花曇り

出雲市　吉岡きみえ

花見プラン町内会も平和です
花　土に返し女も盛りすぎ
よそにない話　今夜は盃だ
過去なんてどうでもいいネお月さん
病院で夫婦の絆とりもどす

出雲市　園山多賀子

選挙戦　渦に打たれる杭になる
花のない壺を飾って壺の自負
言いそびれ言葉虚しい沈丁花
彩のない影絵老醜ふと憶う
余白塗る彩は貴方に委ねます

出雲市　小玉満江

こんな時客が来るとは朝寝坊
もう少しお話したい春の雨
切り札があるので椅子にかけている
お化粧のくずれ気にせぬボランティア
講演が終ると眠気も覚めてくる

島根県　西村早苗

何回になりましょうかと見合なれ
つめ腹も切らせて春の異動時期
風の訃に睡眠不足の日が続く
稲光さだかに女の寝顔あり
値の話聞かせて朝の蜆汁

島根県　小砂白汀

快くみどりが匂う陽が匂う
もしかしてあれは私へラブコール
おんぼらと育って人を疑わず
札束で七つの海をなでまわし
文化財になるかもせっせと粗大ゴミ

島根県　榊原秀子

しあわせの音に大きくあける窓
私と深夜放送はなせない
異動発表埋める活字が眼に痛い
パッと咲いたさくら百選花の町
お花見にふれた最後の亡母だより

島根県　栂みどり

ふきのとう春一番のほろにがさ
何んとなく話してみたい春の月
春うらら お地蔵様も花の下
転勤の娘へプレゼント春の靴
風邪の孫へコトコト行平湯気がたつ

島根県　松本文子

生年月日を忘れて老母は生きている
トンネルを幾つ越えても老母のこと
倖せはこんな彩かなさくら草
もったいないもったいないと捨てている
甘えたい人に甘えて叱られる

島根県　石田清泉

もう一人の自分見付けた花の下
入れ替り連呼に花も落ちつかぬ
のろのろに従いて助かるねずみ捕り
平均寿命延びたわたしの車椅子
年金に居座り旅も疎遠する

大阪市　河井庸佑

意識過剰相手それ程思うてず
自己主張存在知らせて退くとする
口数の多い男で疎外され
ちぐはぐになってあわてる思い込み
人物を測る定木のむずかしさ

大阪市　江城修史

落花さかん愛の挽歌を聞く思い
啄木忌暮しをおもう夜の底
生と死は紙一重だよ腎不全
労りの言葉は距離のある絆
忘却と風化が消したわだかまり

大阪市　北勝美

俳禅一如梅田に偲ぶ山頭火
山峡の石の弥勒に青い風
葉桜に変り今年も奈良の大茶盛り
楠若葉萌えたぞ負けじ樫の木も
ぴかぴかの仏壇開眼供養するも齢

大阪市　津守柳伸

一泊で喋り尽きない松葉ガニ
地上げ屋が倒産しやはった跡地
青春が産寧坂の中ほどに
パセリ刻んで自己満足のスープ皿
甲高い声城跡のさくらんぼ

大阪市　黒田真砂

心にうつ抱いて春日こもり勝ち
母の日の亡母に捧げるちらし寿し
お座なりの世辞を言われて冷える胸
桜ひらひら今日一日の命かと
待てしばし忍者屋敷の裏表

大阪市　本間満津子

再会を誓う握手へ散る桜
母の思い漢方薬のように効き
親ごころ青いりんごに袋かけ
湯をさせば出来る料理を憎めない
補聴器を外しゆっくりお茶を飲む

大阪市　神夏磯典子

花咲いて心が留守になってくる
三分咲きまだ楽しみが残ってる
原点に戻れと菜の花真っ盛り
散ってゆく花の素顔の美しき
咲ききって散る花にある安堵感

大阪市　藤田頂留子

薄情な時間みたいに去った恋
花どきのまぐれ気温に風邪を引き
勝ち取った自由に用法かいてない
罪状にあわぬショックな顔写真
難民の腹同情だけではふくれない

大阪市　大塚節子

老い見せぬ舞手に心ときめきて
桜散る悲壮感なく二浪する
喪の明けて一人ぼっちの店開く
気候不順脱いだり着たり彼岸果て
気に懸かる出掛けに見捨てた電話ベル

羽曳野市　榎本吐来

花嵐今日を委ねるタイを締め
仮の世と思う夕べの花に酔う
不倫ちょっぴり宥されそうな花の渦
妻ゆえの本音が夜を眠らせず
妻の顔よぎる妥協を繰り返し

羽曳野市　田中透太

来年の約束をする花の下
春爛漫おんなは蝶になりたがる
半熟のままで家裁の門を出る
今日限り明日限りの店仕舞い
地価高騰アワダチ草にある野心

羽曳野市　吉川寿美

未消化のペレストロイカのもつ傷み
どうしても抜けない父の五寸釘
午後は雨コールはみんな話中
辛口の男でちょっと口説き下手
広い背を信じ寡黙な背を信じ

岡山県　小林妻子

世間様と同じ暮しがしたくって
暖かい風に出逢うた旅の駅
日曜のゴルフに疲れている机
皮靴が地下足袋になり二度の職
生きている輪廻の中の米作り

岡山県　矢内寿恵子

花開く春の情けが行きとどく
たましいに届く光を子がくれる
台風一過喪明けの女立ち上がる
虚と実を裁く小さな瞳に負ける
人間陶冶まだまだ余生磨かねば

岡山県　二宗吟平

あれこれと齧り寝転ぶひまがない
ごみ捨て場　烏のスパイ枝に居る
丸うなれまあーるうなれと石の声
入歯して入歯は入歯だけの味
墓の草取りそれぞれの声を聞く

奈良市　宮口笛生

阪神の負けっぷり観に甲子園
阪神の負けたもろさを酒で埋め
里からの電話筍豊作で
高い方の駅弁を買うフルムーン
車内販売買わなきゃ損のように買い

奈良県　上田翠光

単身赴任不倫の二字がまといつく
大臣より女が匂う科学庁
やり直し効かない歳にかさむ悔い
オバタリアン完全燃焼しておらず
あれは人妻心乱れるプロフィール

奈良県　天正千梢

総選挙坂本竜馬はどこに居る
父ちゃんのアシスタントで五十年
年金暮らしの母が衝立てになってくれ
日本の青春なりしか大正ロマン
ことなかれ主義の危険に気がつかず

奈良県　田中紀美代

小気味良くズバズバ言うて気に入られ
いたわれぬ病気をひとつかかえこみ
太陽に近いところへふとん干す
真知子巻きこんどの冬が待遠し
信頼の度合いもきこえる聴診器

奈良県　長谷川春蘭

男雛女雛　背中合せにしまわれて
葱坊主　孫に嫁などまだまだや
毛糸玉　突き放されてまた戻る
春愁や指の繃帯歯で結ぶ
行き先を違えて野火の叩かれる

奈良県　中原比呂志

花咲けど人事異動の嵐風
雑学を拾うラッシュの吊広告
見習いの方がしっかりした目つき
値切るのが上手な友と待ち合わせ
中東の戦じわじわ副作用

姫路市　大原葉香

飄々と雲には迷いなどはない
生かされて青空今日もふり仰ぐ
せめてテレビで旅を夢みる車いす
ど忘れを嗤って背がかゆくなり
義歯からのもれる話は淋しすぎ

姫路市　中塚遊峰

病む身には家族があるという安堵
吊り橋を渡る思いの回復期
肩の荷を降ろして欲しい古稀の坂
極楽はあると信じて善を積む
ろうろうと謡い納めて枠に酔う

姫路市　人見翠記

神経痛だましだまして五十年
恋しいと逢瀬を待つのは針と灸
人格者影ぼうしまでが身構える
天命を日向ぼっこで過ごすまい
お迎えが来るまで歩こう雲の峰

広島県　藤解静風

膝頭抱けば恩師の声がする
師の居ない句座でうつろな風に遭う
反核のドームの膝へ降るさくら
桜散るまさかまさかの風に遭い
赤字でもバスは定時に発車する

広島県　田村新造

日暮れなおノルマ届かず雪やまず（シベリア回想）
シベリアの捕虜になかった神ほとけ
ダモイ東京友が越されぬ長い冬
戦友よ許せ屍の肌着剝ぐ
捕虜あわれ今朝も点呼の数が減り

静岡市　渥美弧秀

梅雨晴れ間ショパンの曲にファイト湧く
梅雨の日は憑かれたように詩に励む
鍵っ子はメモから母の愛を知る
大好きよ月が言わせた影法師
公園の鳩追う子等に陽が温い

倉吉市　渡辺菩句

彼の方が二枚目半の男前
すねのきず面白うはなしてくれる
小石投げ池に春来たことを告ぐ
黄水仙ひょっとしたら福の神
ぼんぼりの中にたっぷり春がある

有田市　松井かなめ

借りた本に香水振った若き日は
三合炊いて二人で四回食べている
綺麗にみな食べてくれた皿洗う
四つ辻と三叉路もあるもぐら道
貧乏神　転宅先を知っている

貝塚市　行天千代

ガス止めて受話器を取れば票たのむ
選挙戦おばあちゃんにも握手する
のんびりの嫁と私は短気者
投票日ああ静かなる日曜日
春が来て老人会にも花見有り

弘前市　真喜内實

陽炎と燃えてる子等の春休み
孫兄弟野球解説名コンビ
うららかな街角妻と鉢合わせ
お話も重さで夫とふりわける
種籾はやんちゃな子等のよう寝かす

守口市　野呂右近

捨て犬が尾を振って居た風の島
若い者けなし己は世におくれ
はっきりと歳も話して持つ自信
一ランク落せば道が見えて来る
薬飲む良くも悪くもならぬまま

黒石市　相馬一花

腕力がないので筆で攻めたてる
酒呑みも格言一つぐらい持ち
親不孝するので親は長生きし
実力がないので使う標準語
年齢順に逝けばこの次出番です

京都市　松川芳子

幸せと罰を神様からもらう
人間を甘く見ている猿の芸
天国が地獄になった産油国
年金と言う金蔓よありがとう
しがらみにだんだん涙もろくなる

豊中市　吉田あずき

満開の花に染まって行くいのち
しだれ桜　舞妓の色で空に溶け
苦が先か楽が先かの人生観
台本を女は幾つも使い分け
玄関を出れば気弱な小市民

神戸市　山口美穂

花に風無常の世とは知りながら
忙中閑桜を賞でる回り道
現実をしばし忘れて花吹雪
おぼろ月昨夜の夢をもう一度
春爛漫悠々自適がまだ遠い

東大阪市　崎山美子

妻と子のプラン優先する連休
色あせた雛と独りの春重ね
女三代　心浮きたつひなまつり
予言など気にせず今日をただ生きる
火の始末何度も留守にくり返す

倉敷市　稲田豊作

罪一つ消したく日にち善を積む
歳月は亡母をマリアへ近づける
爺さんを嫁は大供だと笑う
満足のいくまで愚痴を言わしとく
長生きの昼寝に曽孫這って来る

十和田市　阿部進

迷いから覚めてこの世が美しい
居心地がよくて雑魚の群に居る
けい古場で英語とび出すアドバイス
朝シャンで心の錆は落とせない
振り返ることを忘れて人を責め

尼崎市　奥山美智子

無理なこと言うていつしかあきらめる
ポケットに禁句がひとつ入れてある
初心を貫きたくて旅に出る
うぬぼれを流してくれる雨が降る
点と線つないでからの失語症

竹原市　岩本笑子

指と指からませて知る世の無常
灯台の孤高へ海は凪ぐばかり
美しき双生児の長い長い髪
右の手が少し大きな父の職
ふと何の電話かベルに間に合わず

富田林市　片岡智恵子

真ん中で生きて時どき狡くなり
子の卒業　家族の節目とも思い
茶事すすむ間の微妙さに酔わされる
油断して落した墨で絵が生きる
人類の敵退屈という魔もの

川西市　松本ただし

終章のシナリオ砂糖足しておく
控え目につんとすました薬指
天災の落語のようにゆかぬ事故
入り口は年金だけの門構え

唐津市　浜本義美

松原の一揆貧しき農奴の碑
草に臥て両の乳房は天を向く
都庁より批判の声がより高い
人参の赤さ健康羨まし

名を惜しみ弓を拾った若武者よ
面が無きや渡れぬ顔で世を泳ぎ
道楽の末の小唄が哀し過ぎ
男の為めとて愛想尽かされる

唐津市　浜本ちよ

水子仏拝む年齢とも見えねども
水子仏その手その手に風車
乗り越えた節目うれしい妻の酌
カラオケとカレーは上手若嫁御

唐津市　山口高明

二日酔妻が鞄を差し向ける
一滴を大事にし過ぎた二日酔
妻寝込む玄関のドア重すぎる
津軽路を離れてみたが世去れ節

弘前市　小寺花峯

一億の中の夫婦という絆
桜散る一期一会の人生か
果てしない夢を求めてすでに老い
一坪の庭にも四季の詩がある

弘前市　村田善保

温情を男の意地が避けて行く
海千山千ゴキブリよりも手がかかる
鰻丼で三日持ちます口封じ
日焼けしてゲートボールの花でいる

河内長野市　井上喜酔

お花見の人出に迷う医者通い
春ですね雨の音にも心にも
勤めたら遊ぶことから習い出し
春スキー野沢土産でごまかされ

河内長野市　植村喜代

千人のこころふれあう瀬戸の道（瀬戸内ツーデーマーチ）
急坂のコース楽しむ足達者
倉敷のアルプホルンの音に酔う
散る花よまた逢いましょう樹の下で

岸和田市　芳地狸村

家庭愛ほのぼの伝う夫婦傘（金太さんの句集）
好きで持つ絵筆で心の絵が画けぬ
遠足の子を押す母の車椅子
こんにちは九官鳥が声かける

岸和田市　清野こう

買い手ないシルバーシートのエネルギー
群羊のひとりとなって朝を出る
肩書きは無くとも父の持つ重み
抜擢の椅子が重荷となるノルマ

岸和田市　三輪通彦

思い直す刻の正座よおごそかに
他人ごとと思えぬままのお節介
その内になどとのどかな日をなやむ
好き嫌いはっきり吐いてつつがなし

岡山市　川端柳子

岡山県　井上柳五郎

もしもいう夢ふくらませ追う若さ
母さんが嫁けばよいにと嫌う縁
とぼけかも呆けかも知れぬ老いの父
実印を押した紙から裁かれる

岡山県　荻野鮫虎狼

勇退へ只惜しまれただけの人
体重は増え脳味噌は軽くなり
相撲から野球に続く春の音
日溜りの話明治と大正と

岡山県　岩道博友

人間の脆さを計算休暇取る
春の風辞令で飛んだり沈んだり
老人会予算を組むため入らされ
試飲したワインへ義理を付けてくれ

岡山県　池田半仙

嗜みに髭だけ剃っている傘寿
蒲公英や菫も減ったアスファルト
地方選片目達磨にサクラチル
先方の裏まで読んでいる余裕

岡山県　花田たけ志

春雨に濡れて行かれぬ独り者
避けられぬおさらばそれとなく整理
裏からの応援確かな数に入れ
政策を縁故が無視する地方選

岡山県　山本玉恵

気の弱い男に似合うサングラス
不足など言わぬ大正の生れ星
仮面の一つが脇見が好きでずれ落ちる
枕の下を想い一つがゆき来する

岡山県　千原理瑛

烏なぜ啼くお前そんなに淋しいか
人好きが人を呼んでは輪をつくる
雀百までわたしも百まで踊りたい
もっと生きようもっともっと自分みつめて

岡山県　松本元江

覚めやらぬ夢追うている四月馬鹿
たかが人生されど人生浮世舟
発車ベル心残して乗った汽車
沈思黙考おもいあぐねて日が暮れて

豊中市　上田登志実

三月が終わる　かき料理も終わる
四月馬鹿騙されぬのもちと淋し
連休は邪魔せぬようにそっと生く
ボケたとは言わず達観したと言う

豊中市　一瀬福一

二日酔い妻にスイッチ入れられる
スイッチが蛸足だった火事現場
都からこれが最後と手切金
あでやかな女装をあばく喉仏

田舎では住めぬ都会へ来た鴉
旬の物うまいが載けぬ杉花粉
週刊誌アラを食いたい隠し撮り
減る人口増える老人平和ボケ

豊中市　江口明光

ああ七十と一歳これからへ選る旗の色
叛けない心へ振っている反旗
頓狂な色で酔わせる地唄舞
花の色心に残る七分咲き

大阪府　坂口公子

衣食住足りて夫婦の平和ボケ
終電車鬼の仮面が捨ててある
地酒でも清酒と同じ唄が出る
路地裏に住んでっかい夢を抱く

大阪市　井上白峰

改札の前でわくわく顔さがす
継続は上達と言い恥をかく
交通情報聞いてハンドル切り直す
宿六と呼ばれて居ても社長です

大阪市　寺井東雲

花しょうぶ日本の妻のかがみなり
敗者復活夢とは捨てるものでなし
子が減ってさらにお子様王子様
言いたい事いうて女は歳をとり

大阪市　渡部さと美

春爛漫三体地蔵に鹿の群
毎年を約す吉野の花の頃
南朝の帝ドラマの好男子
公園の落花いのちを敷きつめる

大阪市　町田達子

離婚願望買いつづけてる宝くじ
恋破れついつい深爪してしまう
仙人掌の花が男を引付ける
蕗のとう我が家今月赤字らし

大阪市　桝本蕗児

目をつむることに慣れきる子沢山
肩の力を少うし抜いて輪の中に
四季のない花屋の花のひとり言
救急車が来てる団地の冷えた壁

大阪市　上田柳影

天は二物このごろの歌手皆美人
肉親の訃にうろたえる電話口
夫比べ子比べ済んだクラス会
風致地区人の知らない苦労する

大阪市　岡田ふみ

万札を無雑作に消費税でくずす
ご法事に疎遠の親類繋ぐ酒
被爆者の証人捜し今も尚
他人の皆様恩人とあがめてる

大阪市　北山悟郎

竹原市　信本博子

長崎の夜は天使が星をまく（長崎吟行）
三代が揃った旅のまるい月
大村湾へ「鳴呼」の言葉を置いてくる
チューリップ畑で親指姫が笑ってる

竹原市　岡本清水

事故死した忘れ形見が幼稚園
引き分けをジャンケンと言う運不運
未だ死ねぬ七十の恋未完なり
娘も四十三孫の花嫁夢誘う

鳥取県　江原とみお

玄関に花ご機嫌はいいらしい
お迎えがくるまで転んだままでいる
嘘をすこしまぜて話をかるくする
さくら散る頃にでてくるさくら呆け

鳥取県　津村八重子

酒のまぬ夫コーヒーで座をうめる
なつかしい思い出宿のしじみ汁
旬の味追ってグルメの舌かるい
あの橋で出合ってからのおつき合い

鳥取県　羽津川公乃

花束の嘘から喜劇幕が開く
花咲けばまた新しい散歩道
ペアルック照れる夫を誘いだす
データーに成人病の子が増える

島根県　藤原鈴江

少女趣味抜けないままに齢重ね
五月かな愛しき風の舞い姿
あじさいの愛がこぼれて雨しきり
無為無策電信柱の風あたり

島根県　北川民子

一歩でも出ればよかったあの時に
うれし泣き人の風にも酔うてみる
真っすぐに雪が降ります春近し
山茶花の一枝見ている昼の月

島根県　高野律子

若葉萌え今年の夢がまた開く
子育てに夢中ですぎた皺の数
日銭追う老父の肩を風が押す
清貧に耐えて堂々父卒寿

出雲市　板垣夢酔

リラックスしすぎた脳のだらしなさ
涙腺の弱さテレビにいじめられ
縁切ってやっても戻る竹トンボ
二合から口のチャックが緩み出す

出雲市　石倉芙佐子

隅っこでふさぎの虫が動きだす
芽出し雨口先だけのほめ言葉
前世からの約束を説く石仏
青リンゴもう故郷に父はなし

出雲市　久谷まこと

島影の重なりあって春霞（四国遍路行）
咲き急ぐ花も遅速をわきまえて
雲海を悟り求める遍路行
一寸の虫が反逆して困る

出雲市　小白金房子

やぶ椿咲いて人恋う神の庭
花便り島は絵になり唄になり
一鍬の泥の重さで春を呼ぶ
七面相まねて留守番孫のもり

米子市　金山夕子

苺模様のスプーンにいつもモーツァルト
当り前の人生だから生きてゆく
不思議な国のアリスと笑う初夏の午後
まっすぐな言葉を仰ぐ尊さよ

米子市　小村てい子

エリートと同じ香水でももてず
さまざまな噂にくす玉が割れぬ
咲けば散る性の花芯は燃えている
花籠にあふれる彩の名せりふ

米子市　木村富美子

ハンバーグに入れて人参食べさせる
この秘密埋める大きな穴を掘る
渇いた心隣の猫に見すかされ
父と母さそい合せて逝きなさる

和歌山市　青枝鉄治

年金の暮らし揺さぶるのし袋
天下りみごとに着地きめた春
結ばれぬ愛と承知の紅を引く
道草が育ててくれた人間味

和歌山市　山田高夫

美しくそして哀しく喪の女
究極のグルメは母の腐鮓
問一も問二も解けぬもつれ糸
右顧左眄油断も隙も無い男

和歌山市　北山好笑

耳打をするから変に怪しまれ
ああ日記他人を愛したことがない
できすぎた嫁が息子の骨を抜く
狂わない時計にされて狂えない

倉敷市　田辺灸六

子の机要らなくなった寒い部屋
うなずいて聞けば話もまるくなり
頼られて頼って夫婦口喧嘩
帆を上げて着きたい港捜してる

倉敷市　井上富子

床屋の櫛に注文の多いうすい髪
不倫の蕾を秘めたバラとは知らぬ蝶
初心者コースをもたついている私
血液型を辿れば悲恋物語

芋虫の丸さで老いの顔眠る
帳尻の合う日のサドル軽やかに
太陽の味方を背に前進だ
雑兵の今日二十四時限差無し

和泉市　西岡洛酔

占領はされたくないがしてみたい
鈴付けにゆく人も鈴付けられて
当選の後もあの熱あって欲し
成金がええかっこして嫌がられ

尼崎市　岡井やすお

来年も当然あると雛仕舞う
桃咲いて桃より桃の女の子
花暦手の内にある絵の具足す
綿菓子をちぎって歩く軽い足

和泉市　春城年代

ワープロで快気を祝う指をもち
技師ら老い縦書き風に語る席
代返は遠し出席カードの世
余生のふみに句読点なし

町田市　竹内紫錆

陸橋にあがりこころもゆれている
てんぷらにして下さいな雪の下
麦飯を食べたいふるさと思う日よ
付き添いさんに眼鏡を拭いて手渡され

松山市　谷真風

良い毛並継いだが光に溺れてる
老妻の手を引き渡る虹の橋
話題が自分にとび火胸さわぎ
面影を戸籍に残し昇天す

加賀市　細呂木魯木

鍵かけてキー閉じ込めて困る惚け
鈍行の旅が気にあう歳となる
引き出しも預金も土日慣れてきた
竹の子が三日を待たず伸び上り

高知市　北川竹萌

空のカンバスたくましき線飛行雲
ありがたや八十路を生きて花のトンネル
花の土堤鴉が散歩してござる
桜にはかかわりもなし選挙戦

寝屋川市　宮尾あいき

消費税で勝ち消費税で敗れたり
まっすぐに歩けば蟹に邪魔される
一円貨拾って欲しいと光ってる
吸殻の仕末考えながら吸え

仙台市　川村映輝

正論の刀は返り血を浴びる
紙コップいつも一杯注ぎすぎる
賞罰はなしというのも賞のうち
蒸発をしても晩まで帰る妻

海南市　三宅保州

あと少し開き直って老いの城
端切れ布貯めてる母の小引き出し
おしみなく拍手を十八歳貴花田
友訃報テレビは桜開花告げ

堺市　柿花紀美女

辛抱の重石を除けて寡婦も春
淋しさと背中合せの気楽な夜
忍従へ女の胸の黒真珠
定年離婚まで頑張ろう妻の面

西宮市　秋元てる

いそがねば急がねばまた雨になる
限りなく強くてやさしさにころり
いつの日かとまらぬ筈のない脈よ
宵の明星あるロマンスを確かめる

吹田市　栗谷春子

菜の花や化かされ上手な石仏
かくれ里桃の名所は長寿村
切株に座ってリーダーらしくなり
草餅やゆっくり見てる旅の地図

守口市　森川まさお

一木一草詩人になって春
分校の草木も芽吹きあいうえお
カラオケボックス声良しの鳥籠だ
春うらら　こけしと僕は眠たがり

十和田市　斉藤劦

年金が少し足りない手内職
子を生まぬ指が下手な握り飯
神経がピーポー聞いた午前二時
すそ分けは三四階だけのおつき合い

高槻市　竹内花代子

穴一つゆるめて大皿平らげる
昭和一桁轍がだんだんゆるみ出す
卒業式明日の自分はまだ見えず
試着室こんなはずではなかったに

富田林市　松本今日子

耳たぶも染まらぬ年になっていた
七分咲き誘う言葉を考える
中流意識ふかふか布団干している
パステルのネッカチーフで春を摘む

静岡市　薗田獏沓

春うらら猫も私も桃源郷
巣立つ子ら国歌も知らず老い哀し
病抜けした姑の意気白寿まで
戻れない道なら花を植えて行く

姫路市　丁坪サワ子

新しい生命生まれる鶏小屋に
幼名を気安く呼べぬ地位の人
睡魔来る春うららかに針仕事
茶陶展目の正月がいいところ

境港市　細木歳栄

退職金誘いを掛ける儲け口
ご先祖に詫びて学資に換える土地
朝刊が昼着く島の人情味
悪女では困るが貞女肩が凝る

箕面市　椎江清芳

耐性菌薬と力競べする
おばさんのバッグ座席を先取りす
週休二日小学生の塾のこと
荒波を越えた男にしてやさし

藤井寺市　福元みのる

オーイ春　津軽の婿になってくれ
リンゴ咲く岡へ初恋埋めて発ち
山うどの香りと地酒　亡父にあげ
津軽弁の亡母は心に鎮座する

五所川原市　加藤彩人

草笛を鳴らして待った遠い恋
救急車に乗せる毀れたオルゴール
一期一会今年の花に逢うている
塗りたてを猫が歩いた犬走り

松江市　竹内すみこ

離婚届おんなの意地のみとめ印
目に青葉メバルたけのこ木の芽あえ
男じゃないか四の五の言うな花吹雪
無頼にはなれぬが少し崩れよう

八尾市　片上英一

花園のような彩り薬箱
くたびれに来ました花の人の波
旅の宿気取り屋さんの高いびき
アダムとイヴでなくても欲しいリンゴ

茨木市　堀良江

窓際で葉巻をふかす天下り
鯉のぼり用意しますか秋篠家
星影のワルツ左遷も栄転も
親らしいサービス連休汐干狩り

大和郡山市　坊農柳弘

美しい言葉ですごい事を言う
ライバルの両手の胼胝に負けている
神様をうたがったのに罰がない

鳥取県　幸家單車

誰一人泣かさず死んで行きたいよ
ワンアウトまでは笑って見ていたが
訣別の歴史か今日も星がとぶ

大阪市　塩田新一郎

スプーンで貰う心の通う粥
移り香の妻の枕がいとおしい
一線を引いたまんまの長い春

大阪市　冨岡温子

大阪市　松永すすむ

ハイレグの水着姿に鴉の目
ひいばあも女四書読む人だった
外人もオーワンダフル武者飾り

大阪市　清水利武

春平和　酒とビールと歌に酔い
パチンコに狂いサラ金に追われる身
老いの風邪酒も煙草も取上げる

倉吉市　淡路ゆり子

いそいそと一人の時間精を出す
好きでも無いに好きだと言える花の下
辿って見れば家系はみんな酒が好き

鳥取県　乾喜与志

食欲があるから生きること楽し
バナナ半分を腹と相談して残す
ごみの捨て場に水仙が咲いている

鳥取県　田村喜美子

昭和一桁君が代だけは忘れない
燃えつきるまでは恋するつもりです
散歩好きのポチをデートに誘ってる

和歌山県　岩崎瑞穂

話の輪ひろげて相手煙にまく
札束に眩み本心見失う
赤信号やっと追いつく老いの足

和歌山県　西口忠雄

百歳の笑窪家族に包まれる
小指と小指世間の風に耐えている
悪遊びしないと思う方が馬鹿

堺市　荒川磯子

うっとりと夕焼雲のなかに居る
招待をいちど拒んで冷えた椅子
好きだから愚か承知でついてゆく

島根県　松本はるみ

雨の日の雨を見ている猫抱いて
胃袋にたまる三面記事の味
黙秘権悲しいものをもてあまし

唐津市　筒井朴竜

一管の尺八虚無僧修業中
二重奏で囃す祭りの笛太鼓
恍惚爺園児と同じタンバリン

米子市　川上より子

コーヒーで買ってる時間　小宇宙
躱す術つかわぬままに逝き給う
鼓動の奥を流れている亡母の河

西宮市　瀬尾六郎太

神風とアラーの神で茨道（湾岸戦）
住みなれて登頂未だし甲山
新部長小言幸兵衛あるかもね

静岡市　安本晃授

透明な掌に醜聞の影が刺す
幻覚の女涙を武器にする
目立たない要にいつも母の席

奈良市　米田恭昌

隙のない美人煙草を喫う怖さ
愛すればこそと嬉しい嘘を言う
みぞれ降る奈良町歩く女傘

尼崎市　住谷石舟

晩酌は一合明日の糧にする
消費税分だけ値引き明細書
おはようの声も大きくなって春

吹田市　井上照子

ドック入り油気ぬけた三日間
ジューンブライド花のアーチの下で跳ね
犬の名を呼ぶと坊やが返事した

守口市　結城君子

食前酒苦くひろがる春の風邪
岡山の姑に及ばぬちらしずし
背の高い友から受ける威圧感

川西市　野村静雄

何処からか小鮒が湧いてくる温さ
横柄な口をきいてる聴診器
酒とろりロマンチックな老いになる

岡山県　直原七面山

梅雨に倦み香を焚く女
成功を神に祈って科学者で
ミシンを踏む祖母はきっちり百歳で

全日本川柳愛知大会

日　時　**6月9日**（日）午前10時開場
会　場　名古屋市公会堂（昭和区鶴舞公園内）
会　費　3000円（昼食・記念品代共）
宿題　第一部（事前投句を締め切りました）
「探す」　青木晴嵐選
「瓶」　定本広文選
「本心」　山崎鮮紅選
宿題　第二部（当日出句・締切正午）
「学ぶ」　山本翠公選
「風景」　藤本静港子選
「緑（みどり）」　鈴木寛六選
「信仰」　坂本雨山選
各題2句・各部の各題とも未発表作品に限る
前夜祭　**6月8日**（土）午後6時～8時
会　場　名古屋クラウンホテル
費　用　8000円

自選集

湾岸の掃除屋というはまり役
本心を知ったら入れる票はない
堂々と唱歌改ざんされている
演出はすべてマイナス都知事選
一票へ最敬礼はもう古い

大矢十郎

ボールペンはしゃぎ通してこと切れる
割勘と言う公平な民主主義
器用貧乏で長生きをしています
ふるさとへ足が向いたら負けになる
極楽を見て来たようなお説教

月原宵明

春の土手花よりうれしつくしんぼ
サクラサクラ馬齢を一つまた重ね
杯の糸底辺にある野心
日の丸にアイロンかけて待つハタ日
夫婦にも夫婦としての車間距離

松川杜的

遠い日の夢が覗ける指眼鏡
私の影追ってる妻の守備範囲
別れにする酒を呑んでる雨の音
おおらかな生き方　男下駄をはく
なが雨に干したい心の裏がある

岩本雀踊子

さくらぱっと散り花見酒すべり込み
休日の多さへ預金量下げる
行楽へパパも揃うた手弁当
信仰の旅まだとし寄りの気になれず
梅雨が来て気になる湾岸の黒けむり

藤井明朗

自慢する程ではないとマイク持つ
消費税用の小銭も入れてある財布
飼主のようにパトロン甘えられ
薬にも毒にもならぬ部下が居る
肩書の軽いジョークが攻めてくる

辻白渓子

公約は知れているから屑籠へ
行く当ても来る当てもなくいる独り
思い切ってゲートボールに加わるか
儲かればなんでもというものでなし
本読んで泣く優しさを笑われる

工藤甲吉

ふすま張ることも覚えて生かされる
働けるよろこびふすま張り習う
よろこんでもらえた仕事自信わく
シルバーの誇り真面目な汗流す
技みがく汗にボケなど近づけぬ

小林由多香

S22年5月1日妻死す

メーデーの列へ報せる妻の訃を（社の同僚に）
サマータイム妻は知らないままに逝く（初めて実施の日）
お見舞いに来たがと路郎座したまま（偶然、恩師の来訪）
五月一日やっぱり妻に逢いに行こ

黒川紫香

もう先が見えてやさしくいたわられ
落ち着いていたら土俵を割っていた
朝が来て野性静かに目を閉じる
ワンカップ働き蜂がたたむ羽
くたびれた酒が哀しい寝息立て

遠山可住

老いさせては駄目と頑張る万歩計
万歩計事故の少ない道を選る
健脚にリズム狂わぬ万歩計
行く先は気の向くままに万歩計
陽光に身なりも軽い万歩計

金井文秋

通院の順番待ちの間に一句
この次はどこが痛んでくるか梅雨
妻老化また包丁で指を切り
これからは邪魔にならない隅で生き
後遺症の一つか涙もろくなり

野田素身郎

花吹雪拗ねた幼女のあとを追う
梅桜 渋茶に固執するほとけ
縁あって赤い鼻緒の丸い下駄
踏切りを渡れば春の吹雪あり
神父様と二人花見の蜜柑むく

波多野五楽庵

青若葉　父よりながく生きている
影武者が頼りにならぬ柄頭
翔び迷う暗視装置が欲しくなる
雑言の後遺症かな雨しとど
切り株の年輪数え見過ごせぬ

野村太茂津

逢いたしと思うばかりで桜散る
女の子がいたらと思う気の弱り
わたくしを知りすぎているボールペン
節くれた指だ亡母にそっくりだ
和歌山へ行ってきたから雀寿司

小出智子

仮の世と言えども春の風が吹く
副作用のことには触れぬことにする
油田炎上　平和に遠い遠い空（中東　三句）
コップの中のいくさ皆んなで覗きこむ
フセインの武力　国民とは別にあり

正本水客

ほんものより代理の方がよく喋り
ご繁盛車三台乗りつぶし
満腹が乳房くわえたまま眠り
猪口三杯オヤマア無口が喋り出し
月一度朗らかムードにしびれ合い

本田恵二朗

うっとりと山の夕焼見る湯壺
月おぼろ言いたいことがまだ言えず
負けて来た私の短い影法師
親馬鹿も詰めて句を娘に送る
男なら泣くなと孫をはがゆがり

藤村〆女

見えぬもの浮かび見つめるものが消え
花どきの炬燵に運ぶ母の飯
蛞蝓の嫌いな妻の乾布巾
刃ものより竹篦役にたつときも
ささやかな奢り鰈を二枚買う

久家代仕男

指ずもうの頃から父を越えたくて
不完全燃焼のまま勝名乗り
第三の私と仕切り直しする
捨て身になれば土俵で恩を返せよう
運命と四つに組む気の水を飲む

八木千代

二度三度呼ばれてやっと返事する
ふと夜中となりの妻を確かめる
味気ない三食たべる妻が留守
家中の笑いが見える灯が温い
鈍行の旅に気兼ねのないふたり

児島与呂志

雪の伯備線（三月十六日）

朱の塔の雪にはにかむ宝福寺
白皚々高梁川の瀬はやさし
ことさらに高く松山城の雪
足跡の雪に悟りの頼久寺
方谷の庵こじんまりと雪

水粉千翁

年金通知一言妻の愚痴を聞く
住みなれて妻にも役がつく団地
アッケラカンの夫へ妻の苦労性
羅漢さんの膝元で咲くシャガの花
シャガの花 尼寺の昼 音がない

阿萬萬的

多種少量陳列棚をカラフルに
進むしか許されなかった兵の墓
怪ったいな字だが色紙で躍ってる
歓心を買いたい嘘が太り出す
粗供養のテレカ仏へ電話出来るかな

西田柳宏子

六月の雨に染まった花のいろ
ラッシュアワー隣のひとを愛せるか
国道を渡る猫にも右ひだり
皆さまの銀行でない儲け方
らぶ神戸まのんれすこよ幻よ

高杉鬼遊

樹間よりどんどんあがれ水の精
中くらいの信心お神水旨し
海碧くカメラ盗られしグァム島よ
傷口を笑いとばしてくれる友
手加減をしてたらツキに見放され

河内天笑

竹原川柳会創立35周年
『竹の子』第2集発刊
記念川柳大会

とき 9月8日（日）午前9時開場
同11時半締切

ところ 大広苑（竹原市竹原町新開）

お話 川柳塔社主幹 西尾 栞

兼題 「新」 小松原 爽介選
「旧」 去来川 巨城選
「真」 渡辺 蓮夫選
「情」 礒野 いさむ選
「美」 橘高 薫風選

特別課題 「未完」 小島 蘭幸選

※各題2句・特別課題のみ**8月20日**必着で事前投句（欠席投句拝辞）

会費 2000円（句集・大会誌・軽食呈）

投句・連絡先 〒725 竹原市竹原町4535—5
小島 蘭幸
☎0846(2)—2—6626

—同人吟

秀句鑑賞

—五月号から

土橋螢

大脳に刺激　美人の珈琲館

金山夕子

美しい女が珈琲を点ててくれる店、背筋を伸ばして美味しいと喫む。そんな米子の店を教えてください。名詞止めもうまい。

春の道　地雷は埋めてないだろう

新家完司

雪が解け春が来て春が去る。その間に地雷が爆発したり橋桁が落ちたり、しかし山陰道はゆっくりと春が行く。とても平和である。

雑巾をきれいに濯ぐ恩返し

西山幸

女になってせめても雑巾をきれいに洗う。〝きれい〟と〝恩返し〟ということばに作品の優雅さを教えられる。

旧暦に梅も桜も芽をさまし

松本忠三

ほんとうの花は歳時記の四季にそれぞれその時を守って芽を出し花を咲かす。同化作用といういのちの刻みがある。また来年の春まで梅は梅、桜は桜、わたしも生きてゆく。

家族だけ知ってるガンの日向ぼこ

高橋千万子

癌告知がなかなかできない。知らせるべきか、知らすまいか。家族の心情はやるせない。しかし、癌であることを知っているかも知れない。そんな現代の風姿である。

辛抱の形に足袋が干してある

奥田みつ子

女とは耐えるものなり、とは封建的ですが耐え抜いたよろこびは格別だ。辛抱の形に女の執念を感じる。そしてうれしい日を待っているひとりの女がいる。

辻褄を合わせるために回り道

田中透太

人生流転、辻褄合わせの現代社会に生きている。じっとしていても世の中が変わる。人の世に合わせるために回り道をするわたくしがいる。

まだ母の知らない人と御堂筋

小池しげお

相思相愛のふたりが御堂筋を歩きながら、今度母に会ってください。と御堂筋の名詞止めに軽い愛の余韻を感じる。

永遠のテーマ男だな　女だな

山川克子

理想と現実、男性観、女性観、男らしさとは、女らしさとは、追求すればするほど醜いものかも知れない。また、とても美しいものだ。

衝突という血みどろの巡り逢い

若宮武雄

衝突という事件から友情がうまれるドラマがある。交通事故の加害者と被害者がその苦しみを分かちあって、同情から愛のめぐり逢いをつづける。苦しみや悲しみのわかる人間になりたいものである。

信号が赤から青になる喜劇

藤田頂留子

ストップ、オーライ、赤青黄の信号、交叉点、人と車、地上と空間、十人十色、思いおもいのドラマが通り過ぎてゆく。

おしゃべりな烏と種を播きながら

西村早苗

権兵衛さんが種まくと烏が拾う。烏が拾った種をまくと、何が生えてくるかな。播きながらがものを言う。

天と地へブランコ二つ子が二人

川端柳子

天地（あめつち）の恵みのふたりの子、土に踏んばる、ブランコに乗せる。まさに天地のゆりかごである。大胆に幸福である。

今夜こそ出雲時間を捨てて逢う

石倉芙佐子

何所にだって自分中心で約束の時間にルーズになる弱い人間がいる。今夜こそOKのときめきを覚える。

沈丁花出合いがすこし遅すぎた

西口いわる

人生の裏もおもてもよく見える人生経験をふり返ると、人と人との出合い、別れは、男も女もさまざまである。悲しいことは半分ずつ分けあい、うれしいことは二倍にも三倍にもふくらます出合いの大切さを思う。

川柳太平記（157）

川柳の群像

深井凡凡

東野大八

「私が凡凡さんに始めて会ったのは、遼陽図書館長時代で、この人は単独で『塔麓人』を発行、川柳、柳文を満載し、地方柳界に軌範を示された。その後、満州各地に川柳会が乱立し、綜合柳誌の発行の要望が高まったので、この大連川柳会の顔ぶれが主体となり、大陸川柳会を結成、機関誌『川柳大陸』（石原青竜刀主宰）が発刊されるや、凡凡さんは率先して同人に参加、協力された。

ところが凡凡さんの身上に、一大転換が起こった。それは、本籍地奈良県生駒郡平群村の正光寺（祖父・伯父他界）の跡継ぎのため余儀なく内地に帰って仏門に入り、住職得度を受けられることになったのは昭和十八年秋であった。

これを機として満州における凡凡さんの柳歴は終ったようなものであったが、内地帰還後の凡凡さんは、終戦で引揚げる川柳人の連絡所としてまず川柳むつみ社を開設し、同時に水村京介、北垣咲也の諸氏とともに『川柳むつみ』と題する柳誌を創刊、引揚者の帰国消息を詳報したので、次々と帰国川柳人が正光寺へ身上相談を兼ねて訪れ、正光寺の坊さま凡凡さんの身辺は多忙、その接待に凡凡さん持前の俠気と世話好きの風格が遺憾なく発揮された」（『凡凡つれづれ風船』序文高橋月南）

『川柳むつみ』誌は、昭和20年12月、つまり終戦四ヵ月目の創刊。敗戦直後の用紙・印刷等の最悪の事情の中で、A5判24頁という孔版ながらまともな柳誌を毎月発行し、昭和24年1月号をもって世情の落着きと、引揚げ川柳人の終結を見越し、本来の刊行目的の使命は完了したとし、20号をもって廃刊している。その創刊号巻頭の凡凡の檄文（原文）。

「通信連絡杜絶以来、早や半年に垂々とす。在満在華の川柳人は如何にと案ぜぬ日とてなし。戦災者、復員者、海外同胞の引揚げ者等についての報道は、日々に人情の淡きこと、冷酷な世相への反駁に紙面の殆んどが覆われ社会悪の幾パーセントかは、世の人々の白眼視にその因を為せりと。この報道を聞くごとに、このままではならぬと鞭打たれる。

戦時中、又戦前、海外在留川柳人の後援により、又は、その芳志により相当の援助をうけた大家や柳誌が相当の数にのぼった筈だ。それらの大家や柳誌らが率先して日本の川柳家を一丸とする海外在留川柳人援護会（仮称）なるものを作り、引揚げ川柳人に対しての諸問題を斡旋・処理し、並びに残留川柳人との連絡諸般に万遺漏なきを期してこそ川柳人面目躍如たりというべし。

然るに筆者に触れし活字は、未だに官僚的援護会や、諸文化団体の動きのみ。唯に自己保全と、柳誌の継続と群雄割拠の斯界にわれ雄飛せんとする柳人のみに占められんか、こは川柳人の最も忌むべき道に非ずや、少くとも柳人は柳人の手で救へ、一人は一人を必ず

援護せよ。まして在来恩顧を蒙れる大家並に柳誌においてをや。

心ある人々よ、川柳人よ、相共に海外在留川柳人援護会を速急に結成せよ。而して引揚川柳人に、引揚者の悲哀を與うるべからず、残留川柳人に不安を抱かすべからず、川柳人よ、真の川柳人の結束を期せよ。この意味においてわれらは『むつみ』によりて、海外在留の柳友援護にその万全を期したく運動中なり。重ねて望む。全国の川柳会、川柳人よ結束して海外在留川柳人援護機関を設立せよ—

海外在留川柳人援護会設立同志会

川柳むつみ社深井凡凡」

この檄文中の、一柳人が一人の引揚げ柳人を救えの言質どおり、凡凡は引揚げ柳人の親友山下岸柳を平群郵便局に、高橋月南を平群村国保診療所に就職を世話し、福井天弓を奈良県民生部に勤め口を見付けたりしており、まるで引揚げ柳人の民生委員役を勤め、その親身の世話を受けたものは相当数に上ったのである。

本名・深井章、明治42年11月7日奈良県生れの満州育ち。奉天中学卒業後、遼陽図書館長となり、杉田半生棒らと柳誌『塔麓人』を発行。地元邦字紙に柳壇を設け選者。昭和2年春、満州初の全満川柳大会を遼陽で催している。このことから在満柳人との交友の幅を広げ、昭和13年3月大陸川柳会が結成され、機関誌『川柳大陸』（石原青竜刀主宰）が発刊すると直ちに同人参加し、『塔麓人』を合体させている。

しかし昭和18年奈良県の伯父の死去で、正光寺を継ぐべく帰国の余儀なきに至り、住職得度して沙門となる。夫人文女も川柳人で、彼女の方は僧籍が古くて先輩格だった。

終戦後は奈良県庁民生部に勤め、終戦後の地元の人たちにも持前の民生委員的世話ぶりを発揮して人望があった。

このあと昭和36年8月、大陸柳界の恩人と称され、その柳恩をうけた高橋月南の立派な句碑を正光寺境内に建立。麻生路郎・岸本水府や堀口塊人を招いて、主だった大陸川柳人多数の参加の下に建立句会を催している。これとともに、昭和50年8月廃刊した柳誌『むつみ』復元と合わせ、句文集『凡凡つれづれ風船』（B5判三百二十頁）を刊行後、昭和54年5月9日内臓疾患のため正光寺で死去した。享年69。法宣院釈章道が法名。

『川柳むつみ』は、創刊後日を遂って大陸からの引揚げ柳人が続々と登場する。北京からの石原青竜刀は、同誌に「川柳界に與うる書」高橋月南の力強い帰国第一声などは、海外川柳人の心意気と再建日本への頼もしい明日への鼓動の昂りを示し、大陸派川柳人の相互扶助の実を固め、やがて昭和40年に結成された大陸川柳人同窓会へと結びつくことになる。

同誌№10号には「引揚柳人激励誌上句会」で、路郎・水府・紋太・三太郎・周魚・雀郎の六大家が選に当り、また二百余名に上る引揚者リストの特集は在来柳誌のリーダー達を感銘させた。

終刊に当り『川柳むつみ』の編集に当ってきた山下岸柳は次のように書いている。

「敗戦直後の苛烈な世情の中で、小さくても柳誌を出すということは並大抵なことではない。然も彼（凡凡）とて戦争により満州の全財産をフイにした犠牲者である。失礼ながら田舎の小さい寺で村の診療所（現在は奈良県庁）に勤めているだけで金があり余っているわけではない。寺のお蔭で食うことに事欠かぬ暮しとはいえ、彼の収入の大部分は本誌につぎこまれていた。誌代も同人費もとらずただ一筋に引揚柳人の為に頑張った。引揚げ柳人達の惨めな境遇に、一道の光りを與えたのは彼だ」

盛り上がる力わが眼にみつけたり　凡凡

▼次号は「白岩文衛」

柳籠裏三篇研究（八丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

125 **はやひがおとくと頼政すゝめてる**

青木＝治承四年（一一八〇）夏、源頼政、後白河法皇の第二皇子高倉宮以仁王を奉じて平家討伐の兵を企てたが、事は平家方に漏れ、宇治川を挟んでの合戦となるが敗れ、平等院にて自害。年七十六。

主題句は、謀反をすすめている様。

高くらへそくらをかいに毎夜来る　一六31

古来稀なる頼政のむほん也　一五42

佐藤＝賛。以仁王が慎重で時期尚早をいうに対して、頼政は、「いや、早い方が有利でござる」とすすめている図。「早いがお徳」は物売りなどや、紋付などの口上として常套的なものである。今でも大売出しの時など、客引き口上にこれを言う。

紀内＝佐藤氏「早いがお徳」以下賛。

夕すずになると頼政すすめに来　拾五28

虹を追っておすすめ申す源三位　六5

第一句は、主題句と同様の趣向で、ドラ息子を遊び仲間が迎えにくるのをかけている。

岡田＝佐藤説、賛。つまらぬ句。「早いがお徳」の文句取りだけがミソ。

126 **ひぢを曲ヶて枕としくどひてる**

青木＝仕立物などしている女の側に不遠慮に寝転んで、自分の肘を枕としてくどいている男。同工異曲の句に、

口説く奴すいつけながらにじり寄り　七22

寄りなると是でつくよと娘いい　安七梅1

指抜きは握った人の手に残り　四〇31

佐藤＝情景としては、礎稿のような場面も考えられるが、句の趣向は論語の文句取りを利かしたところがミソ。論語述而篇に「子曰飯疏食飲水、曲肱而枕之、楽亦在其中」とあり、こういう形に転用されては論語も形なしである。そして、そのパラドックスの面白さもここにある。

肘を曲げ枕とし乳ほうばらせ　一七9

岩田＝賛。

ひぢを曲げ枕としてるねはんぞう　篭三23

ひぢをまげ枕ぞうしをよんでいる　三一28

西原＝同。

そこが後生だと若後家口説かれる　二八23

岡田＝同。

127 **あんまりむざん萩垣へしめし也**

青木＝「萩」は萩寺の略称として使われる。萩寺は、亀戸慈雲山竜眼寺の異称で、萩の名所として知られていた。

主題句は、萩見物の帰り吉原へ回って女郎買いをするのだが、察しが悪くておいてけぼりを喰った男を萩垣へしめし也と言っている

のではなかろうか。

佐藤＝「萩」と表現して「萩寺」を意味する句もあり、それは礎稿のとおりだが、この句の「萩」は一般の萩でよいと思う。「萩垣」は萩の生垣のことで、萩という植物は風流な草で、特に花時の変態は美しく、風雅の友とされる。

主題句は、その風雅な萩の生垣に、おしめを干し並べている没趣味を難じたもので、これは心ある者から見れば確かに無残というべき光景であろう。

釣花生に手拭のざつな内　　第一23

これなども、同巧の句と言うべきだろう。「ざつな内」は「だらしのない家」である。

八木＝「しめし」を立小便と考えていますが、こういう突飛な解も時には如何。

西原＝八木説の立小便に賛。「しめし」を「おむつ」と取るのは、用例や萩垣に干すことからして不安。

岡田＝佐藤説に賛。ただし萩の垣根の上にオシメを乾した粗雑さ。不風流きわまりないが、萩の花がホロホロ落ちることでもあろう。

128　**めいわくさ余所からも来て書ィて居**

青木＝遊女が客を振る手に、客の枕元で馴染客宛の手紙を書くことがあるが、ご丁寧にも余所の部屋からも、別な女郎まで加わり、手紙を書き始めた。迷惑千万この上無しの振られ客。

寝まいとはもふしやせんと書いている　二〇22

枕元わき目もふらず書いて居る　傍二2

八木＝賛。他にシャクを起こす手もある。

岡田＝同。

129　**琴は飛こし三味線ハころばかし**

青木＝琴は奥様。三味線はお妾。殿様とか大尽とか言われる特権階級の奥方も、鼻に付いて来ればご寵愛も疎遠となり、目新しいお妾の方へ足繁くなる。

琴はたまたま三味線は毎夜なり　傍三7

奥様ははめるお妾握るなり　傍五8

佐藤＝「琴は飛びこし」は例の華陽夫人の故事。「三味線はころばかし」は単にころび芸者の暗示と思う。琴と三味線の間には別に因果関係があるのではなく、二者対比の言語遊戯的な句と見てよいのではないか。

七久保＝賛。この妾は、

立つものを寝かすばかりの御奉公　三六24

なのです。

岩田＝佐藤氏説に賛。楽器に「飛びこし」たり、「ころ」んだりという動作を結び付けて面白く対比させたものであろう。

岡田＝佐藤説に賛。

130　**ごう天井へ名をつるすよい女郎**

青木＝天明以降、新吉原で繁盛した江戸町一丁目の大見世、五明楼扇屋宇右衛門抱えの上妓に、花扇と滝川とがおり、花扇は書家東江源鱗について書道を学び、自筆の額を三囲稲荷社へ奉納して、当時有名となった。一方、滝川の方は和歌を加藤千蔭に学び、「ますかがみ清き流れるよすがにて、塵なき空の月ぞやどれる」の歌を大額にして浅草寺の本堂に献上したという。

主題句は、右の両者を詠んだようにも、また何れか片方のようにも思える。

扇屋の要東江流を書き　二五5

あふぎやへ行くので唐詩選習い　二〇31

佐藤＝格天井とあるから浅草観音への奉納提灯と思われる。

明るい信心傾城と役者なり　三四14

安い女郎は知らないと提灯屋　一〇六35

岡田＝同。



黒川紫香選

村中がみんな見に来る過疎の嫁
御主人はいい方ですねと他人が言う
フセインにまだ髭がある戦後処理
嫁った娘が時々大根抜きに来る
腹立てて出る玄関のジャンプ傘

出雲市　伊藤寿美

戦争を知らない舌の食べ残し
大勢に押され妥協のバスに乗る
病室の寝息もチェックする天使
青春を軍靴で踏んだ日の悪夢
顔ぶれが揃う岩場の潮加減

松山市　白石春嶺

散りいそぐ花にせつなさ問いかける
幸せですかやさしさが揺れている
さよならをしたのに帽子そばにある
きれそうな絆電話でたぐりよせ
愛する人をつつむ翼をもっている

鳥取県　大角幸代

花火ドカンと何時かは揚げてみるつもり
ひとつ拾ってひとつ落してそんな知恵
振り向けば泣くかも知れぬので走る
やっかいないのちをくれた父と母
バスが来てやっとさよなら出来ました

藤井寺市　高田美代子

モナリザの笑みでオトコを惹きつける
青くさい理屈でＰＴＡのＰがくる
脳天に響くお喋りやめなさい
皆が苦しい時の美談はほんものだ
乱の年月刻む墓標へ風優し

佐賀県　寺中三枝子

口下手で扉を開けて貰えない
足跡のみだれを恥じる峠みち
虹ばかり描きたしている筆のあと
裏貼りの理由が整いすぎている
正誤表みたいな人と相席に

名古屋市　藤井高子

富田林市　池森子

雫まできれいでいたい花野菜
サラダ菜と春のおんなはダイエット
大根の白さに嘘がつけなくて
瞬きの速さで娘もう二十歳
裸婦像も春は視線を意識する

富山市　大西桂子

母入院万感こめてちらし寿司（母を偲ぶ）
帰れぬと悟った母の旅支度
動かない体を孫がゆり起こす
夕もやに白蓮の花亡母の顔
母が逝き夕焼け道が遠くなり

京都市　本荘福子

年下の上司敬語で問うて来る
発車ベル哀愁もなく押しこまれ
予備校からお待ちしてますとの返事
泣くがいい男と逃げて来た女
息子二人老後安泰とは言えぬ

静岡市　沢田きん

遠い日の許したキスの淡い恋
反省をしているうちに眠くなる
退屈へ小説ばかり読んで居る
花いっぱい仏さまにも春が来る
割り切れば噂も空へ抜けてゆく

鳥取県　西原艶子

うれしくて帽子に花を添えてみる
綿帽子　父の涙に揺れました
夢の中でも覚えているあなたの手
お別れの朝のコーヒーほろ苦い
卒業の日からこころが軽くなる

摂津市　木下道子

引っ張っていると信じている駄犬
夕日より朝日の見える宿を選る
ライバルのお辞儀がとても美しい
貫禄がついたつもりの葱坊主
赴任地へまで追ってくる子守唄

出雲市　原章峰

藍染めの綾を表紙に決めている
公園の温もりといる二度の職
柳の芽息子と握手した別れ
赤い靴明るい嫁になりそうな
締め切り日ゴルフ日和に釣り日和

広島市　流奈美子

なつかしい再会がある花の道
自画像が春をバックに落着かぬ
降り止まぬ雨決断をにぶらせる
あきらめも少しまじったマイペース
一行の桝目に炎えるペンダコよ

尼崎市　児玉歌子

男性に詳しくなって縁遠い
かみ殺す欠伸上司と呑んでいる
のんびりと桜に酔うている無趣味
馬耳東風　明日へ続く恋遊び
子へ期待持ち続けてる夜業の灯

熊本県　大川幸子

未だ金も時間も余暇にも縁がない
好きと言うひと言に要るエネルギー
例外な値段ですよへつい迷う
花にされ太陽にされたのは昔
ときどきはじゃれる程度の口げんか

砂川市　大橋政良

胃カメラで心の疵をのぞかれる
裏切りも出来ず無能な鳩になる
ふり返るそこに二つのめし茶砲
一坪の庭から春の匂い嗅ぐ
羽のない鳥が象形文字にいる

兵庫県　森脇和子

春帽子旅の一夜を絵に残す
ラーメンとカレーで留守の出来る孫
足腰の痛み理由に湯の旅へ
サクラ満開個室絵になる詩も出る
あっけなく逝かれてからの寒い部屋

久留米市　鶴久百万両

ある主張メダカの群れに裁かれる
チャンスあれば会おうよ乾杯して別れ
青い鳥　探しあぐねてまだ独り
晶子のような妻へおろおろするばかり
桃太郎のその後は鬼ヶ島で聞け

尼崎市　森安夢之助

五百羅漢　思案している首もある
挨拶に色気が出来た隣の娘
快気祝　病院に居る友を懐う
嫁が来てじぐざぐに吹く隙間風
自己暗示かけ一病と闘っている

尼崎市　的場十四郎

気まぐれな男がくれたチョコレート
育つ子に期待をかけて出るパート
遠足の好きな童の青い夢
さえずりがしたくて帰る母の膝
あの人の酒なら酔いたい春の風

尼崎市　野瀬昌子

日帰りのバスで友達一人ふえ
裏切られ女しずかに爪を磨ぐ
あれ以後は音さたもなし郷里の風
不運かも知れぬ男を追いかける
日向ぼこ　ベンチの周り犬も来て

香川県　工藤吟笑

越えて来た山は今でも懐かしい
冠は一生取らぬ男ビナ
動かずににらみを効かすダルマさん
本物と信じて磨く果報者

尼崎市　尾宮弘治

傘二本しっかり抱いて駅に佇つ
春の陽に両手をかざす一輪車
折り鶴と楽しく語る退院日
梅林で熱い甘酒欲しくなる

大阪市　新井朋子

月に住むウサギは飛んで遊べない
満月の下で私は夢を見る
レコードに閉じこめられた歌姫よ
ブランコを漕いであなたに近づこう

熊本県　岩切康子

足跡を風紋に変える向い風
砂丘の風に逆らい海に逢う
掃除機に反抗するかにほうき持ち
三叉路で犬に伺いたてられる

岐阜市　渡辺杏村

連休のプランに乗れぬ夫婦コマ
ボーナスで買える魅力に手が伸びる
旅行日を長期予報で決める父
汽車ポッポに乗りたくなった老夫婦

島根県　槻谷一葉

開花待つ心をじらす春の雨
言い過ぎて夫の寝顔にごめんなさい
花言葉知りたい花が届けられ
言葉尻とり上げないでジョークです

熊本市　遠山夏生

森を出ることが怖くてかたつむり
通院の薬袋の大きさよ
葉桜になって花見のツケが来る
回り椅子上には上のある会社

芦屋市　黒田能子

断りをポストへ入れてするおじぎ
ラブレター読んでしまった赤ポスト
泣き言を聞いてもらって湧く気力
回覧板猫も一緒についてくる

富山県　高畠五月

骨上げを待つ間に数珠が切れていた
もつれの種残しただけの父でした
三世代中に気ままがひとりいる
病窓に見えるお寺の屋根瓦

佐賀市　古川一徳

母だけが頼り母には嘘がない
助手席に気楽に眠る妻でよし
古希ですかとてもと世辞がくる
飽食の果て気ままになったダイエット

佐賀市　江口万亀子

くどくどと呪文のようなこごと聞く
花冷えに母は遠くの子を案じ
一気飲みのラムネもやはり上手下手
朽ち果てて昔昔を喋る壁

鳥取県　大角正道

新緑をてんぷらにして食べちゃった
被ったら歩いてみたくなる帽子
カーテンの向こうに朝が待っている
ドラマチックな朝を迎えたことがない

米子市　小塩智加恵

父さんのようになりたい子の作文
天国で花を咲かせる種を播く
黒枠に入れる写真はきめている
上役が金の無い愚知こぼしてる

松山市　宮尾みのり

刀折れ矢が尽きたのは若い方
出るとこへ出てそれなりの力なり
聴き飽きた話を今日もして女
女として生きる手もある岐路に立つ

旭川市　朝倉大柏

風向きを狸寝入りがじっと待ち
日本語の怖さは語尾の七変化
片仮名語一つ覚えて若返り
輪の中で音痴の声も美しい

藤井寺市　菊地繁男

ポンと肩叩いて女将が請求書
そろそろと辞世をつくる日も近い
テレパシーか相手も私も振り返り
川原で石を積んでみたくなり

寝屋川市　宮崎菜月

ソメイヨシノ日本の空を染め上げる
花トンネル互い違いに顔をあげ
花の里　見降ろす月が動かない
犬連れてひとりに欲しい花の道

大阪市　亀井円女

財無くも自慢の出来る友の数
出来心と笑うて貰える内が花
風花をまた見られずに冬終る
やさしさに涙見せては笑われる

兵庫県　円増純子

時かせぐお茶一杯の待ち合せ
背丈だけ頼もしいほど子が育ち
アルバイトちょっぴり世間の裏も知り
風に舞う羽根になりたい今日ひと日

東予市　小山悠泉

散り時を心得桜いさぎよい
きれいとは言わず気立をほめてやる
企業秘密へ他社のアンテナ伸びてくる
裏の裏読んで代打へ出す代打

鳥取県　石谷美恵子

今日の雨わたしを諭すように降る
主夫業に慣れてコーヒー上手くなり
偶然の出会いのように待ってみる
親切が過ぎて噂の種になる

利歌山市　玉置当代（まさよ）

真っ当に生きて悔いなく見る夕日
違和感があって入歯に馴染めない
花が咲こうが家のローンに追われてる
調子よく次女がさっさと先に嫁き

鳥取県　美浦美代子

殿様のルーツ辿れば海賊だ
極道は卒業したと墓に詫び
シナリオにない演技して芽が出ない
父を越す峠はつらい坂ばかり

鳴門市　八木芳水

しがみつくだけの価値ある椅子にする
弱点を晒し人間らしく見え
定年のはなし昔が出て紛れ
幸せにつながる感謝忘れ果て

姫路市　松本一郎

老妻と記念日の皿贅を盛る
宝くじはかない夢と知って買う
凡人の悲しさですと捨て台詞
軽々と抱いてた孫がもう抱けぬ

尼崎市　鈴木良征

哀しい顔で矢尻を研いでいる男
五線譜を無視して唄う反戦歌
初孫にうつつを抜かす祝膳
孫出来て孫のリズムに乗せられる

西宮市　菊池トミエ

受験の子寡黙となって辛抱す
様変り競馬場にもギャルの波
こぶし咲く坂の家からヴァイオリン
花けんか知らぬ振りして巡査居る

鳥取県　乾隆風

しり馬に乗ってじいちゃん嫁かばう
似た者で夫婦してます五十年
トイレから電話のベルが鳴りだした
自惚れのシャッポを風にとばされる

松江市　佐野木みえ

あした咲く薔薇に想いを寄せている
朝の陽にまぶしく光る柿若葉
反抗期　子供部屋にも鍵を掛け
葉桜の下でかごめを唄う子等

今治市　渡辺南奉

武器送る国と薬を送る国
みないい子毎日保母の体当たり
ボロ傘を貸して下さいとは無礼
ライバルの前で大きい欠伸する

熊本市　北川一進

一円が足りず千円札を出す
持病だと医師心得て居る聴診器
何遍も同じ事柄喋る酒
白い肌みせて大根売れて行き

吹田市　山本希久子

のびのびと学歴不問の職に生き
昼と夜のはざま墨絵のように暮れ
愚痴聞いてやって駅まで送る傘
宿の下駄男心はスキだらけ

酒田市　永澤裕子

仲人を無事に務めた仕舞風呂
全身に詰め込み帰る緑風
蹉いた時だけ見入る運命線
裏口で仕入れた噂に尾鰭つき

出雲市　岸桂子

口笛を吹いて誕生日を迎え
選挙戦聞く佗助も花盛り
焦げついた鍋に油断を責められる
傾いてごらん素直になれるから

和歌山市　山口三千子

感情が入って話を拗らせる
ジョークだと軽い話にしてしまい
肝心な事は説明してくれず
慰めの言葉ライバルからもらう

鳥取県　西川和子

ああ選挙ちかごろ腰が低くなり
まだ未練　峠で右往左往する
姑の味　嫁に移してから老いる
峠から燃えて一気に陽が沈む

鳥取県　石尾かつ乃

貰いた嬉しい涙よく光り
荒れた田へかかしの帽子とんだまま
名門の帽子手にしてからのこと
新聞の活字を辿る虫めがね

尼崎市　長浜澄子

足袋こはぜはずし寛ぐ青畳
初対面風一たまり連れて来る
期待した職場に期待の星不在
ちぐはぐの返事もあってまだ夫婦

尼崎市　山田保蔵

仲直り出来て大盛食う女
年金で寛ぐわが家雨が洩る
幼稚園モウ東大へ行かせる気
桜見に花見どころか人に酔う

島根県　菅田かつ子

顔たてるほどの顔でなし顔でなし
こぼれ種変なところで芽を出した
腹立てて米研ぐ音の勇ましさ
新緑の土手で拾った想い出よ

京都市　小林英子

うかつにも一人合点の恋をする
ママの瞳が素早く客を値ぶみする
急ぐ孫黄色いぼうし置いてゆき
五月雨訃報ポストにひっそりと

豊中市　三宅つえ子

すてきれずたばねて結ぶ日記帳
雨三日善意の傘は往ったきり
合格日繁盛してる赤電話
傘の雫切ってやさしい顔になる

尼崎市　明壁敏之

花情報聞いて多めに米をとぐ
温い心で愚痴も聞いてやる
貸した金取るのに揉手してたのみ
美しく夕映えのする過疎の村

和歌山市　田中みね

テキストを片手にパパのクッキング
援護射撃に触れて青空取り戻す
説明とはまるで違った道案内
親類縁者みな金持ちで困ったな

和歌山市　堀畑靖子

自叙伝の起草を思いたったペン
今日もまた話すことないけど夫婦
月に行くことより地球守らねば
意地もまあそこまで通せたら立派

和歌山市　森茜

八回目クイズに応募した粗品
うっ憤が消えてしまった洗い髪
どこまでも歩いていたい花の道
宛名だけ書いたはがきが三日過ぎ

河内長野市　大西文次

言い訳をしない男で憎めない
未来などどうあろうとも柿の種
百までも生きると医者におどかされ
手ぐすねを引いて待ってる夏帽子

鳥取市　西村黙光

鈴の音に波長の合わぬ影法師
補聴器のせいか聞こえぬ神の声
禁断の実はじけそうな朧月
素晴らしや魔術を使う化粧箱

尼崎市　吉永伊三郎

色褪せた一反風呂敷にある戦
孫よりは確かに下手だピカソの絵
祭りには新車に女乗せて行く
妻の掌の中で踊っている男

尼崎市　中澤向西

よい仲間　輪の中にいて茶が旨い
テンテコ舞で浮世の波に逆らわず
底抜けの笑いが奇麗なうす化粧
一輪車　乗った少女の赤い頬

ささやかな余生小さな花咲かす
亡母の足跡　平凡ながら踏んでいる
古箪笥　亡母のコントがまだ続く

岡山県　福原悦子

時事漫画　感心したり笑ったり
もしや癌　急にやさしい妻になる
気がつけば眠たい音でミュージック

熊本県　高野宵草

化粧した我が家の嫁が美しい
思い出は奇麗のままで鍵をかけ
泣き出した砂丘の声に春の風

尼崎市　木下義嗣

若人にやっぱり似合うアロハシャツ
横文字のブランド品を孫に聞く
入学へ見栄を飾った参観日

尼崎市　佐野六浦

水たまり跳べると信じていた不覚
お母さんふいに呼ばれた子の寝言
気まぐれに記した遺書を武器にする

千葉県　上鈴木春枝

考えがひと晩寝ると変るもの
かけ違いのボタンに少し反省す
花の雨あしたのすべて許したい

貝塚市　池田寿美子

茶の心残した友の白椿
三世代家にとけこむ嫁の味
飽食のルーツに耐えた芋の蔓

高槻市　芦田静江

年度末あの道この道掘り返し
花日和　家の仕事が手に付かず
学歴が古里捨てる事になり

香川県　木村明人

文豪の言葉で飾るメッセージ
イメージを画いてゆっくり墨をする
二歩後退今日の日記は空白に

枚方市　中山おさむ

老いの夢いつも幼いころのまま
寂しさを派手に笑って強く生き
対岸の戦禍茶の間で見て暮らす

静岡市　柳沢たま

芽山椒たしかな日本の春の味
隠れん坊みつけて欲しい気になって
梅雨晴れ間　青い草笛風にのる

藤井寺市　田中孝子

人許す事も覚えた丸い背な
順番が狂うて噂舞い戻る
燃える余地ありそうペンがよく走る

兵庫県　酒井靖子

羽曳野市　芦田絢子

倦きもせず猫ふんじゃった弾いている
悔い多い日でしたお湯を溢れさす
ハードルの高さに気おくれしてしまう

鳥取市　前田一枝

待ちぼうけ冷えたコーヒー一人呑む
いい便りポストもちょっと赤く笑む
耳に口寄せてしゃべった秘密もれ

香川県　川崎ひかり

カアさんが居て暖かい里の家
半額のチラシが誘う日曜日
望郷の思いを乗せた終列車

尼崎市　田中薫

再会は重たい過去を連れてくる
お役所はくもりガラスの向う側
出窓には金の成る木が置いてある

静岡市　宇佐美寿美

ありがとう帰るコールが嬉しくて
雑草も春を探して顔を出し
タクト振る両手魔法のハーモニー

八尾市　吉村一風

何時言うか妻は待っててくれたらし
花いらんかえ京は長生き出来そうな
左遷地の星は遠くに冷たそう

茨木市　藤井正雄

妻の風邪　娘を呼び戻す電話口
誘ってもいない女がついてくる
童顔も髭面もいる草野球

南国市　窪田圭風

今年また着ない水着が欲しくなる
宿直室で眠れないまま詩と遊ぶ
単身赴任そんな自信が今は無い

静岡市　増田扶美

開発が村変え人の心変え
口裏を合わせる為の咳ばらい
いつ来てもとんぼ帰りの若い母

和歌山県　森三枝子

角砂糖こじれ話の中で溶け
コマーシャル今夜のおかず思いつく
花作りあっさり花を切ってくれ

枚方市　山崎彩子

リラの香に抱かれて郷愁小半刻
本心は駆け込み寺にだけ明す
ブッシュ フセイン 難民の列何と見る

十和田市　阿部喜久江

塩加減程よくきかせ励む日々
好きだけど結婚するとなれば別
結ばれたリボンほどける倦怠期

鳥取県　黒田くに子

一寸リッチな郵便局のミニ画廊
カルチャーへ妻の行動生きてくる
球根が芽を出し春の絵をくれる

岡山県　土居ひでの

ミサイルを撃って空気を重うする
お彼岸が来て約束の花手桶
菜の花の真ん中に居る里の春

鳥取県　山根八重

何回も頼んだ話無駄でした
嫌いでも挨拶だけはして通る
花鋏嫌いな枝に何迷う

鳥取県　太田幸枝

女好きの噂転勤先に着く
愛信じ深くかぶった綿帽子
手の平で夫をころころ遊ばせる

岡山市　中嶋千恵子

美しく老いたし鏡みがいてる
先着に母が坐っている安堵
六十の谷間で燃える恋心

寝屋川市　井上すみれ

引越しの荷へご先祖様おわします
英語のコマーシャル三つの孫に教えられ
帽子とランドセルが春走り

静岡市　小木久子

手を握り温い言葉で励まされ
会社黒字でボーナスの胸算用
ぎりぎりになって約束思い出し

堺市　桜井荘次

へそくりの事には触れぬ差し向い
ライバルが慌てて取った車間距離
うぬぼれを覗き込んでるコンパクト

岡山県　伏見すみれ

私は私なりに回る独楽
風船のような男をまだ頼り
一肌は脱がねばならぬ義理の仲

枚方市　森本節子

冷えたぶん昼間の強い日の光
一周忌すんでひもとく日記帳
負け犬の気まりわるげに小屋に入る

大阪市　尾崎黄紅

返事など出さぬせめての仇うち
締切りを角のポストもせかしてる
酒呑めぬ男減点されている

鳥取市　岩原喬水

人生に卒業のない坂登る
酒の道卒業したら死んじまい
犬嫌い犬も知ってて吠えかかる

静岡市　浅子まつゑ

一輪の花が食卓賑わせる
賛成が少なくまわり見て下ろす
愛想ない小鳥は来てもすぐ帰り

鳥取市　萩原美雪

ひま人と見たか世話役持ってくる
風はピンクに少女の胸をかけぬける
することがないひま人も辛いです

岡山県　清水悠貴女

不本意な風にも花は香を放つ
峠いくつ越えてまあるい風になる
尺取虫の歩幅で越せぬ坂がある

大阪府　籾山隆

信頼のレールと決めて突っ走る
花束へ強調したい紅い彩
手の届く高さと甘い勘違い

豊中市　田中道胤

好きやねんああ大阪の食い倒れ
外海に出たか静かな船の揺れ
寛いで妻がチラシを読んでいる

松江市　松浦登志子

酒の友　悪友といい妻の愚痴
濃淡の黒が妖しい喪の女
ベタ靴に母の喜びしっかりと

鳥取市　春木圭一郎

いいとこも悪いとこも似てわが子かな
子供にもお金の価値は教えとく
一つずつ子供のころの夢を追う

長崎県　岩崎和子

この辺であなたと呼んで見たい旅
出稼ぎの父がビデオで涙ぐむ
タイミングずれてウインクもてあまし

尼崎市　前田いわお

強い事言えぬ弱みを握られる
虎キチで無いつもりだが胃が痛む
天気予報手に取るように的を射る

松江市　原長三

万策もつきて仰いだ白い月
登りつめ尺取虫も枝となる
春愁や百本杭を洗う波

静岡市　永倉柳華

燃え尽きて散ろう椿に似た心
さえずりが一つ覚えの籠の鳥
餞別を貰って土産ばかり買う

芦屋市　根来敬

さびしくてむしょうに花を買い歩く
眼の病しばらく言わぬことに決め
要らぬ嘘つかねばならぬときもある

島根県　加本義良

花の駅　希望に燃えた靴で乗る
おでん食う隣の客と打ちとける
銀河計画などと長い滑走路

東大阪市　大平太一郎

一票の重さを知った地方選
再会を期して校歌でクラス会
イトマンが絵画も怪の糸口に

鳥取市　加藤二代

ひま人よ私の店に来て遊べ
この愛は返品させていただくわ
小羊へひとり旅さす愛でした

新潟県　高野不二

日の丸をやっぱりありがたがる世代
割箸にさえ反対と賛成派
胃カメラに心の底も見られそう

鳥取県　鈴木公弘

日溜まりに移す定年前の埼子
運勢がいいからパチンコに行こう
口紅が濃くて警戒してしまう

寝屋川市　北川波留吉

偶然にしては物事運びすぎ
苦節十年トンネル掘って村おこし
万が一のミスもらしている針の穴

富田林市　山原昭水

名刺にはあなた騙すと書いてない
男勝り柔道二段羊歳
居酒屋は女課長の顔が効く

藤井寺市　中島志洋

ライバルに先を越された回り椅子
お土産の地酒飲み干し友帰る
釣り天狗いつもの店で魚買い

泉佐野市　真崎浪速子

古稀ですが紅は忘れぬ妻の会
長者三代続かずボンがあの始末
常連へ笑いも握り込む寿司屋

岡山県　牧野秀香

手作りの蓬団子が垣根越し
ひっそりと咲くのが似合う藪椿
朧月　二人の語らい影で見る

今治市　越智青園

生きざまを鏡の底は知っている
シルバーシート譲れば相手年が下
灸すえてツアーの支度老夫婦

相生市　中塚礎石

後ろから呼んでる声を前に聞き
手袋を泥んこにしたボランティア
風ぐるま風強すぎて回らない

お母さんの電話親子の声になり
喋りたくない時話しかける妻
自動ドアに頭打たれてから惚ける
今治市　渡邊伊津志

今日の酒　孫の入試の前祝い
泣かされる話にお酒持って来い
しょうもない話に返事せずに居る
広島県　森川抜智

ベビー帽編んでまだ見ぬ孫想う
無駄のない話ちょっぴり肩がこり
新築の家で古家具肩を寄せ
鳥取市　森山豊子

おじさんと呼ばれてからの反抗期
何してもうまくいかない日もあるさ
子の地図へキーワードだけ書いておく
和歌山市　山田博章

シンプルなスーツに包む熱きもの
やさしすぎる言葉の中に嘘があり
さくらさくらカップ酒買い逢いにゆく
和歌山市　榎原公子

開店の花輪向いは店仕舞
路線バス信じて雨の中に立ち
大浴場一人楽しむ旅の朝
熊本県　増田一乗

美しい女だった生母の顔知らず
大会の帰りの汽車で顔を売り
野良猫とコミュニケーション職が無い
鳥取市　武田帆雀

リハビリヘスプーンも軽く希望湧く
調度品移し　気分を変えてみる
手を使い呆けないように趣味に生き
鳥取県　小西五十鈴

紫陽花のこと長々とラブレター
心から無事をよろこぶ同期会
夢だけはメガネ無しでもよく見える
豊中市　滝北博史

齢静かに暖めおうて夫婦箸
捨て切れぬ引越の荷の花筵
絵日記にパパママ姉の並ぶ顔
大阪市　川原章久

自我捨てて素直に波に乗ってみる
どちらかへ少し寄ったら矢がそれる
住む家はもうない詩のない街だ
姫路市　谷清柳

当然のように優雅に暮す人
池に写った塔が神々しく光る
弾んでる若さ響いて来る座席
京都市　山海友熙

大阪市　山北三三三

猫の苦情に犬の苦情を返しとく
おしゃべりが来るので話を変えておく
露天風呂　月に人魚のよう女

羽曳野市　麻野幽玄

一押しへ三押し返して勝力士
新しい雨靴と孫雨を待ち
完全看護なのに毎日通う妻

唐津市　野崎ハル

外は雪　春が来たよな子の便り
絵画展しばし浮世を忘れさす
鮮やかな弁舌もあり選挙戦

泉南市　坂根流水

夢うつつ大根足を投げだして
竹の葉はさらさら鳴って筍が
未練などないが死に際気にかかり

岡山県　後安ふさえ

病院の食事も進む回復期
タンポポが風を信じて飛ぶ日待つ
植木屋に梯子の下で指図する

大阪市　乾哲静

湾岸戦争を見て来た月の独り言
経済大国のお金使いの下手なこと
婦長さんも笑顔を見せる退院日

神戸市　岩田信義

静電気溜めてライバルすれ違う
子を叱り代った母の長電話
披露宴司会の舌に乗せられる

岡山県　後安江山

勝ったとて驕るな明日は追われる身
曽孫来て大人の会話腰を折り
サーカスの綱よりむずかし世渡りの綱

大阪市　平井露芳

カロリーが足りんとコアラ寝ています
物忘れまたまた年齢のせいにする
色つきのメガネ人生まだやる気

青森県　荒田つる

負けおしみ花の独身などと言い
演壇の女史も三度の離婚歴
花冷えにしばし仮眠をとる桜

唐津市　野田旭恒

血圧計服薬さぼったつけが出る
亡母三回忌山と供える菊の花
喜寿の手に負えぬ犬小屋大修理

静岡市　大石たき

うれしいよ医者の許しで春の旅
八十路坂昔かたぎの根がとれず
披露宴借り着で派手にやる時世

鳥取市　美田旋風

どれ着ても作業服しか似合わない
聞かれないことは喋らぬだけのこと
唐津市　浜本治幸

小銭だけ財布が重し消費税
宴会の帰り弧独な夜の道
鳥取県　伊吹富恵

笑い上戸が一人まじって輪が和む
ジョギングで今日の悩みは今日流す
鳥取県　中西智恵子

旬の味うまさを知らぬ現代っ子
コーヒーは噂話が好きらしい
静岡市　片平静代

職業欄無職と書いて趣味多彩
ローマ字を覚えた孫とバスに乗る
八尾市　向井しづ子

かがやきの裸婦画く心わかる年
牛若の子役の気魄いじらしい
唐津市　福島紀一

花の山今日一日を花の中
孫帰り風船一つ置いてゆき
大阪市　清水絹子

ハンカチを二人して敷く中之島
フルムーン宿の払いは妻がする
兵庫県　北川とみ子

見栄もなく特売さがす妻を待ち
ひと呼吸運にまかせた面接日
広島市　森田文

高級なホテル受験の子で埋まる
運勢欄よいことだけを信じとく
兵庫県　中野とよ子

テレビ消し自分にもどる冬ひとり
スコップのような大きな手が語る
宇部市　内田テル

保育器に生きる権利握りしめ
湯煙にストレス流す旅の宿
静岡市　大村正雄

世渡りをいろは歌留多に教えられ
裏話きけば辻褄合ってくる
広島市　名和喜一郎

ライバルのほうが減ってた靴の底
お茶汲みが好きで人気を得ています
岡山県　福原辰江

酔っていた分だけ前後する話
父老いてだんだん効かぬ捨てセリフ
兵庫県　西井つや子

外は雨電話の声が温かい
消灯の孤独に耐える唄がなく

年金が死ぬまである有難さ
大阪市　今西静子

しあわせな雑音をきく披露宴
米子市　服部朗子

豆腐があれば御機嫌の亡父でした
自分をうつす分身は鏡です
池田市　林　すて

末っ子は手伝いよりも遊び好き
顔ききは子供の中にもあるらしい
岡山県　大石あすなろ

スマイルの全く違う名コンビ
口三味線うかつに乗ったまま走る
羽曳野市　徳山みつこ

春雨よ心して降れ花の寺
舞い落ちる花びら靴を迷わせる
岡山県　富坂志重

老い一人鬼でも出てこい話し度い
ライバルが有るから元気を出してみる
鳥取県　浜田民子

大物と思われたくてモラル捨て
手際よく生きた魚をさばいてる
兵庫県　奥野テル

二度三度積んでくずした夢の跡
招かれて足が浮いてるモーニング
岡山県　江口有一朗

街の灯が優しく見える丘のうえ
ちゃんこ鍋に決めた一人のクッキング
島根県　松本聖子

その先は心の中で撰り分ける
ワンテンポ遅れたままで従いてゆく
大阪市　家村高雄

PTA大口会費で会長さん
パチンコのツキもついたり仏滅に
大阪市　小糸昭子

どこからか何時も見ている猫である
ライバルに会うのに夫白髪染め
鳥取県　野口重富

おかっぱを撫でるとすぐにねだられる
鯉幟泳がぬ過疎に住み疲れ
青森県　波　ただお

待つ事が楽しくなった待合室
待つ程に恋慕の情が薄れて来
唐津市　山口ふさ子

寒いから多少の嘘は信じよう
立候補質も落ちたが顔も落ち
箕面市　岩津ようじ

昨年の毛虫忘れて見る桜
美人薄命なるほどなあとクラス会

代表に出したい人は金が無し
一年生後ろ姿も光ってる
プライドでゆれる女のイヤリング
古傷が疼いて眠れぬ古日記
開発も過疎化も困る山の村
雑踏の中に自分を消しに行く
三度目の仏にすがる手術台
過ぎ来しのレールたどれば白日夢
真っ白な心で子供とたわむれる
愛してるとベルを鳴らしプロポーズ
乗り継いで一枚の絵の景に会う
八分目の暮らしを盛った市場籠
映画村　斬られる気持になってみる
角のない丸いポストが今も好き
魚屋の威勢の声に買わされた
何度でも頭に充電しておこう

八戸市　島田昭治
岡山県　杉本伊久栄
鳥取県　上田俊路
広島市　中村要
鳥取県　今本早苗
大阪市　武田昌三
東大阪市　松山隆
鳥取県　山本正光

逢えばもういいわけなんかいらぬ仲
似合わない顔と服とで来た女
右向けはい左向けはいで生きて来た
ヒロインになってドラマに吸いこまれ
当分は昼寝もできぬ選挙戦
「ただ今」の声で占う今日の出来
親父さん尊敬します子が言った
煮こぼれが外まで匂う夕餉時
ビルが建つ日照権が物申す
隣には空地があって梅が咲く
花ビラの流れにメダカ春を知り
ハミングが流れて浮いて仕舞風呂
カタカナ語辞典を横にニュースきき
閑散と暮らす小庭が花盛り
田舎に居ても都会に居ても惚けは惚け
ショベルカーよその庭まで掘りたがる

和歌山市　木村親踏
島根県　渡部好栄
静岡市　中西雅
鳥取県　中藤俊子
奈良市　米田芳子
島根県　今川三津江
岡山県　三村美恵子
宇部市　中村三良

春の陽を一ぱい受けてつくし摘む
和解して心に愛の灯がともる
耳かきの出番来そうな膝枕
布団から生きているよといういびき
仕合せは夫婦喧嘩の出来る事
税務署へ世帯づかれの顔で行く
珈琲に砂糖の数でもめて居り
記念日を幾度越えて共白髪
見破ったウソの返事をウソでする
法律を知って民事が怖くなり
松陰の石灯籠に苔むして
看護婦の不足がつくる空きベッド
後ろ指さされて寂しい老いの恋
何時までも二人の孫と釜の飯
峠茶屋水車が回り客が寄る
散るバラを拾い一ひら押し花に

島根県　児玉幸子
島根県　佐々木芳正
静岡市　青柳金吾
米子市　木村はるえ
和歌山県　三原三究
羽曳野市　山本たけし
静岡市　三浦つね
鳥取市　谷口侑里

人事異動人生の悲哀が籠ってる
人事権持ってる人も首洗い
天才肌天狗になって世を拗ねる
号令も命令もない平和国
住めば都　他郷の土に根をおろす
良心に消せぬずるさが一つある
長電話長じり長湯うちのママ
無駄足も運動ですよ健康法
昨年の山菜取りを辿る春
球団の好きな帽子を孫に買う
銀婚を迎えてやっと差し向い
保育器の中で未来が背伸びする
尻尾まで陽を溜めている鯉のぼり
ご先祖も微笑む妻の着物ショー
この四月あちこちの孫参上とは
わたしもマネキンの服似合うかな

十和田市　小笠原敏夫
姫路市　山崎治夢
宇部市　野田豊子
鳥取市　中居武士
鳥取県　橋谷静江
寝屋川市　坂上高栄
広島県　岸田武
和歌山県　上岡正直

唐津市　入江喜久亭

妻の愚痴聞きつ眠れぬ夜を明し
浮気した言訳見抜く妻の顔

姫路市　福島姫女

好き嫌い好物食べると治る腹
遠地孫来るなりローソク仏前に

池田市　木村一笛

お笑いの議員議会で笑わさず
触れあいは旅先で知る歴史館

米子市　中井ゆき

峠道待っててくれる人が居る
幸せをスプーンしみじみかきまぜる

島根県　岩田三和

分校に生きた教材万とある
ふるさとは時代映画のいいロケ地

鳥取市　近藤秋星

造幣局の桜今年も見たテレビ
真剣に生きた分だけ損をした

唐津市　池田遊女

つり糸を垂れて昼寝もロマンだぜ
慰めの能書き要らん銭欲しい

羽曳野市　福田悦子

矢田寺の株分けあじさい庭で咲く
家庭菜園キュウリが花をつけました

西宮市　岡本道子

いかなごの旬に無策な北育ち
決裁は判官びいき民主主義

池田市　岡本吉太郎

横綱に休場という奥の手が
床上げし老妻紅をさし胸をなで

吹田市　西岡豊

窓口に美人ならべておいでやす
湯煙にタオル頼りの露天風呂

姫路市　福本好花

縒り戻す術は祖母の知恵も借り
ストレスの解消軍歌の老人会

橿原市　西本保夫

鈍足に合わせしきりに話しかけ
動かない石に手を焼く年齢となる

奈良市　井上大

勇気ある男怖さも知って退く
雑炊の頃はなかったダイエット

岡山県　平田たけよ

草むしる母の背中に老いを見る
世話好きの善人世話して叱られる

和歌山県　吉田武治

亡父の愛叱りの心今気付く
酒止めた本当ですか友笑う

島根県　福間博利

欲望を一つ残して粟のかゆ（シベリアのこと）
捕虜哀し笹さえまたぐ力なし

大阪市　森崎忠禄

人波に風流せわし通り抜け
早足はアベック以外中之島

唐津市　山下剛司

雨が降りテントを張って花見する
この時期は歓送迎で酒びたり

富田林市　加藤みつえ

ネコが目を細め昼寝する春日和
亡き夫の時計我が腕に時刻む

大阪市　喜多佐津乃

さりげなく見比べて見るアクセサリー
五泊する旅のプランで眠られぬ

泉佐野市　大工静子

よき娘あるが青年家がない
わが嫁に永き青春よもぎ餅

◈ジュニアーの部

大阪市　新井晶子

風ふいて桜の雲がゆれだした
八重桜わたがしみたいに咲きほこる

▼お願い　川柳塔・水煙抄への投句は、かならず「川柳塔用箋」または同型の用紙に十句を書いてお送りください。（編集部）

全国紙上りんご川柳大会

題　「りんご」　葉書1枚1句（1人葉書2枚まで）住所・氏名・柳号・電話番号を記入のうえ、左記へ。

投句先　〒036　青森県弘前市元大工町50―5　大手門歯科内　川柳塔あおもり

締切　**7月31日（水）**　**発表**　11月12日（火）

発表誌　「川柳塔」「川柳塔あおもり」ほか

選者　1次　川柳塔あおもり　波多野五楽庵
2次　川柳塔社理事長　橘高薫風

入選　入選句30句の入選者に青森りんご1箱、上位8名にりんご型の句入り額を贈呈。

主催　アップルフェア推進協議会　川柳塔あおもり

後援　日本川柳協会

夜市川柳募集

第一回「顔」　小島蘭幸選　締切六月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2―9―2　河内天笑方　堺川柳会

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (6)

橘高薫風

善人が滅びつゝある寂しさに
炭ついで炭ついで女をうらむ

大正15年の年頭の句は、良きもの善き人が滅びの傾向にあるのを詩人の感受性が敏感にとらえたものだ。また、男が女をうらむ姿態の炭をつぎ足す所作は、錯倒の感の故に味が深まる。ほぼ一年後の大正天皇崩御に際して

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

の句が見える。なお、「炭をつぐ」の句は、

学問のさびしさに堪え炭をつぐ

という俳句の山口誓子の有名なものがある。それで誓子に関する話を思い起したので一筆して置く。以下の話は、路郎先生から川柳雑誌社の編集室での雑談中に聞いたことであるが、大正10年頃、当時京大三高俳句会に在籍の若き誓子が、雑誌『雪』に参加を希望したのを拒否したとのことであった。俳句・川柳誌『雪』の権威を強調されてのお話だったと思うが、気鋭の俳句作家を拒んだのは、雪同人たちの不明に因るものではないかと、私は感じたものである。誓子は明治34年の生まれで路郎と齢に十三の開きがあった。

さて、路郎は新年の論評には、「三十年計画」と題し、革新派の田中五呂八からの手紙の回答方式で一文を草している。

「ごぶさたしていることは僕も同様です。（中略）一度も逢った事のない友人が私には幾人あるか知れませんが、句を通じて、書いたものを通じて、或いは個人的な通信で逢ったと同じ程度の親しみを続ける事が出来ると思います。あなたにしたってそうではないでしょうか。あなたには是非逢いたいと思うけれども逢わずに死んでしまったからとて別段それがために親しみが薄くなったり厚くなったりするとも思えません。私にとって昔の人々や、異国の人々や書物の中の人物と同様に考えることが出来るからです。時代とか肉体とかいうものを超越して考えることが出来るからです。」と述べ、五呂八が雑誌『氷原』のために闘い、同志の詩集を出す努力には涙ぐましさを感じるものの、評論や創作には厳正な一批評家の立場でいると言い、ひるがえって『川柳雑誌』に対する批判や期待に対して次のように答えている。

「積極的とはどう解釈されたのか知れませぬが、私は年中積極的にやっている積りですし、一寸馬力をかけて見ては悲観したりするような態度は採りたくないと思っています。第二期の実質時代云々も、そう第二期だの第三期だのという程のけじめはありません。私は川柳雑誌を三十年計画でかかっているのです。（経済的確立、量的の発展、文壇への水平運動、質的完成というように考えています。）だからまだまだほんの初期だと観て下されば間違いありません。しかし、あなたの言われる個色的な作家を自由に伸ばすということは、今更の問題ではないので微力の及ぶ範囲で力をつくしています。一体革新の名によって奮闘？している人達は気短か過ぎる共通の欠点を持っていると思います。薄っぺらな雑誌すら出したり出なんだりで社会から川柳に対する従来の誤解を一掃しようなどとはあまりに虫のいい話だと思います。人間は自分で穴を掘ってそのところへ嵌まり込むと仲々動きが取れないものです。そこに伝統派の堕落があり、革新派の悩みがあるのではないでしょうか。私達はもう少し辛抱強いことを心がけようではありませんか。」

平成三年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 平成3年1月号
至 平成3年4月号

路郎賞候補作品

黒川紫香

眼のはしに涙をおいた冬の駅　西村　早苗
少年を無口にさせた小鳥の死　青枝　鉄治
おっとりと金魚一匹生きている　春城　年代
いごこちがいいので渦のなかにいる　小島　蘭幸
よく書けるペンだ嬉しくなってくる　榊原　秀子
いい人ですぐに約束してしまう　奥山美智子
親に似たやんちゃに親がこりている　平松かすみ
ふるさとの川に油が浮いている　新家　完司
上だけを見つめて登る縄梯子　新　正子
そして秋表彰式の着物選る　中塚　遊峰
村の風出て行く人と帰るひと　片上　明水
献血へはたちの腕はまっすぐに　矢内寿恵子
この頃の玩具遊びは面白い　林　荒介
一泊の旅へ山程家事こなす　浅野　房子
水道がボタボタ「誰か居らんのか」　秋元　てる

西田柳宏子

つまずいた石を大事に温める　川島瓢云児
明日の朝信じて明日の米を研ぐ　竹治ちかし
生きている生かされている水うまし　木本　朱夏
鯛の値をきいて鰯を買うて去に　原田メイシュン
みそ汁がうまい月曜日の朝だ　小島　蘭幸
真っすぐに生きてつまずくことばかり　嘉数兆代賀
光らない釘が一番きいている　松下たつみ
一つ知り二つ忘れてつつがない　天満三千代
立っていりゃ柱寝転びゃ丸太棒　小池しげお
意地っぱり手の鳴る方へ背を向ける　天満三千代
鍋みがく忘れ上手に生き上手　矢内寿恵子
水煙の先から春が降りてくる　江口　度
点滴の滴の先にある命　上田　翠光
子牛売る話はよそう子の寝顔　斉藤　劦
聞き流すことも覚えて姑になる　小谷美っ千

野村太茂津

行雲流水わたしひとりを置き去りに　西出　楓楽
一番に言いたいことをさけている　内芝登志代
輪の中の風を宥めてばかりいる　林　荒介
片足は踏みとどまっている理性　寺田　裕美
つまずいた石を大事に温める　川島瓢云児
明日もまた生かせと祈る北斗星　田村　新造
黒塗りの椀にゆずれぬ位置がある　寺沢みど里
バックミラーたまには前も見たかろう　田中　透太
残像を追ってわたしが負けている　園山多賀子

埋み火の愛は静かになかまど　木本　朱夏
泣く暇がないから笑うことにする　松本　文子
無になれず有にもなれずに輪が歪む　西山　幸
花鳥風月　若しもの思慕は伏せておく　小村てい子
生き恥と生き甲斐やがて似てしまう　牛尾　緑良
上げ膳据え膳この世に怖いものはない　舟渡　杏花

阿萬萬的

振り向いて一人芝居を苦笑する　冨上　光代
年輪のゆがみ大樹は語らない　竹治ちかし
坐りよく河原の石はみな丸い　安藤寿美子
平和平和と誰もコタツを出たがらぬ　谷垣　史好
いやだとは一度も言わぬなで仏　松下たつみ
磨いても光らぬ石も数のうち　田中　透太
空振りが続き謙遜とは言えぬ　楊井　二南
珍しい病気で医者のモルモット　吐田　公一
缶蹴りの缶は主張を持たされぬ　牛尾　緑良
親切が無になる程に礼をされ　松川　芳子
責任をもたぬ女がよく喋る　西村　早苗
糊塗ばかり上手になって老いてゆく　堀端　三男
同権で夫婦揃ってドック入り　樫谷　寿馬
川底の石に驕りをきとされる　吉川　寿美
安定剤に今夜もわたし負けました　春城　年代

橘高薫風

お帰りと言う母さんの顔が好き　真喜内　實
冗談にしてしまわねば恋になる　吉岡　美房
武者凪と思い込んでる奴凪　舟木与根一
お隣の夫が私を認めてる　宮尾あいき
よそゆきの顔なべやきに七味振る　森川まさお
何事も夫の逝った日と較べ　吉田あずき
ごはんですよと言うてもらえるまで生きる　小出　智子
水煙の先から春が降りてくる　江口　度
躓いて顔を落してきたらしい　西山　幸
お不動さんきいて下さる顔でなし　本間満津子
数えられたくない羊やはりいる　仁部　四郎
白っぽい鳥にならぬようにする　津村八重子
自己嫌悪鏡を磨きすぎたかな　米田　恭昌
裏切ってからひょっとこの面冠る　月原　宵明
ベレー帽被るたんびに見る鏡　松川　杜的

尼崎市文芸祭作品募集

川柳（雑詠）1人2句をハガキに書き、**6月15日**までに尼崎市七松町1—23—1尼崎市文化室文芸祭係へ（応募料無料）

川柳塔賞候補作品

宮口笛生

年頭の決意がうすれかけて春　宇野　昭代
いたわりを包む風呂敷持ち歩く　森脇　和子
敗者にも藁を一本投げてやろ　鶴久百万両
子育てが終って消えた力瘤　高田美代子
さみしくてまっ赤なバラを買いにゆく　萩原　美雪
義理ひとつ返すチョコレートが甘い　寺中三枝子
妻の手にびっくり箱がある恐さ　野村　京子
神様がくれた笑顔に溺れよう　宮武まつ女
熱冷まし効いておんなが巣へ戻る　石谷美恵子
真ん中に座ると背筋伸びてくる　流　奈美子
みんな我が子ハカリになんぞかけられぬ　野瀬　昌子
中流に汚染をされた妻になる　大橋　政良
和解して酒のピッチが早くなる　児玉　歌子
幸せが袋に少しずつたまる　大角　幸代
気まぐれなダルマ転んだままでいる　大坪　天涯

玉置重人

一病息災素直に生きる他はない　中村　三良
儲け話聞けばやっぱり金が要る　高野　不二
耳底のでんでん太鼓鳴りやまず　鈴木　公弘

この蕾咲く頃嫁がくる予定　寺中三枝子
淋しくて紙ふうせんをふくらます　新井　朋子
約束の指にストレスよく溜まる　池　森子
渋柿がやたらに甘い顔をする　大西　文次
狙のくぼみにのこる母の影　乾　隆風
パズル解けて終着駅が近くなる　芦田　絢子
冬の天ひとも苦節のうたを持つ　大峠　可動
作業着に滲む油は父の旗　野瀬　昌子
灯ともし頃にはみんな優しい窓となる　藤井　高子
山ひとつ越えれば春の陽と出逢う　大坪　天涯
ベルが鳴ると思いつづけて油断する　三宅つえ子
雪しきり仏を飾る花買いに　伊藤　寿美

小出智子

片方のちぶさ子離れしたがらず　山本　半銭
バーゲンの妻を本屋で待っている　伊藤　寿美
すき間風夫婦の愛を問うように　古田比呂子
解いたら元に戻らぬ結び文　岩田　信義
買い足して買い足している年賀状　児玉　歌子
皿洗う母は哀しみまで洗う　西原　艶子
口笛で闇の深さを確かめる　池　森子
ふる里の雪を見せたいひとを連れ　木下　道子
いたわりを包む風呂敷持ち歩く　森脇　和子
桜咲く放浪癖はまだやまず　高杉　千歩
冬の天ひとも苦節のうたを持つ　大峠　可動
立ち止まることさえ許されない街で　新井　朋子
笑い話にするのは少し先になる　片上　英一
ゆとりある余生に赤がよく似合う　寺沢　典子
仁王さんと世間話をして帰る　菊地　繁男

高杉鬼遊

即位の礼　十人十色の目の中で　大橋　政良
打って出てみよう今年は年女　堀畑　靖子
都会とはいつも何処かで工事中　小木　久子
大極拳はいいナと思うなまけもの　片上　英一
いたいほどキャッチボールして夫婦　宮崎　菜月
男は顔じゃない妻がそう言った　大角　正道
コーヒーで見合いをしたり別れたり　太田　幸枝
悪い子はいない筈だが花が折れ　浅子まつる
年金で買った夢にも消費税　菊地トミエ
敗者復活　老人クラブの役に就き　加本　義良
鮮やかなサヨナラだった揚羽蝶　高田美代子
妻たちの話オホホとトリカブト　宮尾みのり
第二章　妻がパートに出ると言う　和田　宏
壁の痕ごまかすモナリザの微笑　黒田くに子
大事な人をいくさなんかで死なせない　萩原　美雪

板尾岳人

消しゴムを許してしまうから解けぬ　藤井　高子
根の深い所で鬼と妥協する　児玉　歌子
人間が好きで丸い風と住む　高杉　千歩
髪を梳く手に罪多く罪深く　野村　京子
強烈に燃えて淋しい鬼あざみ　上田　柳影
翔び立った毬の余韻が掌に残る　流　奈美子
赤が好きでんでん虫も赤で描く　森田　文
仮縫のままの話が走りだす　山口三千子
たとう紙の中に女の夢がある　桜沢あかり
万両の実は朱色逢いたい人と冬　池　森子
太郎にも渡したくない鍵がある　中西智恵子
どの指も未来を指して旅に出る　西浦　小鹿
時々は妻とワルツを踊ろうか　大峠　可動
手の届くとこに消しゴム置いてある　中山おさむ
腕くらべしようじゃないか向い風　高田美代子

川柳塔社常任理事会（5月1日）

▽籾山隆など十七氏の同人推薦を承認。
▽来年度全日本川柳大会の期日変更、日川協新常任理事について報告（柳宏子氏）。
▽唐津支部9周年（11月17日）のはなし（柳宏子）、選者（紫香・天笑）派遣を決定。

—水煙抄

秀句鑑賞

—五月号から

舟渡杏花

銀婚の席へこぼれるかすみ草

児玉歌子

銀婚式の美しい風景。銀婚式まで生きてもらえなかった私にはとてつもなく羨ましい句。この幸せを歌子さんいつまでも。

指切りが好きな小指で忙しい

大川幸子

ユーモアたっぷり。明るくて気さく、そして温い人柄が浮かぶ。幸子さんご自身でないでしょうか。一度お逢いしたくなるような句。

愚痴言われそうになったら寝てしまう

大西文次

夫の帰宅を待ち構えてあれこれ聞いてもらいたい女の性。そして話が愚痴へと移行。内心またかと理由をつけての早寝。このタイミングも夫の芸の一つかも。

すき焼の煮詰ったころ父帰る

木下道子

父権落ちて久しい。待ってもらえなかったなど思うまい。煮詰ってはいるが、まだ肉も残っている。黙々と動く箸。ああ父とは一体。

本調子出ぬまま時間切れになる

堀畑靖子

自分にも少し調子が出てきたなと思う間もなく、時間切れを告げる冷たい声。そのくやしさ無念さ。これが人生かとも。

風化した恋の話とティーポット

池森子

青春の恋の思い出に花が咲く余生のひととき。この醍醐味。長生きしたいものですね。

夫一人残すポットに湯を満たす

宇野昭代

妻の留守に夫へ不自由をかけることを詫びながらポットに湯を満たす。夫唱婦随のやさしい奥様が見えるよう…。

雑魚という人生もえじゃないか

鶴久百万両

とある日の雑魚が開き直った句。拍手を送りたい。私も雑魚だから。でも雑魚で終ってなるものかと思う日も。ガンバリましょう。

究極のグルメ夫の目玉焼

高畠五月

無器用な夫は目玉焼しかできない。目玉焼もピンからキリだが、夫のは口にさえ入ればよい目玉焼。ユーモアたっぷりの楽しい句。

旅の宿昔馴染と二人きり

森安夢之助

おだやかでない句。この先ドラマがどのように展開するのか。楽しみもちょっぴり。一度きりの人生悔いの残らぬように…。

写真ではいつも見つめてくれている

西原艶子

共感しきりです。見守ってくれていると思うことで明日への勇気がわく。そして今日まで生きてきた自分と重なり、感傷的になる。

このいくさ顔色かえたら負けになる

的場十四郎

喜怒哀楽あってのにんげん。顔色を読まれぬために丹田に満身の力をこめて。きびしい男の生きざまをかい間見て身の引締る思い。

明日になったら咲いてるだろうこの蕾

高田美代子

明日はどんな色で咲くかしら、この蕾。つぼみへの期待わくわく。花好きのやさしい作者が目に浮かぶ。

春風に誘われスキップしたくなる

玉置当代

時あたかも春、こちらまで楽しくなり、一緒にスキップしたくなるような佳句。私もこんな句を作りたいなと思いながら…。

その他私の心に残った佳句。

福の神そんな女がいてくれる

大角正道

見ぬ振りをたまにもしようそれも愛

亀井円女

人間らしく生きるやっぱり金がいる

渡辺南奉

銀河系

河内天笑選

西宮市　奥田みつ子
片想いだからとっても美しい
エスカレーター下から人が湧いてくる
黄昏の膝に広げる広辞苑

広島市　中村要
四十キロほんにかぼそい粗大ゴミ
胃カメラで腹の黒さを診てもらう
健康を祈って毎日煙草喫う

鳥取県　新家完司
自転車が冬の間に錆びている
くつしたの匂いまぎれもなく春だ
漁師たち海へ感謝の歌うたう

寝屋川市　江口度
終電の少うし長い発車ベル
フセインのエゴには神も匙を投げ
紙くずで巣づくりをする街ガラス

八尾市　片上英一
ああこれが蕗の薹かと指でふれ
ティラミスもいいがやっぱり桜餅

米子市　八木千代
思い出の峠に石を積んでいる
峰からの風にもしもという音符

堺市　高橋千万子
嫁上位もう逆転はむつかしい
職安も平均寿命のびて混み

鳥取市　美田旋風
目の前の椅子になかなか座れない
左遷地の時計ゆっくり時を打つ

岡山県　矢内寿恵子
指切りの悔いを生涯道連れに
土砂降りの続いた日記なつかしむ

鳥取県　土橋はるお
胃カメラが辿る足音聞いている
D51の煙が入る喫茶店

守口市　森川まさお
一年生みなやわらかな掌を広げ
似た顔が並んで西瓜食べている

鳥取県　土橋螢
見るひとのこころの色に花が咲く
去るひとを追う花びらの二三片

大阪市　今西静子
待つ人も門限もないひとりの灯
酒少し飲めるしあわせ取り戻し

名古屋市　藤井高子
老いそめてひとり遊びがうまくなる
英雄と並べば猿も英雄に

和泉市　中川楓
やがて一人の計算をする女
妻が実印を作ったとは知らず

和歌山市　堀端三男
団子よりカラオケ好きな花の下
樹海から抜けたら君に逢いにゆく

西宮市　林はつ絵
ダイエットこのステーキを食べてから
時効では片づけられぬことがある

海南市　三宅保州
商品の説明がないコマーシャル
へそくりの技術は妻におよばない

和歌山市　桜井千秀
沈んでは浮く奥の手が見えてくる
トントン拍子一つ外すとスッテンテン

羽曳野市　吉川寿美
大安の暦が見栄をはりたがる
嘘も方便一時しのぎの傘をさす

和歌山市　後藤正子
葉桜を見届け黙々と歩く
すずらんのつぼみに亡き人が宿る

米子市　澤田千春
B面できらり輝く人に逢う
落日に神の姿をかいまみた

大阪市　岡田ふみ
通夜の客タイムマシンに入ったよう
世渡りが上手さっさと先に逝き

羽曳野市　芦田絢子
独り居に慣れて手抜きが多くなる
過去未来私は小さな通過点

米子市　金山夕子
ロングスカートの中で気楽な脚だ
助手席に花の香りでいてほしい
松原市　小池しげお
神さんのいない祭が多すぎる
ポンポコリン明日のことは考えぬ
堺市　近藤豊子
空爆のとうもろこしを播くごとし
今治市　矢野佳雲
神様の名刺のようなお札買う
寝屋川市　平松かすみ
片付くと他人の顔になる机
鳥取県　上田俊路
まわり道しながら君に辿り着く
米子市　小西雄々
影法師と一緒に入る縄のれん
鳥取県　最上和枝
大脳が空っぽになるもしもの絵
米子市　林荒介
花むしろ少し淫らに眼鏡拭く
米子市　政岡日枝子
たぎるものあり峠一気にかけのぼる
西宮市　西口いわゑ
若かったあの辛抱がなつかしい
米子市　林瑞枝
今日の謎解けて鉛筆笑い出す
大阪市　井上白峰
どん底に落ちて剝がした眼の鱗
西条市　片上明水

もう一つ椅子をふやせば風が止む
岡山県　江口有一朗
悲しみを隠すジョークが出てこない
鳥取県　伊吹富恵
あるヒント明日の夢を書き換える
京都市　山本規不風
運ちゃんが降ろしてくれた露天風呂
鳥取県　岩原喬水
長風呂をちょいちょい妻に覗かれる
唐津市　福島紀一
一人住い警戒されているらしい
大阪市　板東倫子
生き方をファジー制御に切り替える
唐津市　浜本ちよ
わが足で画いた円の中で生き
倉吉市　渡辺菩句
羊のお乳飲んだのはいつだったかな
鳥取県　田村きみ子
父母に叱られるから倖せだ
青森市　工藤甲吉
愛しゅうて叩きたくなる禿頭
大阪市　寺井東雲
恥かいて舞台度胸がつきました
兵庫県　酒井靖子
用意したはずの言葉が切り出せず
守口市　結城君子
やり手だった定年のせな淋しそう
広島市　名和喜一郎
焦点がぼけて言いすぎだけ残り

和歌山市　古久保和子
ふる里の時計ゆっくり時を打つ
岡山県　清水悠貴女
水割りをすこし私も仲間入り
奈良県　米田恭昌
ライバルの女嫌いがくせ者だ
和歌山市　木本朱夏
誘われた日に鼻風邪がひどくなり
八尾市　高杉千歩
自画像は少しいびつに描いてある
和歌山市　福本英子
肩凝りよ肩の力を抜きなはれ
岡山県　千原理瑛
プライドを秘めているので美しい
吹田市　栗谷春子
棚ボタのひとつふたつはあってよし
寝屋川市　堀江光子
兄嫁の気性どおりに強い糊
藤井寺市　高田美代子
私にも出来る事ありボランティア
尼崎市　春城年代
友人のとてもさみしい背のまるみ
豊中市　江口明光
サラ金があるから人生が狂う
貝塚市　行天千代
のんびりの嫁とわたしは慌て者
宇部市　中村三良
ひとりぼっちの咳にゆれてる影法師

倉敷市　田辺炎六
老い友達長生きごっこ医者ごっこ
茨木市　堀　良江
おしゃべりをする気で長い手紙書く
十和田市　阿部　進
気配りの失せたこの世が住みにくい
唐津市　久保正敏
妻と行く当り障りのない酒場
和歌山市　田中みね
旗振りの気随気儘に踊らされ
弘前市　村田善保
産声に女の汗の輝ける
米子市　小村てい子
スケジュール浮かせ珈琲かきまわす
大阪市　藤田頂留子
そっくりな仕草に亡母を見たきずな
和歌山市　山川克子
退屈でドラマ探しに街へ出る
箕面市　岩津ようじ
何笑ういずれ君らも年を取る
砂川市　大橋政良
ノックして胸の空気を入れかえる
鳥取市　小谷美っ千
グラス一杯の恋をひたすらあたためる
出雲市　久谷まこと
熱弁が敵も味方も頷かせ
島根県　栂　みどり
降りる客歩幅のんびり無人駅
米子市　石垣花子

この部屋に移すとオウムよく喋り
岸和田市　清野こう
パンかじりながら走っている背広
鳥取市　西村黙光
酒池肉林ここは地獄の一丁目
鳥取県　美浦美代子
失恋の渇きに母の熱いお茶
兵庫県　北川とみ子
寝たきりへ春を見せたい百度石
今治市　月原宵明
この村で生れて死ねる寺の鐘
和歌山市　山口三千子
思い切り蹴った小石が跳ね返り
鳥取県　羽津川公乃
幸せを迎えに今日も七千歩
和歌山市　内芝登志代
健康な嫁でリズムは狂わない
姫路市　大原葉香
ストレスのたまった麻痺の足を撫で
兵庫県　遠山可住
人並みの長寿ぼつぼつ寺詣り
鳥取市　春木圭一郎
花時計少し早目に夏を告げ
鳥取県　石谷美恵子
椅子とりの誤算春陽に笑われる
熊本県　高野宵草
アドバルンゆらゆら地価を吊りあげる
宝塚市　丸山よし津
死に神がうっかりミスで落ちてくる

唐津市　田口虹汀
澄んだ眸を眼鏡で隠すことはない
東大阪市　大平太一郎
ウメチカにスタンドやっと返り咲き
和歌山市　田中輝子
車間距離あけたらすぐに割り込まれ
大阪府　深日白光子
ホームランガッツポーズのまま走り
岸和田市　古野ひで
もう逢わぬ決心をして言葉選る
広島県　田村新造
フレッシュな女優で見せる真知子巻き
唐津市　浜本義美
どうせ子のものになる金貯めたがり
八尾市　古川覚然坊
近道にしてスーパーの通り抜け
岐阜市　渡辺杏村
還付金あてに一泊旅行組む
羽曳野市　徳山みつこ
バンザイと共に公約散っていき
熊本県　増田一乗
医療機器贈収賄のたねとなり
大阪市　塩田新一郎
時々はエレジーもやれパチンコ屋
岸和田市　三輪通彦
栄転の椅子だが辛いノルマ待つ
米子市　小塩智加恵
選挙カー入れないおわび手だけ振る

岡山県　福原辰江

親の敷くレール反抗する若さ

大阪市　神夏磯典子

お隣に負けては居れぬ招き猫

大阪府　籾山隆

即位金貨こんどは額面通りらし

岡山県　小林妻子

落選へ手品のように消えている

西宮市　瀬尾六郎太

球春啓蟄わくわくの甲子園

岸和田市　島崎冨志子

保証印ソッポを向いて押してある

和歌山市　青枝鉄治

サービスという名でくれる売れ残り

大阪市　津守柳伸

スタイルの悪いキュウリで庶民的

池田市　岡本吉太郎

風邪ですら四季それぞれのくせがあり

今治市　越智一水

自由化と機械だおれで農貧し

河内長野市　植村喜代

今何分咲きとサクラを慌てさせ

門真市　藤田翔

手を振って嬉しがらせる浮動票

大阪市　大福留吉

億ションの家誰も来ぬ雛祭り

川西市　松本ただし

幸福な民の少ない世界地図

鳥取県　乾喜与志

老人性白内障に負けないぞ

有田市　松井かなめ

一泊の旅費より高い土産代

和歌山市　粉川道子

余生とはこんなものかと深呼吸

兵庫県　西井つや子

浮き浮きと齢を忘れて春に酔う

大阪市　桝本蕗児

春日永　本屋のハシゴしてすごす

寝屋川市　岸野あやめ

若き日の別離を憶う花の雨

倉吉市　淡路ゆり子

絵馬堂にうれし涙の鈴が鳴る

寝屋川市　宮尾あいき

雨多情　花咲かせたり散らせたり

大阪市　北勝美

忌がめぐり平戸つつじは今盛り

弘前市　真喜内實

おしゃべりの中で山菜摘むリズム

姫路市　福島姫女

バラ楓　私を庭へ呼ぶ芽吹き

大阪市　町田達子

ナイターへ淀君もくる西の丸

富山市　舟渡杏花

おぼろ月猫の夜あそびまだ続く

米子市　光井玲子

大揚羽どこでお化粧してきたの

広島市　森田文

コチコチを笑顔に変えてくれる酒

鳥取市　武田帆雀

私からしてはならない電話鳴る

岡山県　山本玉恵

手塩にかけた宝をうばうめとり唄

倉吉市　奥谷弘朗

本物の姿を見抜く目が欲しい

姫路市　福本好花

二段腹抱えた老妻が居て安堵

鳥取県　乾隆風

わたくしと一緒に行動するほとけ

鳥取県　鈴木公弘

想い出を辿れば死んだ児に出会う

静岡市　永倉柳華

健康が薬きらいにしてしまう

大阪市　山北三三三

長生きの秘訣ひたすらうちの酒

兵庫県　奥野テル

羊年きっとやさしい嫁がくる

米子市　茂理高代

打ち解けてみればやさしい人でした

和歌山市　堀畑靖子

へそ曲り同士コーヒー飲んでいる

香川県　川崎ひかり

横顔が素敵に見えた春がすみ

豊中市　田中道胤

法善寺僕も真似して水かける

▼本欄への投句は、川柳塔用箋またはハガキに**3句**を書き、毎月**15日**までに、川柳塔社事務所へお送りください。

女性コーナー

黄昏の花

小出智子選

皿を割る音がくらしの中にある
子守唄覚えた道に辿りつく
惜しまずに山の向うに書く手紙
特別な一日があるフライパン
母の座をずらして少し眠くなる
一つ加えて人並にしてもらう
広がったままの波紋が戻らない
迷いから覚めたか時計動きだす
もう少し生きてあなたを困らせる
嬉しくて一寸悲しい無料パス
新らのお札魚屋さんに使わない
太ってる夫を気兼ねなく使う
辞職願を書いて破って春ひとり
通帳に遊びごころを入れておく
正眼にかまえてわたし負けている
まぼろしを見ていたことにした別れ
緊張が続いた後のぬるい風呂
亡き父とこの世かの世の話など
ほとばしるもので傷つけ合うている

倉敷市　小野　克枝
和歌山市　後藤　正子
兵庫県　北川とみ子
島根県　松本　文子
茨木市　堀　良江
米子市　茂理　高代
藤井寺市　高田美代子
大阪市　亀井　円女
大阪市　本間満津子
堺　市　河内　月子
和歌山市　西山　幸
米子市　新　正子
和歌山市　田中　輝子
和歌山市　堀畑　靖子
松原市　佐藤　泰月
寝屋川市　宮崎　菜月
鳥取県　西原　艶子

一歳の存在感に勝てはせぬ
おおいぬのふぐりだなんてかわいそう
ひとの気も知らず桜が満開で
仕合わせを継ぎたしてゆく鎖編み
青い鳥いつ頃からか胸に飼い
無欲にはなれぬ明日の米を研ぐ
虚しさも分け合い夫婦静かなり
柱磨くわたしの心磨くように
肩書きを外せば視野が広くなる
汽車弁もおんなじものを食べたくて
焙じ茶の香り無欲にまだなれぬ
にっこりと罠にはまっているゆとり
腰伸ばそ孫も今年は一年生
逆らいながら母の轍を踏んでいる
住みなれた街で安心して暮す
ゴム編みの帽子へ無理が言いやすい
要るだけは要るでお山が削られる
仮の世の命を刻む一行詩
働き過ぎとひ弱なことを言うている
許すにはすこし努力が要るのだが
バッグには血液型と住所録
すんなりと詫びてるように取れる文字
雑音を切ってショパンを聴いている
どうしても電気が点かぬ自己嫌悪
砂嵐俘虜に妻あり母があり

大阪市　西出　楓楽
和歌山市　木本　朱夏
寝屋川市　岸野あやめ
富田林市　片岡智恵子
堺　市　鈴木　可愛
羽曳野市　吉川　寿美
西宮市　奥田みつ子
兵庫県　円増　純子
和歌山市　玉置　当代
吹田市　栗谷　春子
岡山県　清水悠貴女
姫路市　中塚　遊峰
青森県　福士　トキ
和歌山市　榎原　公子
和歌山市　内芝登志代
米子市　寺沢みど里
米子市　小村てい子
岡山県　矢内寿恵子
尼崎市　春城　年代
西宮市　西口いわゑ
倉吉市　淡路ゆり子
富山市　舟渡　杏花
和泉市　中川　楓
西宮市　林　はつ絵
堺　市　近藤　豊子

カタカナで書くと格好ついてくる
神様に騙されたのか不合格
原色が春のわたしをかき立てる
花便り母は炬燵を出たがらぬ
黄梅がひそやかに咲く身内の訃
お別れは花のトンネル抜けてから
許すこと覚えて少し大人びる
パーティー券引き受けている下心
矢印は神が下さるのを貰う
月並みだけれど有難う繰り返す
娘や孫へ笑い袋を分けてやろ
鍵っ子になる宿命の貸おしめ
彼岸会に供える花の種を蒔く
知りすぎたために迷うてばかりいる
死ぬ時を選べるなれば花吹雪
皺のばそ山のつつじが待っている
愚痴一つ鏡に向いて打ちあける
いやと言えぬ自分に腹を立てている
空間を大事に埋める小さな絵
細身がなお小さくなって三月寝る
真実は一つ世間を把握する
軽い嘘がだんだん溜る小引出し
初対面そこはかとない雪柳
雑巾をしぼると祖母の声がする
がらあきの電車真昼の夢のせて

大阪市　上江洌勝子
岡山県　富坂　志重
富田林市　池　森子
和歌山市　福本　英子
出雲市　園山多賀子
倉吉市　山崎ひさ子
和歌山市　田中　みね
米子市　石垣　花子
名古屋市　藤井　高子
八尾市　高杉　千歩
寝屋川市　平松かすみ
堺　市　高橋千万子
和歌山市　松崎　幸子
和歌山市　山口三千子
堺　市　小西　小雪
姫路市　福本　好花
神戸市　能津　さち
羽曳野市　芦田　絢子
八尾市　向井しづ子
河内長野市　植村　喜代
大阪市　津守　柳伸
松江市　竹内すみこ
出雲市　石倉芙佐子
米子市　政岡日枝子
堺　市　宮本かりん

思い出にひょっこり出逢う町の角
玉砂利の道にとまどう土踏まず
三百六十五歩のマーチは栄養剤
ショーウインドー出ると紺色冴えてくる
ダイエット美味しい夢にうなされる
主婦業にやっと黒帯締めている
姉になり母になりして妻の顔
腑に落ちぬ話をそっと聞き流す
貝になる何と難しいことよ
三叉路で亡姑の訓えを憶い出す
活けられてなお背伸びする菜の花よ
ゴミの宴花の心を踏みつけに
美しく齢を重ねるにも努力
年のこと考えないで紅を引こ
古漬けが今年も亡母の味を出す

米子市　沢田　千春
和歌山市　内田　結実
貝塚市　池田寿美子
和歌山市　森　茜
松江市　安食　友子
芦屋市　黒田　能子
米子市　小塩智加恵
広島市　森田　文
堺　市　山本　半銭
姫路市　丁坪サワ子
堺　市　米谷　紫江
大阪市　町田　達子
和歌山市　山川　克子
姫路市　福島　姫女
香川県　新川マサヱ

ゴシックの**一句目**、この場合、皿を割った事情など詮索することはない。淡々とした句の中に女の業が鮮明なまでに表現され、皿の割れる音にはっと立ち止まらせるものがある。**二句目**、「山の向う」とは作者にとって憧れ、または願望。思いが届くまで書き続けるというひたむきな姿。**三句目**、例えば家の中で少し控え目に生きようとしたが、なんとなく手持無沙汰なものを感じてしまう。平凡な素材でありながら「座をずらす」という言葉選びによってこの句を引き立たせた。**四句目**、足りないところは補って、自分という一人の人間をユニークに表現されている。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1―18―10　小出智子

ロマン

松本文子選



どうみてもロマンの判る顔でない　一花
開発へ山のロマンが消えていく　芳水
ロマンチストな男と女温かい　理瑛
高野山苔むす墓のもつロマン　道子
月へとびロケット月のロマン消す　京子
一匹の蟻の死骸にあるロマン　新一郎
誰よりもロマンチストという自信　螢
遠い日にロマンもあったかっぽう着　たず子
化石発掘それからロマン追いつづけ　蕗児
ホールインワンのロマンに憑かれているボール　浪速子
ベレー帽　父のロマンはまだ若い　達子
大和路にロマンはつきぬ四季の風　度
人形のロマン哀しい流し雛　狸村
シャボン玉ひとつひとつにあるロマン　度
木簡が目覚めてロマン語り継ぎ　希久子
幻想の中でロマンが詩になる　清柳
風の日の海はロマンを抱いている　典子
大洋のロマン男は帆を揚げよ　比呂志
奈良七重御物の中にあるロマン　勝美
長靴を履くとロマンが甦る　保州
古日記開ければロマン溢れだす　鉄治
土器出土眠ったロマン目を覚ます　多賀子
かぐや姫月のロマンが消えてゆく　いわる
タンポポ　スミレ春のロマンを語り合う　杜的
第二章夢のロマンを組みたてる　寿恵子
山男のロマンが埋もれている山だ　妻子
海の絵の青さを信じているロマン　溪声
落ちそうで落ちぬリンゴへロマン追う　雄々
錯覚がロマンの扉かもしれぬ　圭一郎
親の目で摘んではならぬ子のロマン　有一朗
花の種いっぱい蒔いて待つロマン　たつみ
旅先のロマンを乗せてくるハガキ　博子
山男　山のロマンを書き残す　みどり
万葉のロマンへ葦が揺れている　結実
ロマンから離れずキャベツ刻む妻　シマ子
大正のロマンが香る夢二の絵　正坊
酒とろり男のロマン歩きだす　(板)隆佳
吊り革に男のロマン消えていく　よし津
竹籔にもう戻れないかぐや姫　美代子
一刻のロマンを追うて花開く　元江
灯が揺れてワインの底にあるロマン　(森)和子
現実の風にロマンは溶けやすい　帆雀人
ロマンみなハッピーエンドでない涙　(堀)芳子
地　みつ子
ロマンには遠く鏡を見つめおり　天
ふるさとの峠に置いてあるロマン　遠山可住
軸
熟年のロマンは風邪をひきやすい

楽器

小池しげお選



祭り笛岩戸神楽におもいはせ　道子
打楽器の音にうかれて酔いしれて　元江
津軽三味どこまで青い日本海　典子
ハーモニカほしくて泣いた少年期　比呂志
逆転のラッパは天に向けて吹き　明水
大正浪漫老父の古びた手風琴　寿美
鳴物のイキもぴたりと鏡獅子　あやめ
ハイカラだった亡母が遺したハーモニカ恭昌
家計簿に無理をしたなと言うピアノ　石舟
大正琴大正の唄がよく似合う　杜的
天に向けうっぷん晴らすサキソホン　宵明
和楽器のお囃子で舞う里神楽　朴竜
夕焼け小焼けトロンボーンの音が沈む　蕗児
腕一流楽器も二流音二流　章久
女房殿楽器で言えばまずドラム　新一郎
嫁ぐ娘に習わぬ琴を持たす見栄　好花
学歴をばっさり切ってギタリスト　正敏
蛇皮線が母恋草をまた揺する　虹汀
オルガンに合わせて御詠歌を習う　雄々
エレクトーン　ピアノ女は自立する　いわる
青春の夢を売ってる楽器店　倫子
うれしい日　皿も楽器の仲間入り　圭一郎

楽器では弾けぬ秘境の木挽き歌　佳雲
草笛の楽器で春の土手さわぐ　和子
木琴を母が叩けば母の音　清芳
つま弾きの三味がこぼれる先斗町　たず子
尺八に触れると父が蘇る　富恵
生で聞く楽器の音がすばらしい　旋風
津軽三味舞台の雪は舞い上がる　よし津
第三の男が弾いているギター　正坊
鼓笛隊孫がすまして通り過ぎ　新造
葬送のトランペットは空に吹く　大柏
楽器ではない戦友のハーモニカ　正子
打楽器が賑やか春雷連れてくる　多賀子
調律の時だけ音を出す楽器　鉄治
不器用な亡父が吹いてたハーモニカ　保州
三味線の箱から亡母の渋い声　規不風
佳

堅琴の糸は哀しいはなしする　美代子
ライバルのギターに負けたなと思う　重人
テーマソングに合せた春の楽器たち　寿恵子
許されて身軽になったタンバリン　文子
酒酌ぐと父の楽器の有頂天　螢
人

まっすぐに生きてく街のチンドン屋　雀踊子
地

打楽器が入り応援らしくなり　三男
天

罪な楽器だったよな進軍ラッパ　越村枯梢
軸

君が代を斉唱させている楽器

慰める

津守柳伸選



ゆっくりと温泉へでもお母さん　(糀)隆
力にはなれず一緒に泣いてあげ　正坊
無器用で何時も自分を慰める　多賀子
最高の慰め子らのいい寝顔　大柏
いい明日が来るよと夕陽慰める　(堰)芳子
慰めが過ぎて傷つく自尊心　典子
悄気て来るどう慰めて帰そうか　道子
背負うた子に慰められた闇の道　清柳
ライバルに慰められて意地に燃え　俊路
慰めの言葉失う絵馬風化　比呂志
慰めて慰められて夫婦独楽　杜的
慰める情けと解ける平手打ち　雀踊子
慰めの言葉をきらうネギ坊主　テル
慰めるわたしも同じ過去を持つ　雄々
一冊の本が無聊を慰める　ふさ子
夕焼けに慰められる負け戦　寿美
男には慰められる酒がある　加恵
慰めるつもりの酒が先に効き　四郎
慰めるはずがさかさにいたわられ　侑里
また次にチャンスはあると肩叩く　正直
ひとときの慰み鳩の群れにいる　結美
慰めてくれる女がひとりいる　螢

慰謝料の額がスターの株を下げ　薫
慰謝料がすこし気になる第三者　重人
慰めの言葉によわいイヤリング　玉恵
目を閉じて自分自身を慰める　宵明
毒舌の慰めにあるあたたかさ　芳水
慰めへ言葉の糸がつかめない　達子
税務署が慰めほどを負けてくれ　京子
励まされ慰められて趣味の道　みね
そっとしておく慰めと気がつかず　帆雀
女房に慰められて生きてます　弘朗
神さんが吉とおっしゃるホンマかな　ただし
放っておくそれが慰めかも知れぬ　正子
泣きたいだけ泣いたらいいと慰める　三男
慰めの言葉はきざでないように　美代子
傷口の深さ慰めなどきかぬ　元江
佳

知らん振りしてお互いに気を使い　文子
慰めを片目で聞いているダルマ　可住
本当の慰め叱ってくれる友　度
ハンカチをさし出す人がいてくれる　艶子
慰めの言葉がうまい第三者　保州
人

花ばなに慰められて一人住む　いわを
地

出不精を誘い一日花の下　寿恵子
天

慰める受話器はそっとそっと置く　山本希久子
軸

慰めの届かぬとこで涙ふく

初歩教室

題 ― 合　鍵

辻　白渓子

今月の題「合鍵」は、共稼ぎ、鍵っ子に持たせる、家族中で所持すると言うように幅広いものがあり、表現が楽しかった。

合鍵はこれかこれかとさして見る　幸夫
（合鍵が多過ぎ探すのに困り）
合鍵を托して春のフルムーン　タミ
（合鍵を隣へ預けフルムーン）
合鍵が人目を偲ぶ橋渡し　好花
（合鍵を持って不倫が会いにくる）
合鍵が無いのでゲートせず帰り　志重
（合鍵をゲートボールへまで持たせ）
愛という合鍵こころ開かせる　洋
（合鍵が愛の深さを知っている）
億ションの合鍵渡す夢の夢　(松)隆
（億ションの合鍵迂闊に作らない）
相思相愛でも合鍵は別の物　治夢
（愛してはいるが合鍵渡さない）
合鍵を預け空巣にねらわれる　一枝
（合鍵が空巣になるとはつゆ知らず）
合鍵を渡してからが心配に　吉太郎
（合鍵を渡したことを少し悔い）
男が去って合鍵だけ残る　富喜子
（パトロンと切れ合鍵はもう要らぬ）
合鍵にも心が通う新家庭　明吉
（仲のよい家庭　合鍵知っている）
合鍵を造っておれば遅すぎる　敬
（合鍵を作らなかったことを悔い）
合鍵を握って妻の荷が重い　静子
（合鍵を妻も持ってる共稼ぎ）
合鍵が使われていたサスペンス　保夫
（合鍵がドラマのシーンに役に立つ）
共稼ぎ子供も合鍵持って出る　秀香
（子供にも合鍵持たす共稼ぎ）
合鍵が五分で出来る世の恐さ　(松)隆
（合鍵が五分で出来るので不安）
合鍵が親子の絆握ってる　マサヱ
（合鍵を夫も子供にも持たせ）
合鍵の要らぬ暮しの過疎の里　金吾
（合鍵の要らぬ暮しが過疎にある）
合鍵を子供に持たせパートに出　春風
（子供にも合鍵渡しとくパート）
忘れずに合鍵持って娘は嫁ぎ　真澄
（嫁に出た娘へ合鍵を渡しとく）
お別れの合鍵持って春の風　ひさ子
（合鍵を渡したくなる春の宵）
合鍵はしっかりと持つ子に育て　しづ子
（合鍵を預けて心配いらない子）
又合鍵無くしたとも言えず　すみれ
（合鍵を失くしてばかりいる夫）
合鍵に今日のプランを問うて見る　静江
（合鍵が今日のプランを知っている）
合鍵にリボンと鈴つけ一年生　暁子
（子に渡す合鍵リボンつけておく）
合鍵で心のとびら開かない　幟
（本心を探る合鍵などは無い）
合鍵を彼に預けて化粧する　廣子
（合鍵を渡し化粧を待たしとく）
合鍵の束で夜警ビル守り　繁男
（合鍵の数だけ夜警見て回り）
合鍵を子供が持ってる母子家庭　高雄
（母子家庭みんな合鍵持っている）
合鍵を一つずつ持つ日曜日　君江
（合鍵をみんなが持って家を空け）
何のため合鍵渡す火葬場　高栄
（火葬場も合鍵があり悲しい日）
合鍵と指輪が届き迷わない　和枝
（合鍵と指輪誓いにして渡す）
鍵っ子の鍵はブランコ乗りが好き　和子
（合鍵を持ちブランコへ来て遊ぶ）

合鍵はいらぬ窃盗のプロの腕　一乗
（合鍵のいらぬ泥棒だと分かり）
合鍵に不倫の匂い浸みている　ふさ子
（合鍵がはっきり不倫と知っている）
合鍵を返して一つの愛おわる　みつこ
（合鍵を失い恋が実らない）
合鍵を忘れて戻り縄のれん　辰男
（合鍵が忘れてあった縄のれん）
合鍵の数だけ恋を持つ女　絢子
（合鍵をパトロン以外にも渡し）
合鍵がもとで波乱の三下り半　友子
（合鍵が離婚のもとになるドラマ）
我が輩は合鍵無用と猫が言う　章久
（合鍵は要らんと猫が欠伸する）
極楽へ合鍵ほしい齢になり　はる子
（極楽へ行く合鍵がほしい齢）
合鍵を返して未練断ち切れず　幸枝
（合鍵を返し未練を持ちつづけ）
合鍵は一つと信じてる男　忠禄
（合鍵は一つと男うぬぼれる）
合鍵がいらぬ身分で夜毎泣く　喜代子
（合鍵がいらなくなって淋しい夜）
合鍵を捨て明日からの生活立て　ちず子
（立直る暮しに合鍵など要らず）
裏切りの手に合鍵握らせる　美代子
（裏切りと知らず合鍵まで持たせ）

合鍵で子供の世界覗き見る　民子
（合鍵でときどき覗く子供部屋）
合鍵で子等それぞれに帰宅する　侑里
（合鍵を子供に持たせている安堵）
合鍵を注文しては又落し　円女
（注文をした合鍵をまた無くし）
合鍵を渡された夜の胸さわぎ　清柳
合鍵を渡され夜が寝つけない）
合鍵をなくし別れの時らしい　芳水
（合鍵を無くし彼女と縁が切れ）
桃色の合鍵一ヶもて余す　渓声
（合鍵が重荷になって来た相手）
合鍵を車につんで夫のもと　とよ子
（車にも合鍵一つ載せておく）
異なった趣味合鍵を持って出る　美恵子
（趣味ちがうので合鍵が一つ要る）
合鍵を金庫の中にしまい込み　豊子
（金庫にも予備の合鍵入れてある）
合鍵が罪な秘密を抱いている　志華子
（合鍵が秘密を抱いているドラマ）
合鍵があるのか隣の猫が居る　隆雄
（合鍵がなくても出入りできる猫）
合鍵がポケットベルで呼びに来る　伊都子
（合鍵をポケットベルが呼んでいる）
鍵っ子の鍵を持たない日曜日　春枝
（休日だから合鍵が子に要らず）

合鍵の慌てなさんにかちんと来　太一郎
（気がせくと合鍵までも開きにくい）
ハネムーン合鍵は親持って待つ　杏村
（ハネムーン留守の合鍵預けられ）
合鍵を渡し世間が狭くなる　桂子
（合鍵を渡し我儘して暮らす）
娘たちへそれぞれ合鍵もたせてる　みつえ
（成人の娘が合鍵を持ちたがる）
合鍵を忘れて隣の屋根を借り　友熙
（合鍵を忘れ隣の屋根へ出る）
学校の鞄の底に鍵を入れ　春子
（合鍵を持たせ学校へ送り出し）
娘待つ村は鍵などいらぬほど　方子
（過疎にある実家合鍵などいらぬ）
合鍵は貴男だけよと泣いて見せ　幸夫
（合鍵を渡すしぐさにある芝居）

今月の着想・表現の良い句

出所して合鍵作る職につく　美代子
合鍵が掃除洗濯してくれる　忠禄
合鍵を夫の首輪にぶらさげる　高栄

私の句

早合点するから合鍵渡さない

◇

題「**同　居**」**6月15日**締切（8月号発表）

宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3―19
辻　白渓子

本社 五月句会

五月七日(火)午後五時半
メンズファッションセンター

「新緑寒波」と言われる気候の中、それぞれのゴールデン・ウィークが明けた九十五名が句会に集まった。これから開催される大会の案内、「日本川柳秀句集・推薦句集」参加の依頼、九月の台湾旅行の案内などの連絡が句会のはじまる前に行われた。初出席は、八尾市の吉村一風氏と南河内郡の粒山隆氏。

おはなしは、三月は風邪、四月は怪我でのびのびになっていた河内天笑氏が、傷も癒えての登場。内容は以下のとおりである。

去る三月末に近所の犬に右手くすり指を咬まれて二十日間入院、点滴の明け暮れの身となった。その間に路郎先生の句集『旅人』をじっくり読み返し、感動をあらたにした。頁をめくるごとに新しい世界がひらける心境で先生の孫弟子として川柳塔にかかわっている喜び、誇らしさを感じた。よく問題になる中八について、先生は寛大だったと聞くが、意外にも一句しか見当らなかった。

七・七の武玉川調や破調句、ユーモア句などの披露に久し振りにふれた路郎の句が今もなお古さが感じられないことに驚かされた。

席題は川柳文学社の一階八斗醸氏、「休む」の選は高須賀金太氏の代選。月間賞は西宮市の林はつ絵さんが獲得した。(ふ)

(司会—奏月)(受付—凡九郎・月子)
(記録—射月芳・月子)

席題「傷」　一階 八斗醸 選

犬に咬まれた傷をしみじみ恥じている　元紀
傷なめてなめて子猫のつぶらな眼　絹子
ツンドラの古傷疼きだす名薄　憲太郎
墨染の胸に消えない過去の傷　(小)英子
傷だらけアンタ日記をまだ書くの　凡九郎
古傷が痛む都会を狭く住み　雅文
子の火傷母は一生悔いを持つ　文秋
ふるさとにまだ傷いやす母がいる　昭子
難民の話戦傷疼き出す　蕗児
お互いの傷には触れず夫婦独楽　杜的
勲章になるよな傷は皆無です　三男
生傷に耐えて自転車乗りこなす　温子
傷ついて踏まれて強くなりました　美代子
古傷の一つと遇った北新地　鬼遊
傷心を癒してくれたにぎりめし　透太
良心の痛む傷なら時どきに　(福)英子
やんわりと言っても響くすねの傷　頂留子
追分の一本杉は傷を抱く　元紀
満月の輝き傷口語らない　比呂志
深追いはすまい私も傷を持つ　茜
他人様の傷の痛みにまた触れる　美代子
ふるさとの海へ抱かれに行った傷　重人
敵の傷あばいて春を見失う　幹斉
傷口をなめると海の味がする　奏月
爆弾の傷のこる橋語ります　ダン吉
古傷を忘れた顔で飲んでくれ　一風
傷ついた同士で肩が近くなる　隆
胸に傷ある同士で馬が合い　杜的
傷みせて又ひとくさり言う気だな　ダン吉
その傷にふれると回る走馬灯　楓楽
花散って恋のためらい傷がある　美房
青春のためらい傷がある無口　正坊
再会にためらい傷が疼き出し　満津子
地図にない道で傷だらけの天使　年代
鬼瓦　傷つくことに慣れている　桂香
母の部屋千人針の傷がある　奏月
傷あとの数だけなさけ秘めている　楓楽
胸の傷　癒えないままに雨季に入る　結実
傷心のお茶はぬるめの方がよい　絹子

軸

傷つけて傷つけられて若かった　八斗醸

兼題「城」　堀端三男 選

城までの距離を知ってる万歩計　(松)芳子
花散って城は余裕をとりもどす　奏月
城跡の古木が叫ぶ反戦歌　恭昌
過疎の村出ない二人の城守る　美房
老母はひとりの城を描いて生きている　年代

温かい言葉が返る城下町　一風
明け渡す城に滲みてる泣き笑い　章久
相合傘描いた故郷の城の壁　信義
明け渡す日には磨いておこう城　緑良
城一つ持つと男は強くなる　颯云児
城跡を守るさくらを植えかえる　螢
母の城　門はいつでも開けてある　結実
ビルの窓額ぶちにして天守閣　絹子
桜が咲くとお城も少し背伸びする　智子
砂あらしガラスの城を売りに出す　冬葉
城めぐり済むと遍路の杖買いに　度
二人だけの小さな城に四季の花　いわゑ
ボロボロの城で作業着高く干す　昭子
核家族櫓が一つずつ増える　シマ子
わが城を守らん夜の赤い爪　小路
城を持つ夢は忘れてない拳　ダン吉
ひと月が待ちきれなくて孫の城　千歩
草笛吹く少年がいた城の道　萬的
落城の秘史あり桜散り急ぐ　武庫坊
歯ブラシを二本揃えて愛の城　桂香
がらくたを捨てると城は空になる　結実
鍵一本で託せる城であたたかし　柳影
わが城にも足跡残す句碑一基　理瑛
今もなお名菓の残る城の町　吸江
生き恥を晒して帰る城がある　太茂津
いつの世も男は城に憧れる　透太
城のある街でブライド持ち続け　智子
城の石ドラマを抱いて幾星霜　いわゑ
未完成の城へ家紋がせきたてる　美代子

表札は連名にする小さい城　鬼遊
血のにじむ思いで建てた僕の城　颯云児
落城は無理とわかっていて通う　(片)英一
世の移りじっと見おろす城の石　元江
男にはいつも戦う城がある　保州
妥協して城の崩れる音を聞く　覚然坊
軸
天守閣仰ぎ帰ったなと想う　三男

兼題「重い」　吉岡美房選

言い訳がまだ見つからぬ重い足　八斗酥
石段のひとつひとつにある重み　(松)文子
フセインもブッシュも重い荷を背負い　(松)芳子
烏賊船が重い夜明けを待っている　英壬子
苛めっ子にも重い悲しみあるのです　ダン吉
別宅でぎっくり腰が出た重さ　栞
重い日も軽い日もある父の靴　正坊
重い荷を背負ってるからまだ死ねぬ　小路
重いつづら中味は賄賂という寓話　倫子
シーソーの向うで孫は重くなり　絹子
日銀の金庫の鍵を軽く持ち　鬼遊
ペン軸が少し重たい日のコラム　正坊
男坂　時には重い靴をはく　寿美
青葉道重い話は置き去りに　結実
試練です扉は重い方がよい　白洋
シナリオを変えると重い荷が下りる　はつ絵
責任の重さ鼻風邪こじらせる　度
掛時計振子が重いわだかまり　信義
試される仕事だ重いとは言わぬ　文秋

呑み込んだ言葉が今も胃に重い　満津子
重荷にはなりたくないと竹を踏む　昭子
追悼のペンに重たい雨が降る　桂香
約束の重さに花はふるえ出す　みつ子
初診料　命の重さかも知れぬ　保州
酔いどれて重い話を持ち帰る　吐来
善人の仮面が重い月の下　いわゑ
つまみ食いするたび罪が重くなる　結実
言い訳の靴が重くて進めない　颯云児
九条の重さを忘れてはならぬ　透太
腰の重いお方で夢も傾斜する　敬
男からもらったものが胃に重い　智子
判押して紙一枚を重くする　(新)正子
ねぎ坊主　明日が重たくならないか　はつ絵
佳
銃剣の重さ子孫へ残さない　千秀
葉桜は重い夕陽を浴びている　元紀
千羽鶴重い約束してしまう　いわゑ
長男の重さで母を看ています　(福)英子
重い口　開くと恐いことを言う　柳影
人
追伸に一言添えてある重味　憲太郎
地
椿落つふいにいのちが重くなる　楓楽
天
指切りの人がだんだん重くなる　天笑
軸
母の日のつけもの石が重くなる　美房

兼題「休　む」　高須賀　金太　選

三脚のベレーに蜻蛉が来て休む　多賀子
過労死になるまで休むこと知らぬ　雅文
働きすぎと日本の休暇切りにくる　幹斉
休み下手小さい体もてあまし　東雲
連休になれば仕事がなつかしい　年代
ここ三日さぼり続けた万歩計　章久
ずる休みもうばれている昼下がり　敬
ゴールデンウィーク全部寝ていたい　保州
切り株があるからちょっとだけ休む　智子
受験期が済んで神様ひと休み　露児
連休明けの歯車すこし錆が浮く　美代子
連休の躍日調べている暦　正坊
週休二日出勤怖い月曜日　笛生
デューダしたわけは休みが多いから　倫子
偶然に休んで二人怪しまれ　しげお
休んでも会社そのまま立っている　恵空
休止符がない真っ白な父の地図　諷云児
時々は仮病を使う妻の部屋　月子
産休にちょっぴり妬ける社の局　憲太郎
休日の姿で父は値踏みされ　射月芳
休止符もあってリズムが崩れない　はつ絵
年中が休日余生も楽でなし　杜的
連休も仕事の父を不思議がり　小路
充電した顔でありたい休み明け　楓楽
小休止すると歯車さびてくる　桂香
反対の祝日ですが休みます　美房
ちょっとしたいじめで休む癖がつき　勝晴
ささやかに無休の妻と湯のけむり　磯子
休日が続くと重くなる空気　武庫坊
スナックで企業戦士のひと休み　典子
この頃は土日に赤い灯も休む　(新)正子
たまの休みを狙い打ちして客がくる　千秀
佳
連休が終わって休みたい電車　白洋
生きている休むことなく血は巡る　元江
連休は家で充電しています　武庫坊
涙のような点滴休みなく落ちる　(松)文子
有給をとると気兼ねが走り出す　仙吉
人
或る日ふと妻も定年したくなる　美代子
地
過労死にならぬ程度に休んどく　雀踊子
天
雲悠々私も休むことにする　みつ子
軸
連休の疲れ出てきた事務机　金太

兼題「誓　う」　高杉　鬼遊　選

年頭の誓い桜とともに散る　三男
誓詞には夫婦別姓まで触れず　保州
誓うたび十指神から遠くなる　結実
誓詞など忘れ成田の離婚劇　倫子
郡上八幡　義民の誓い傘の陣　栞
その時は破るつもりはない誓い　寿美
軽く聞き軽く誓いをやぶってる　磯子
イミテーションの指輪で幸せを誓う　一二三
白無垢で誓った言葉嘘ばかり　東雲
しゃぼん玉に誓ったような恋だった　いわゑ
易々と誓い易々破る酒　温子
誓わねば実家へ帰る妻の乱　雀踊子
一豊の妻になります誓います　愛論
あっさりと誓いあっさり破られる　房子
誓うてもどうせデケヘンことですワ　凡九郎
延滞の税へなき泣き誓約書　小路
一枚の紙に誓うて縛られる　(松)芳子
うたかたの古稀　古稀なりに誓う朝　吐来
もうなにも妻に誓いは立てません　(片)英一
医者とする誓いは好きな酒をやめ　覚然坊
神掛けてまだそのうえに誓約書　保州
誓うかととっても恐いことを言う　ダン吉
金のある間は誓っている女　昭子
金婚式　愛を誓ったことはない　満津子
禁煙を誓うと妻が馬鹿にする　正坊
誓約の一つを破る終電車　千歩
お膳立て通りめでたく誓詞読む　柳宏子
宇野重吉ののぼりに誓うものがある　幹斉
九条の誓いを破る船を出す　透太
独りで誓いひとりで守る愛ひとつ　みつ子
夫婦結びも誓いも少しゆるみがち　寿美
佳
禁酒禁煙　誓ったその夜の誓い酒　柳弘
大安に誓い大安の日に別れ　杜的
神様もうっかりしてた誓いごと　しげお
禁煙を誓うと神に笑われる　白渓子
なんべんも誓った酒を飲んでいる　磯子

人

禁煙を誓ってからの物忘れ　(小)英子
地

禁酒する誓いの絵馬が揺れている　典子
天

芯のないリンゴに誓うものがない　幹斉
軸

禁煙は誰でもできる何度でも　鬼遊

兼題「古典」　西尾栞選

古典追う息子に嫁が見つからぬ　(福)英子
自分史をやがて古典の恋にする　規不風
古典的なあなたが一寸邪魔になる　(松)文子
西鶴を読み過ぎケチになりました　透太
カセットで源氏を読んでおりますの　(新)正子
胎教に夢を拡げるクラシック　隆
古典とやこよなく愛す柳多留　眉水
いとあわれいとおかしける古書と会う　美房
春はあけぼの才女の筆は美しき　元紀
米櫃は空　邪馬台国を論じても　度
古典読む女の眼鏡度がすすむ　射月芳
光源氏に似てる先祖もいたそうな　一二三
古事記にも悪い神様いた神話　雅文
ひとつ覚えの古典落語で食いつなぐ　冬葉
少年の日よのらくろはもう古典　章
時に女は古典の中に生きている　みつ子
成すべきか成さざるべきかハムレット　(片)英一
女郎花　少しはなれてきく古典　岳人
ベートーベンのひと節盗みヒット曲　天笑
光源氏へ男は夢をはらませる　(松)芳子
平成と古典を結ぶ月の暈　吐来
隣席の人も読んでる太平記　正坊
王羲之の古典の良さを知る臨書　狸村
終章に論語の一節書き添える　吸江
青い目に古典の魅力聞いている　昭子
このへんで緑茶が欲しくなる古典　重人
古典では優しい鬼も居たらしい　紫香
註釈がついて漱石もう古典　絹子
俗物の身も命名は古典から　倫子
古典的雅語が身につく齢らしい　多賀子
石山の式部の部屋で語り合う　友熙
ブームから漫画で読んでいる古典　勝美
清少納言に好かれぬけれど化粧する　絹子
佳

ひもとけば古典の神も女好き　愛論
いっときのゆとりほしくて古典よむ　頂留子
クラシックの曲で癒やさん入試明け　小路
春本の古典きれいな言いまわし　萬的
古典から貰った座右の銘がある　茜
人

文学も古典も知って居た女将　幹斉
地

三十六歌仙　上手に書いて未だ嫁かず　杜的
天

藤の花　古典ゆかしき祭呼ぶ　はつ絵
軸

ライバルの古典の言葉美しき　栞
（清記―楓楽）

第22回奈良新聞川柳大会

とき　**6月23日**(日)午前10時開場

ところ　大和神社　朝和会館
（天理市新泉町）

交通便　JR桜井線長柄駅から東南8分

宿題（各題2句・午前11時半締切）
「荷物」　福田　秋雄選
「重い」　石岡　正司選
「人気」　宮口　笛生選
「貝」　伊藤　定子選
「信頼」　河合　渡口選
「文通」　歌藤　一麦選
「台所」　片岡つとむ選

※当日席題1題

会費　2500円(昼食・発表誌呈)

投句料　500円（発表誌呈）

申込先　奈良市三条町511　正本ビル
奈良新聞社文化事業部川柳係

投句先　奈良市北市中町71　杉野睦朗

※申込・投句は**6月18日**まで

主催　奈良新聞社



原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月**25日**締切・30句以内厳守　**編集部**

川柳クラブわたの花　片上　英一報

結納金着物一枚しか買えぬ　シマ子
シャンデリア和服が競うクラス会　章
ふるえてる夫尻目に買う着物　美津留
花会式　着物美人のゆく野点　君江
幸せに今日も感謝の仕舞い風呂　初子
感謝する言葉も知らぬ子を育て　一雄
停年が延びて妻からもらうバラ　一風
かゆをたく娘の背に甘えてる　朝子
観念し胃カメラのんだ異常なし　その
誕生日感謝を込めてスイトピー　芙美子
より添うて寒の戻りのそばを食う　弘直
サングラス羽田ゲートで見すかされ　しげる
五線譜にはずれた唄をもてはやし　暁子
送る人送られる人残る波　隆
炊事する横から夫がのぞき込み　みき子
定年の夫炊事に興味もち　ますみ
平成の男上手に炊事する　トシエ
調理器に振り回されて落とす味　正子
泡立器で米といでいる赤い爪　春子
即席の好きな女子大家政科出　英一
ふかし芋少女になっていつくしむ　幸枝
食器洗浄機置きどころなしわが家なり　泰成
割烹着作りましたよお父さん　友甫
あるもので済ます女のおひる時　鬼遊

聴障川柳　稲田　豊作報

勤労者安値の汗を惜しまない　豊作
汗流す一番風呂や老いの幸　美乃留
ひとすじの道を歩いて来た汗よ　三香
福男めざして沸かす汗の湯気　真女
国防婦人流した汗を思い出す　八恵子
この汗の花になる日を待ってます　静子
おだてられ冷汗かいてネブカ節　たみ
汗拭いて涼しい風に感謝する　鏡香
容赦なくおめかし顔に汗にじむ　みつる
初運転の孫に同乗汗ビショリ　柳香
庶民の汗の九十億ドル何に使う　末子
農家では汗が尊い宝なり　健太郎
弁解もしどろもどろの脂汗　才代

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

偶然というには役者揃いすぎ　正坊
約束を交わすかたい握手する　〆女
初孫の名前を決める辞典見る　春風
偶然が重なり二人結ばれる　遊美
勝ったなと思う一と鞭あてながら　紫香
胸衿を開いて鬼と酌み交わす　杜的
欠点を補い合っている夫婦　芳子
山道で「お気をつけて」とすれ違う　栄子
まだ皿が返ってこないお裾分け　しげお
鞭よりも無言の父に背を打たれ　武庫坊
約束を交わして春の電話切る　年代
文通を交わして恋の花みのる　波留吉
愛の鞭だったと先生逃げている　冬葉
点があった無かった辞典だして来る　茶の子
退職の日から自由な風に乗る　颯云児
愛の鞭そんな言葉にしごかれる　スミ子
偶然が二度も続いてこわくなる　節子
偶然に旧友と逢うたバスツアー　花代子
堂々と男とぼける顔をもつ　静江
偶然に出逢った友は杖突いて　多賀子
挨拶を交わすと選挙の匂いする　白渓子
老骨に鞭打ち目指すものがある　英一
溺れようあなたの鞭の下ならば　礫
常連が始発の駅へ来ぬ不安　百合子
仲たがい交わす言葉に剣がある　庸佑
結納を交わすと親の目を離れ　正恣
感覚のずれを子供に教えられ　晴美

岸和田川柳会　芳地　狸村報

団らんの絵に父さんが出てこない　すみえ
喫茶店隅の椅子好き君と僕　恵空
うっとりと猿も浸っているいで湯　通彦
旗を振る妻をうっとり見ています　一弥
焼き肌の艶にうっとりする陶師　狸村
タイミングよくお辞儀してほめられる　小絞

絵日記に網よりでかい蝶が飛び　さよ子
母さんが一番大きい子供の絵　武助
椅子取りのゲームが下手な父でよし　甘平
頂点を極めた椅子にもある焦り　ひで
たかがお辞儀僕はとっても苦手です　ダン吉
よう躾してはるらしい子のお辞儀　こう
焦りから諦めとなる手形抱く　白光子
絵ハガキに旅してますとだけ息子　冨志子
君が代が済むまで椅子は遠慮する　二南
十九億どこがいいのかモジリアニ　勝晴
焦る僕へ貨物列車の長いこと　萬的
隅っこに僕の落ち着く椅子がある　柳宏子

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

共に散る笑顔の花に悔いはない　マサエ
謎かけて私を試すおつもりか　白柳子
紀子さんのような嫁さんさがしてる　明人
願いごと信じてみます流れ星　迷香
手をこまねいて居ては喜び摑めない　伽名子
気短で情にはもろい亡父でした　ひかり
さかさ富士鏡のような山中湖　チカエ
立春になって寒さがぐっと増し　よしみ
蕗の薹土もち上げて春起こし　吟笑
朝もやの銀波におどる鰯漁　正雪
選挙ともなれば親戚急に増え　迷貫
あらたまの年の初めに背伸びする　いさむ
湾岸のニュースで今日も明け暮れる　放任
節分の湯に風邪をあたためる　スミエ
童謡で宴も終わりのクラス会　かおり
旬の字がゆっくり座る席がない　迷観子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

子の熨斗目歳月綴り曽孫に　江山
午前四時回りはじめる嫁の独楽　ふさえ
知恵の輪も解けないままに黄昏る　半仙
喧嘩するエネルギーだけ持ちあわせ　志重
芝焼いて後楽園の春支度　秀香
モーニング孫見直した男振り　吟平
幸せの朝味噌汁の香があふれ　山人
おふくろの味噌汁うまい快復期　すみれ
味噌汁でぬくもり余寒の朝へ出る　久江
脱線をした日もあった古日記　伊久栄
脱線のことは妻にも秘めておく　甫正
脱線も交え気をひく話し方　美恵子
ほどほどの程病みついてからわかり　賛平

川柳東大阪　森下　愛論報

風のやさしさで仏の道に佇つ　湖風
正直に生きてしんどい風に合う　猪太郎
風が鳴る何故人間は殺し合う　信治
都会には染まらぬ島の白い風　雀踊子
針箱に母の内緒が隠れてる　章久
慶びの日へせかされるしつけ針　恒明
観念を強いられている注射針　二南
予定した程に進まぬ毛糸針　庸佑
世相斬るコラムへ拍手送っとく　柳宏子
暗い世相に一灯ともす皇太子　一度
一コマの漫画世相を串刺しに　孤舟
世相の一つ砂山が崩れ出す　白兎
いたずらをすると輝くつぶらな瞳　文秋
触れた手をいたずら者にして騒ぎ　頂留子
ファイト一発ドリンク剤から貰う　晋吾
ギャグ一発笑いの渦がまきおこる　美子
おどし銃一発目だけで逃げている　隆
秒読みが始まる一発から地獄　作二郎

三幸川柳教室　三宅　保州報

巣立たせて変り映えせぬ顔と居る　道子
巣立ち行く鳥も知ってる大安日　芙美子
痛いとこ衝かれた胸の乱調子　百合子
子が巣立ち私と猫の暇な午後　千枝子

佳句地十選（五月号から）

吐田公一選

辞書にないカナに出合うと咳が出る　武庫坊
二度とないこの世はせめて浮名でも　サワ子
石投げて昔と違う川の音　荒介
春風と親しみ軽い物忘れ　みつ子
反逆の芽にもたっぷり水をやる　緑良
兄弟も嫁の歩幅で距離ができ　俊路
その昔夫も敬語で語りかけ　典子
父の背をとび越す助走くり返す　美子
好きだから全て条件捨てました　かりん
間の悪い時に姑やってくる　倫子

一家言持ち根気よく店守る　かなめ
グループで飲み爽やかな頭割り　玉枝
電話口思わず頭下げている　(中)幸子
巣立つ子が思い出詰めた古机　美子
子の巣立ち見とどけ視点切りかえる　三千子
快調な朝だ化粧がよくなじむ　靖子
調子づく亀が兎を慌てさせ　みね
人脈へジグソーパズル組立てる　桂香
ペンだこに慰められている根気　千秀
頭とは違う本音が口に出る　(松)幸子
叩いたら不協和音を出す頭　公子
歩行者へ頭上注意という不遜　鉄治
挫折感見せてはならぬ旗頭　当代
背くらべ頭ひとつが抜け出せぬ　高夫
真っ直ぐに自己主張する葱坊主　和子
頭から意見の違うピカソの絵　孝子
釈明は頭丸める程のこと　茜
先頭の雑魚は覚悟を決めている　保州
根気よく履歴書ばかり書いている　親踏
へらぶなに根気の無さを見透かされ　正雄
日銭負う根気誰にも負けぬ自負　育子
ライオンの巣立ち谷底知っている　章子
母上さま初サラリーの一部です　清
調子よい包丁のおと母の音　町子
調子よくお手まで覚え捨てられる　(上)幸子
嘘ばかり書いて調子のよい日記　好笑

川柳岩出　小倉　アサ報

今ここは上手に叱り道正す　正直
人形が着ると千代紙唄になり　和子
確実に呆けない唄を探そうよ　愛子
人形のまなざし人の心ひく　瑞穂
見かけには沿わぬ上手な渡世術　綾子
きき上手おだて上手のまとめ役　永年
愛の鞭探す瞳は澄んでいる　幸子
いい答弁探しそこねて記事を生み　悦男
上手下手あるので励む何事も　義美
上手口言われて怒る人はない　千代子
口上手信用出来ず背を向ける　喜市
人形は遠い思い出連れてくる　英子
上手ではないが続けている響き　アサ
甘えから嘘が上手になる恐さ　春子
一人芝居上手になっていく孤独　昌子
人形はいつも反逆考える　精子
その裏はちゃんと読んでる聞き上手　忠雄
人形を造る男の背がまるい　与呂志

川柳藤井寺　高田美代子報

三角の底辺あぐらかいている　三夫
二度目で仏も許すのを迷う　美房
二度目にうっかり同じ嘘をつく　柳太
家裁からけじめをつけた顔が出る　透太
三文判これでけじめがつけられる　三郎
物事にけじめがつけば肩がこり　きよし
学校と親でけじめをなすりあい　淑子
雑魚と雑魚仲々けじめつけられず　知之
人間の自由の中にあるけじめ　治子
寒椿冬のけじめをつけて散る　義一
胸の灯がけじめをつけて船出する　信子
この辺でけじめにしようお茶にしよう　昭子
傘立にけじめの雨がたまってる　与呂志
幸せが逃げそうけじめ伏せておく　吸江
うしろ姿で父はけじめを語るなり　森子
線を引かねばなるまい三度目の偶然　和子
週休二日働き蜂にある悩み　悦子
碁をうって出番待ってるエキストラ　利武
いっ時の余暇で情死にあこがれる　おさむ
今日もまた遂に出番のない補欠　志洋
散髪屋でウダウダ一時間喋り　一屯
入門書ばかり並べて老いの余暇　寿美
立話荷物がだんだん重くなる　昌子
錠剤を数えて暇をもてあまし　しげお
いんぎんにお辞儀しているずるい奴　繁男
お縄さまやっと出られた段の上　キミ子
停電かそうかと点字読み続け　たかし
頂点に立つとそよ風怖くなる　政代
ただ酒にうっかり喋る口封じ　修六
まだ旅の途中で止まれない駱駝　美代子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

お年だと言われて鏡まじまじと　紀一
フィーリング買わされている健康食　ふさ子
寒風に身しろぎもせぬ釣りの人　ちよ
妻臥して指図通りに飯を炊く　治幸
均等法妻の態度が太くなり　喜久亭
減反し蜜柑も伐って金になり　義美
弁解を聞けばなる程その通り　高明

始まりも終りも電話で済んだ恋　四郎
揚げ雲雀春を迎えるレセプション　旭恒
ヒーッと鳴る真夜心の神を見る　ハル
春風が耳をくすぐりを又揺する　虹汀
ひと仕事終えてとどめの美酒に酔う　遊女
和楽器のお囃子で舞う里神楽　朴竜
遺伝子を矯めてモラルを消して行く　正敏

岩美川柳会　羽津川公乃報

ロボットになれと始業のベルが鳴る　單車
花束と熱い拍手で初登庁　美代子
手のふれる土は豊かな息を吸う　照女
子育ての積木にボンドつけている　忠良
酒瓶がゴロゴロ男冥利だな　公乃
酒瓶もわたしも転び花終る　大漁
空瓶へストレス吐いて栓をする　美恵子

川柳ささやま社　遠山　可住報

石投げて下校の道に詩がある　とよ子
長い列まんなかにいて安堵する　純子
蒼い海に抱かれてしまった情けごと　恵美
どん底で受けた情けへ返す汗　貞子
雪解けてコケシも旅の化粧する　テル
有頂天少しずらして釘を打つ　とみ子
眼底にドラマ一つが揺れ動く　靖子
紙漉きの過疎を支えて夫婦びな　ヒサ子
忍一字手本に生きて来た余生　和子
あやつりの糸にかけてる人形師　つや子
よい手本継ぐ気になれぬ重い鍬　百合子

鍋底におんなで燃えた染みがある　冨美
稲畑の人形が語るわらべ唄　素水
茶柱が底に沈んでからの闇　文平
どたん場で知らされました底力　越山
お手本の無口の背なを追っかける　可住

京都塔の会　松川　杜的報

小鳥たちを起こしてほんのり東山　求芽
沈丁花ほんのり春を匂わせる　英子
寿司つまむ女ほんのり酔うている　〆女
暖房がほんのり効いている床屋　白渓子
春やなあ羅漢もほんのり酔うてはる　杜的
磯の香が男のロマン育てあげ　武庫坊
磯の香をだんだん消してゆく汚染　芳子
ライバルの階級進む春の冷え　栄
高速化進み旅情が消える旅　圭坊
尾骶骨さすり信じる進化論　百合子
とんとんと進む話に罠がある　諷云児
大人の知恵淋しと思う夜がある　萬的
入れ知恵を誰かしている電話口　正坊
お知恵拝借などと言われたことがない　年代
いい嫁でときどき姑の知恵を借る　紫香
磯づたいにゆけば少女の頃の家　礫
アゲマンが進軍ラッパ離さない　ただし
原発の工事が進んでる不安　飛鳥
それ以上進むと不倫沙汰になる　二南
大学で学んだ知恵も生かされぬ　巨詩
知恵のない話墓穴を掘っている　倫子
知恵袋小出しに振って老夫婦　葉子

井戸端で手ぬきの知恵を競い合う　福子
ああしんどかったと符箋付き手紙　しげお
助け舟多く仲直りが出来ぬ　てる
通り雨待って嵯峨野の久し振り　達子
戦争終結撤退と言い張る悲しさよ　水客

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

シナリオにもう一人あなた書き添える　歳栄
おもわくはさておき私は苺買う　民子
シナリオを狂わす女のしのび足　鈴江
おもわくを知っていたのは水枕　かつ子
お互いにおもわく絡める水面下　ヒデ子
おもわくへ夫の一言釘をさし　芳枝
十円におもわく抱かせ投げ入れる　好栄
反抗期シナリオ一応蹴ってみた　聖子
おもわくがはずれた時の置きどころ　ちよえ
足音がおもわく違い語ってる　恵美子
肩書きをはずしてシナリオ書き替える　智重子
シナリオの中で死んだり生まれたり　はるみ
わが家にもペレストロイカ欲しい日が　悦良
シナリオと思えば軽い目まいです　博利
および腰一人前の酒をのみ　清泉
おもわくへ絵の具の色が足りませぬ　白汀

きゃらぼく川柳会　政岡日枝子報

木蓮の香りに浮かぶ恋がある　正子
峠の茶屋で楽しく語り別れよう　夕子
窓開けて春としばらく話しこむ　由美子
ベレー帽春のおしゃれをしてみよう　なみ

銀のさじも歯型残したまま老いた　　とも子
母の来た道を辿って苦しくなる　　みど里
巣を移すその日午後から雪となる　　瑞枝
移された松が素直に伸びてゆく　　ゆき
この家のにおい移って五十年　　八重子
住まいを移し有機野菜を作っている　　朗子
椿の苗木移して偲ぶ亡父の忌に　　千春
移る世にここは千古の水流れ　　ふみ
移るたび確かな道を歩きだす　　亜弥
移りゆく流れに添うただけのこと　　玲子
亡き父のかも居の高さ帽子かけ　　てい子
佗助は庭に移してから枯れた　　富美子
許されよ心移すを一度だけ　　松子
籍を移して刻々と妻他人なり　　日枝子
戸籍を移す何の疑問も持たないで　　恵子
この部屋に移すとオウムよくしゃべり　　花子
移籍してやっと芽吹いた二軍打者　　寿々子
移る季になお立ち向う蟬の殻　　荒介
母の雛幾つも峠を越えてきた　　保子
火消しつぼうっかり風を移された　　千代
偶然を装う父の風だった　　より子
偶然の出逢いへ恋の花が咲く　　やえ
色あせた帽子に恋を教えよう　　高代

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

簡単に貸して返済長過ぎる　　暁
四十二で恋が実った長かった　　友夫
吉報を待つ一日の長いこと　　粗粒
長い冬　春一番で目を覚ます　　政子
長い目で見たら素直に子が育ち　　山人
長かった北の遺骨にやっと会え　　砂山花
まだ咲かぬ花だが長い目で見よう　　俊路
つっ張りの子も卒業歌涙ぐむ　　一枝
過疎の村　大学卒も嫁がない　　よしお
嫁が来て主婦を卒業させてくれ　　由多香
道楽は卒業墓石でも買うか　　大漁
大卒の息子が故郷へ帰らない　　圭一郎
人生に卒業のない坂登る　　喬水
卒業のない大学に妻と行く　　多可志
卒業をしたら帰ってこいという　　螢
欲のない顔を作るに苦労する　　忠雄
欲も苦も流して今日の仕舞い風呂　　亭
逆鱗にふれぬ程度に欲を持つ　　輪多朗
欲深い女　仏になりきれず　　侑里
果てしない欲にブレーキかからない　　旋風
欲ばれば顔までそんな顔になる　　艶子
生きる欲医者にも通う日が続き　　秀和
欲ボケか俺の水だけ濁ってる　　天涯
一畳をふさぐ男に欲がない　　帆雀

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

海鳴りを聞かせてやろう天下り　　ひろし
草むしり蕾をみては引き抜けず　　玲子
原油放流アラーの神も許すまい　　よしえ
ふられた日ふったと日記に書いておく　　康子
嘘の皮も漢方薬で売ってある　　康志
大海を一呑みにする気で生きる　　秋人
小心で嘘などつけるはずがない　　千代子
世渡りに嘘も方便だと習う　　かつみ
関取も豆選手には勝ちゆずる　　ひさ子
投票用紙に嘘つきと書きました　　石花菜
愚痴言わぬ海が中国まで続く　　和枝
塵拾うせめて海への申し訳　　しづ江
適当に嘘つきながら生きている　　勝見
角力好きの母さんがいて茶の間沸く　　秋女
蕾からとられてしまう梨の花　　御前
下手な嘘ついて尻もちばかりつく　　瑞枝
姉さんと相撲を取ったことがある　　荒介
嘘ついた後でコーラ飲んでおく　　とみお
運命と四ッに組む気で水を汲む　　千代
逆上り出来てうれしい電話くる　　ゆり子
女人禁制女は土俵に上れない　　独歩
嘘ばれてしばらく蚊帳の外の人　　菩句

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

聴病な影で俺からはなれない　　勝美
森に入り森の影さえ見失う　　隆
巣立つ子に母影からの背の祈り　　喜風
遠のいた影は追わないことにする　　二南
影踏んで帰る夜道の遠いこと　　弘直
忘却の影は今でもつきまとう　　正子
出発進行駅の造花をあとにして　　作二郎
出発は橋を渡って考える　　悦郎
赤紙で出発石ころだけ帰る　　晋吾
スタートはゼロからだった夫婦舟　　かつみ
頑張れな再出発に歳はない　　頂留子
アメリカの目くばせ日本躍り出す　　美幸

躍進のもとはひとりの左利き　重人
水を得た天職心はずんでる　一風
半分は踊らされてるデモの列　覚然坊
出遅れのせいにしている伸び悩み　律子
テープ切る汗と涙のゴールイン　春堂
ふきのとう春だ四月だ出発だ　度
躍進する街に居づらい辻地蔵　シマ子
矢印に嘘がないとは限らない　白洋
歳月の素顔に嘘のない鏡　章
影武者も信じられなくなる窮地　柳宏子
あやとりの影をうつした春の月　春子
嘘ひとつつけず夕陽のあたる席　英一
精いっぱい生きていこうなあ影よ　欣之
いい知らせ躍る心を抱いて寝る　とみを
満席を待って棹さす川下り　雅士
雪解けの過疎出稼ぎが近くなる　柳伸
器用ではなかった亡父の影絵恋う　宏子

川柳泉尾　吉川　寿美報

何も彼も小っぽけでっかい陽が沈む　はつ子
郵便屋困らすような字が届く　葉子
達筆であれば手紙にしますのに　靖子
自分のことが自分で出来る生きている　(寺)文子
妥協するドスンと夜の下敷に　美子
悪玉が心の中に居座った　途子
心の奥見える鏡で伏せている　和子
立春を聞いた蛙の勇み足　伴子
残像の背から静かに夕焼ける　寿美
若ゴボウ春の香りを炊いている　みさ子

お帰りの声が大根刻んでる　一枝
ワープロの手紙一筆書き添える　可愛
内緒ごとみんな知ってる赤ポスト　キミ子
郵便できっちり送る督促状　美南子
郵便もみかんも積んだ船が着く　美代子
西成の消印がある父の文　鬼遊
夕焼ややはり地球は美しい　サチ
魚焼く炭火も遠い過去となり　シマ子
夕焼けの空の向うに春がある　(中)文子
萩焼の素朴な色に魅せられる　義一
世話焼きで噂の中に居りたがる　淑子
妻の意地素焼きの皿にちょいと盛る　マリ子
焼け跡へどの子も痛み抱いている　シメ子
手紙焼く過去を喋らないうちに　あさこ
空襲で焼かれた話いまもする　美津子
焼けて死ぬ駱駝もあろう暗い月　弘子
備長炭サンマの詩を聞いている　悦子
夕焼け小焼け勘三郎は街暮し　トミ子
それからはすべてを灰にすることに　千歩

尾浜川柳会　前田いわお報

詳しくは言わずにお茶をにごらせる　敏之
痴話喧嘩詳しい事は聞かず居る　江美
酔うた振り酒を断るすべ覚え　いわお
酔いざめの妻が差し出すうまい水　義嗣
桜見に花見どころか人に酔う　保蔵
縁談がまとまりうまい酒に酔う　昌子
底抜けの笑い奇麗なす化粧　向西
約定書詳しいことは虫眼鏡　修水

味覚散歩詳しく記す気まま旅　澄子
不倫とは思いたくない不倫する　石舟
一筆啓上寛ぐことを知らぬ鬼　歌子
少し耳遠いが町に詳しくて　紫香
道草がとても楽しいランドセル　すみ
子育ての雀寛ぐ暇がない　六浦
退院の母と寛ぐ桃の酒　弘治
寛ぎの膝を狙ってくる仔猫　十四郎
寛いでいる暇がない母の背な　夢之助
蕾ではまだ寛げぬ手弁当　二南

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

マグマにもなれずわたしの半生紀　きみえ
酒　女マグマなだめて平和です　蘭水
一人居にマグマは顔をのぞかせぬ　邦代
誕生のマグマはきっと鮮血だ　友子
マグマより怖い油井が燃えつづけ　雄々
知らぬ間にマグマ住みつく癌告知　多賀子
中古でも磨けば光る土根性　静江
まだ動く中古でサロンパスを貼る　文子
中古へ赤紙が来る人不足　妻子
ギブアップ出来ぬ中古の焦り見る　たつみ
人間も中古になってどっこいしょ　みえ
中古を生かす女の裁ちばさみ　房子
中古で悪かったねと妻は妬き　清志
新妻も中古になると尻すわる　登志子
ねぎ坊主一本だけが臍まがり　満江
お花見がすんで晴れ出す臍まがり　一葉
臍まがり親子で歯車かみ合わず　米子

臍まがり歌に小節がつきかねる　かおる
世の中を真っ直ぐに見る臍まがり　雀踊子
臍まがりどうあがいても日は西に　桂子
臍まがり子の臍まがりには弱り　芳枝
臍まげて大礼服を干している　長三
故郷に親馬鹿がいて気にかかる　寿美子
親馬鹿の病名愛情過多症候群　鶴丸
親馬鹿がウドの大木育ててる　与根一
泣きに来るのを待っている里の母　太泡
親馬鹿を袋に詰める娘の帰省　義良
目の玉の動きすがに見逃がさぬ　静恵
掌中の玉を奪った車事故　代仕男
パチンコ玉転げてからの家庭不和　叮紅

川柳たけはら　森井　菁居報

ようようしてもろて幸せでした（辞世の句）　静水
元気いっぱい外で遊ぶぞ春休み　小四千枝
母さんをみるのがこわいつうしんぼ　小六史子
鬼から鬼へバトンタッチは出来ている　菁居
真っ白い風景にいるひとりぼっち　蘭幸
そして今諸行無常の鐘を撞く　勲
亡母の齢亡母のしぐさに似て来そう　麻代
今日一日相撲みられぬイラク戦　ヤスエ
戦争はいやだと書いた白い布　浪子
みそ汁が一番美味い歳となる　喜久恵
反発はしないが釘はさしておく　栄恵
散りぎわのかくありたしや落椿　静佳
遊園地親に似てる子似てない子　清水
美容院心残りの週刊誌　愛子

やめられぬ煙草を一つ買ってくる　比呂子
煩悩脱皮白磁のような骨　房子
小さい幸チューリップ芽伸びている　一枝
駅ごとに憂さ捨てていくひとり旅　博子
欲の無い筆で無題の絵を描こう　一路
栄枯盛衰蝶々の羽化を見届ける　笑子
休肝日へ飛び込んで来る飲む話　節夫
小さな旅人に春の雨やさし　千代美
春浅く情熱の師の旅立ちよ　淑子
もたついていたら終った砂嵐　新造
笛吹けば森に明るい朝が来る　喜美子
結婚記念日かなし訣れの日となりぬ　静風
外は雨ショパンの似合う雨の午後　伸子
あしたはあしただ父の演技はまだ盗れぬ　観杏
酒臭い部屋で書いてる酒の詩　美佐雄
心の向き変わるお酒なら飲もう　貞子

城北川柳会　吐田　公一報

菓子袋みやげに帰る北の春　ふみ
シベリアの思い出語る湯気の中　静歩
湯殿には着替え揃えて母の愛　寿美礼
戦争を人事として見る恐さ　きくゑ
傾いた時も見て来たまねき猫　温子
猫抱いて時の流れの外にいる　静子
一と言が袋叩きの種となり　新一郎
楽しさと哀れさ交る盗み酒　白峰
流転こそ美学とフリーアルバイター　ただし
露天風呂で月の雫を手に受ける　達子
決断はすぐつけられる紙袋　典子

惜しいけど未完のままの曲がいい　公一
吹雪舞う北山杉を磨く素手　八重子
おろおろと素手の男のかげに居る　史風
足袋白く乾いて逢えぬ日がつづく　文子
甘い蜜吸わせてくれた雄の恩　佐津乃
こう投げてこう受けている夫婦です　昭子
啓蟄にあわててやおら旅支度　仙吉郎
湯気の中子らの笑いがこだまする　秀夫
北浜の素手が明暗ふり分ける　満津子
春愁を微熱のように抱いている　倫子
喜寿の春時の流れる音がする　登美子
背を向けて妻猫と寝る倦怠期　右近

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

桜満開祖母にお祈りあるばかり　杜的
桜咲くすべてのものが素晴らしい　年代
老いてなお朱の花一つ胸に抱く　香子
この夫とよくぞここまで花の冷え　宏子
あかずの門庭の桜はまっ盛り　萬的
門構え大臣はみな金持だ　鬼遊
旅に来て門限のない花あかり　千歩
釣合わぬ門と仲人にも分かり　白渓子
門番の仁王に春陽優しすぎ　英子
門くぐってきた春風と嫁の荷と　たず子
門を出るとピエロの面が落ちていた　武庫坊
月参り門前に買う唐がらし　よし津
その朝の日がありがたい眼科室　絹子
平平凡凡その日の無事が有難し　春蘭
ありがたい今朝も十指がみな動く　いわゑ

幸せの中で気付かぬありがたさ　はつ絵
母の遺志貫く梅を干してます　光代
反骨を貫く矢尻錆びてくる　園歩
つまずいた石を大事にポケットに　みつ子
貫いた意地に孤独の影がある　芳子
今もって和服で通す老母達者　江美
ひと刺しで貫く槍をもつおんな　しげお
持論曲げぬ青年怖いものは無い　冨久恵
主義主張貫く父のモンブラン　正坊
言いそびれ胃薬ばかり飲んでいる　富喜子
長旅を終えて寛ぐ四畳半　保蔵
色眼鏡かけて世間を甘く見る　諷云児
心配をさせる娘の一人旅　柳影
駅へ来てからイヤリングつける母　てる
母からの便りに心ときめかす　美智子
開門へもう走る気で待っている　紫香

翠洋会　井上照子報

吠えている虎も魔術の火をくぐる　照子
乳をやる娘の顔が温かい　みち子
何程の馳走もないのに母の味　叡子
みどり色ですバアチャンの知恵袋　蛙
銀婚式みどりの髪も共白髪　絹子
サーカスのピエロの心誰が知る　みよ子
道草を八十三年喰い続け　真
ふところがぬくいとついつい羽目はずす　すすむ
今年また来たサーカスへ児のねだり　正雄
人の世が二重うつしになるピエロ　宏子
お人好しいつもピエロを買って出る　恭昌

窮地にて思わぬ人に受く温み　綾子
友情の温い言葉にほろりする　登志実
花冷えの傘に二人の暖かさ　東雲
サーカスの象も謀反を考える　英一
サーカスを見てからすきな肩車　しげお
花一輪温い言葉を抱いている　透太
暖かな言葉に飢えてまだひとり　千歩
マンションが建ってサーカス来なくなる　みつ子
老いたピエロでもう綱は渡れない　正坊
サーカスに売るぞとこわい親だった　さと美
ボリショイの熊核ボタンなど押さぬ　楓楽
ジンタの音幼い夢のひとこまに　光子
あの人に会えばいつでも暖かい　射月芳
葉桜はさくらの花の化身かも　良江
待たされた思いも染まっているみどり　春子
朝市で人の温みも買って来る　宣司
おまつりへもうサーカスの小屋がたち　いつを
メリヤスはもう脱ぎなさいお父さん　鬼遊

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

がめついと言われた日もある母子家庭　栄
仏さまをだしにがめついお寺はん　英子
経木流しの裏でさい銭数えている　作二郎
大阪弁ほどにがめついことはない　水声
今日だけは淑女にしてるお茶の会　敏之
外人の師匠も交じるお茶の席　園歩
今日だけはお茶漬けにする妻の留守　六浦
究極のグルメと思う京茶漬　杜的
その時は茶柱立っただけでした　凡九郎

春四月甘茶で仏洗われる　定人
作法などいらぬ三時の茶がうまい　修水
茶のあとの切り口上が許せない　歌子
茶粥炊いて母は故里忘れない　柳影
茶柱が立ってやさしい顔になる　年代
出がらしのお茶にもあった火の命　敬
レモンティ恋をしばらく遠ざける　洋子
お茶がわりと言う珈琲にうらがある　正一
落箔の美の静けさに観世音　薫
美しい花に道草誘われる　芳子
疑いの晴れた涙は美しい　諷云児
夕茜野仏美女になり給う　武庫坊
春を呼ぶいかなごの煮る匂い満ち　堯
嫁さんが一枚脱がす孫の汗　保蔵
日に幾度眼鏡と財布探してる　みち子
道草もせずに働き粗大ゴミ　伊三郎
物想う時は静かな裁ちばさみ　静夢
度のきつい眼鏡で嘘のつけぬ人　萬的
故郷は見知らぬ人に声もらう　正子
つんとした女の匂うサロンパス　紫香

富柳会　池森子報

年齢とともに歩く自信が失われ　トシエ
体重を支える足が細すぎる　トシ子
極楽浄土舟いっぱいの足のばす　生子
行楽季刑事と空巣知恵くらべ　昭水
その一瞬行司黒星勇み足　(田)勇
隙間から心も空巣もって行く　(伊)勇
洗い髪いたわるように風が吹く　透太

母代り夢の中まで叱る姉　智久
セールスが綺麗な姉に食い下がる　荘次
土の香が忘れられない足の裏　文次
朝洗の泡に燃やしている女　維久子
情熱は足の先まで冷えている　花梢
空巣から見れば留守だと書いてある　美房
洗い髪　光源氏に見つめられ　岳人
哀しくてかなしくて洗い髪を梳く　森子

富柳会（前月分）　池森子報

綿入れは布とん座ぶとんだけの縁　花子
塗り箸より割箸でこそうどんそば　(田)勇
にぎりずし箸とりうまい外人さん　生子
割箸の軽さで男捨てられる　美房
野仏に綿入れ欲しい寒の入り　智久
綿入れでまどろむ老母の丸い背　荘次
戦争展綿入れ頭巾焦げていた　(伊)勇
男の意地あの輪の中に入るまい　二三子
我が家には花屋にもない花がある　透太
割箸をおいて佳境に入る話　維久子
人妻となっても我が家の顔でくる　花梢
ご馳走を前に割箸鎮座する　トシエ
綿入れに春温かし渡し舟　岳人
輪が解けずかごめかごめの鬼になる　森子

川柳高知　川竹　松風報

直球へカーブで返す反抗期　春枝
二日制ゴロ寝ばかりもしておれず　圭風
客布団受験の母娘包み込む　さち
盃へ明日の望みを膨らます　竹萌
木魚打つ和尚大きな生あくび　千恵子
編み棒もいつか止ったサスペンス　祥子
も一人の私が妥協許さない　菊野
一円を配って登る薬師寺　功
四季の花咲かせ季節に飢えている　朱坊
山登り好きな男を忘れよう　佳風
大掃除古い手紙に眼を盗られ　幸
手紙には無事と書いたが医者通い　愛宏
代筆の手紙と知らず燃える恋　松風

川柳ねやがわ（二月句会）　高田　博泉報

タイミングよいお誘いに酔うている　冬葉
お誘いにあまえましてと飲みつぶれ　あいき
厚着して肩をこらして風邪を引き　三郎
深い罪消してと願う遍路笠　波留吉
合格の発表こわい天神さん　一笑
役一つあっさり捨てて腹の虫　一途
深い井戸のぞいて城の悲話を聴く　一鬼
出番まで厚着をさせておく内緒　かすみ
すぎなの子顔出す権利ない土地で　英壬子
一坪の土地へ季節の種をまく　藍子
血と水と同じ重さの恩がある　高栄
誘われたように夫婦で風邪をひき　シマ子
一通の手紙が溝を深くする　庸佑
かたくなに古びた家で着ぶくれる　時弘
ちっぽけな土地だが水仙よく育ち　亜也子
税の網厚着のふところ逃さない　頂留子
空爆の画面で遊ぶ鳥の影　良三
クラクション時間通りに来て誘う　雅文
愛憎の深さに重い花手桶　あやめ
石ころの歌地上げ屋にけとばされ　吉之助
厚着捨て土に親しむ花作り　光子
深いなさけが一枚の和紙にある　三千子
乱開発やがて化石の土地になる　礫
弱いとこちゃんとおさえている誘い　柳宏子
聖書読む女に席を譲られる　紫香
バス走るここが日本一の土地　美幸
重ね着の老母を梅見の車椅子　章
姿見に女の深い海がある　度
訃を聞いて香に立つ雪となりにけり　薫風
メンバーの足らん時だけ誘われる　博泉

川柳大阪　高須賀金太報

新製品節煙すすめる煙草買い　亮太
効能書き医師に相談せよとある　柳弘
こぼれ種今さら若さもどされず　希久志
夫婦箸年輪まだまだ欠けはせぬ　洛酔
戦争は知らぬ学者の軍事論　しげお
正論の曲がって汚れて生きて行く　川童
見送りの三振ばかりファーム落ち　本蔭棒
その金は憲法違反じゃないですか　一歩
義理チョコを送る相手が多すぎる　天平
階段でバッタリ話長くなる　雅美
床の間に石飾られてあくびする　美津留
つまずいてこけて人生階段嫌だんナ　凡九郎
階段をリズムで昇る春の音　与呂志
あの頃は儲けてはった庭の石　笑風

苦労した石ころらしい深いしわ　鉄心
捨て石にされていたのは僕だった　重人
てっぺんの石で不安は今日もある　比呂志
目立たない所で耐えている礎石　金太

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

やがて波のような喝采となる演技　静代
合流で笑顔が戻る父と子と　豊太
童心に戻りれんげの首飾り　武雄
戻る日を信じた母の戦後史よ　柳宏子
壁画から古代のロマン呼び戻す　鉄治
振り出しに戻す老後の夫婦独楽　(福)和子
後戻り出来ぬあなたについてゆく　由紀子
潜りたいあなたの夢の世界まで　克子
明日の絵に逢うまで潜る花の闇　寿子
地下へ潜って傷みのわかるドンとなる　好啓
潜り込む意外に温い敵の腹　正博
潜り込む手足に火傷せぬように　アサ
少年の素潜り海が光りだす　栄美子
忽然と潜ってしまう手はあるが　智子
履歴書に苦労の汗が潜ってる　千寿子
潜りだな歩調の合わぬのが一人　高夫
女の嘘白いページが潜り込む　好笑
忘れたく夜の深さへ潜り込む　紀美女
潜っても竜宮城がみつからぬ　稚代
大仏の柱潜ると浄土かも　紫香
人波を潜る二人の息が合い　三千代
潜る術知って世間をあまく見る　三枝子
灰皿に盛ってあるのは捨てぜりふ　幸

桜散る女盛りもすぎてゆく　登志代
栄枯盛衰いつかは君も陽があたる　精子
盛り多い議題を抱え進まない　信子
盛り上げる何かが欠けている政治　英子
盛り物を毎朝代える願いごと　二南
山盛りの灰皿が知る秘の話　凡太
盛り花の一つ一つに和の心　紀久子

サークル檸檬　友碇　雅子報

悲しい日嬉しい日ありビール瓶　美緒
ラムネ瓶の底に答が伏せてある　智恵子
雨上がりの空にぽっこり虹の橋　登美子
瓶の中梅が発酵しはじめる　泰子
三、四日すぎて出て来た探しもの　今日子
バーゲンで探し出したる春の色　キミ
今更に探す気もない青い鳥　千代女
手造りのジャムほめられて瓶捜す　雅子
しとしとと惜しむが如く花吹雪　ます子
雨上がり傘邪魔になる特売場　三四子
旅立ちに明るいニュース探す朝　美子
先ず眼鏡探してからの探し物　薫風

堺川柳会　河内　月子報

猫捨てに橋をいくつも渡ります　東雲
爪切ってあげよう明日は日曜日　月子
裏切れずこのままアホになり切ろう　星子
にっこりと女とぼけて切り返す　楓
縁を切る話速いもん勝ちや　凡九郎
ご自慢のカメラ急いたか首が切れ　柳宏子

おんおんと哭きたい想い切り捨てる　寿子
切り株に森の不満がたまってた　萬的
切れすぎて安らぐ椅子のない男　通彦
世の波をやっと乗り切りフルムーン　紀美女
パン食の嫁へやっぱりついてゆく　ひで
ぜいたくの未来案じるパンの耳　頂留子
餡パンのへそに桜が散りかかる　彗楠
凡々の朝トーストの匂いたつ　半銭
帝国ホテルのパン食べ方がございます　薫風
頭撫で犬の不満を聞いてやる　一二三
二番手をわくわくさせている訃報　天笑
信号をうまく渡って来た小犬　春蘭
朝帰り犬もそしらぬふりをする　千万子
うちの犬風邪で入院しています　凡子
わくわくとさせるポッケの宝くじ　泰子
わくわくと弾む二十歳になる桜　森子
わくわくと千利休を待つ茶筅　岳人
かあさんがわくわくしてる参観日　狸村
馴れ初めがまだ恥ずかしいおばあちゃん　かりん
恥ずかしいと言ってられない手術室　満州
恥かいて覚えた事が役に立ち　博光
いつまでも恥じらいのある人が好き　都
何べんもおんなじような恥をかき　磯子
カルチャーへ楽しい恥をかきに行く　文

大原川柳社　小林　妻子報

軌道修正そっと直した細い道　あすなろ
内幕は知らぬ他人に裁かれる　正子
仮の世の愛を信じて汗ながす　ひでの

春風に飛んでくようにのし袋　たづ子
日溜りで噂話が往き来する　寿恵子
旧姓で呼ばれる里の駅降りる　みさえ
噂話飛び火している焚き火の輪　睦子
弥生空拝みそろそろ動き出す　こふゆ
胸底にくすぶっている不発弾　敏子
ちょっと釘差すかのように春の寒　正己
二つ目の部屋空にして子が巣立つ　巴子
スケジュールぎっしり溜めた春の鍬　辰江
リハビリの足にもつれる春の風　たけよ
よく笑う夫婦で愚痴が通じない　悦子
天国へつながる電話欲しい日も　朝代
脱線の話にみんな眼をさます　智泉
昨日より嘘が上手になっていた　玉恵
一泊だ要らぬいらぬと夫の旅　みづえ
鬼瓦まんざらでない雪化粧　妻子

南大阪川柳会　金井　文秋報

安全を知ってる猫は膝に来る　作二郎
安全と思って食べているりんご　奏月
安全な道を選んで覇気が消え　章
安全が空念仏となって事故　章久
子が居ればこそ安全な老後　あいき
安全地帯で主婦のたなおろし　久子
中立が必ず安全とは言えず　千梢
可哀想思われたくない見栄も張り　庸佑
可哀想などと優越感が言う　柳宏子
残された方がいっそう可哀想　冬葉
親のエゴ小さな命うかばれぬ　雀踊子
泣き声をしぶとく追って事件記者　シメ子
可哀想美女の失敗咎めない　新造
可哀想だけど協力出来ません　文江
妬げにならないように年をとる　智子
妬げるものが私の奥にある　重人
ステレオの音を大きくしてもめる　文秋
妬げる側にも有った深いわけ　頂留子
功成り名とげて孤独な人になる　楓楽
成り行きで心ならずも手を叩く　寿美
なるように成るさ女はしたたかに　公一
功成って同窓会を開きたく　直子
成る程と花をもたせて聞き上手　勝美
アドリブで成り行き少し向きを変え　萬的
待遇を言わぬ辛抱の樹が繁る　柳伸
待遇は言わず親の代からいてくれる　凡子
待遇はどうあれ好きなこの仕事　憲太郎
待遇を受ければ手足もぎ取られ　悟郎
待遇の善し悪し口に出せますか　凡九郎
待遇の不満頑張ってから言おう　トミ子

川柳後楽吟社　従野　健一報

八っつぁんと熊さん花のいい季節　草風
飼い猫のタマが真相知っている　たけ志
そろばんは秘めて裸のおつき合い　柳五郎
禁断の木の実いっぱい背のびして　玉水
筋書きは変えぬ男の意地がある　拓治
生きる種蒔いて笑顔の水を掛け　みよ子
妻が病む大根おろしの辛さしむ　美智子
転職へ生きるドラマを描き換える　桃風
オバタリアンの羞恥はバッグに入れておき　佐加恵
変化のない暮しが幸せかも知れず　哲郎
喜びの視線を温める智恵袋　博友
耳つまみ妻の得意なポーズです　青銅
捨て鵜の川原で朝を告げている　吟平
連れ添った四〇年の臍まがり　金吾
背中押す風は正義と信じよう　正秀
ポカポカで仕事の辛さ忘れそう　保男
校長にうちの子供も頼もうか　秋月
負け犬の舌の涎が止まらない　鮫虎狼
四季の雨日本はいいな詩にする　博友

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

まだ読まぬ本に書架からにらまれる　實
固い本読むとだんだん胃に溜る　一花
縁側の誘う日射しに父読書　つとむ
読書する学者一家の無表情　つる
点滴の中でゲーテをそらんじる　風樹
水いらぬ叔母の形見の梅小鉢　勝男
餞別の袋かぞえる異動前　隆利
餞別を懐にしてふてくされ　五楽庵
餞別が涙に変わる花言葉　花峯
餞別を胸にエールの爽やかさ　善保
もう少し餞別欲しいと部下の顔　はてなこ
餞別を呑んでしまった後始末　一光
虹に腰かけて餞別数えよう　黙人
餞別をもらうたんびにえらくなり　隼
餞別にすまぬと思う職をかえ　井蛙
上役の心を餞別の額で読み　凡凡子

尼崎小園川柳会　井崎ミサ子報

老妻が美人に見えた花の下　勇次郎
児のあくび一ツで緊張ときほぐし　五郎
妻と母超えて華やか女の譜　弘治
さえずりを斜に聞いて駅を発つ　澄子
さえずりがしたくて帰る母の膝　十四郎
遠足に園児が好きなお弁当　向西
遠足に一つ足りない母の味　寿子
かごの中一羽になってさえずらず　芳子
かたまってさえずりながら登下校　悦代
落選へ白眼ダルマがあくびする　修水
遠足が少し乱れて蝶が飛ぶ　紫香
お花見の霞に遠く救急車　伊三郎
華やかな時もあったにうば桜　キク子
噛み殺す欠伸鼻から抜けて出る　六浦
大あくび出して回りをそっと見る　ミサ子

川柳はびきの　塩満敏報

税金を納める方が頭下げ　利武
通天閣眺めるめしの太い文字　隆
慣れ過ぎてまさかの箸の落し穴　昇
億のつく土地とは知らぬ草のむれ　キミ子
入り口に踏み絵を置いておこうかな　絢子
我が明日に安全保証の道はない　志津江
二段ベッド上下で違う夢を見る　悦子
嫁さんは慣れてきたらし笑い声　みつこ
銀シャリのめしに難民思いやる　夏秋
習うより慣れですと菊作り　かつみ
お暇なら来てねに甘い千鳥足　志洋
めしの看板やっと帰ったなと思う　ダン吉
地下足袋がめしもそこそこあおる酒　忠宏
辛かろうベッドの四年老いた母　たけし
春財布千円札で膨らませ　吐来
日本のめしが食べたいパスポート　美代子
慣れているおごり夫婦のすきま風　胡村
叩いたら入り口あけてくれますか　敏

打吹川柳会　奥谷弘朗報

空の青草の緑に身を任す　温子
砂漠から緑をつくる人がいる　小鹿
雪に耐え緑充電春を待つ　喬水
新緑の苗にわたしの血が通う　野草
風みどりあせる心を諭される　雄々
立ち入りの出来ぬ緑が広げられ　柳風
緑消え赤信号が出た地球　善政
草の種飛んで緑の輪を広げ　みほの
春だなあ老いの胸にも緑萌ゆ　喜与志
葉桜の緑を賞めて負け惜しみ　妻子
みどり児の乳のにおいよこれが孫　邦俊
春雨が若い緑に逢いに来た　明治
山焼いてみどりの春を待つとする　節枝
樹齢百年暗い緑も威厳あり　玲子
早春の緑勇気が湧いて来る　信子
緑色子供の絵から遠くなる　孝恵
妻逝って花壇の緑枯れてゆく　宗光
みどり子よこれが我が子か猿に似て　勝見
風みどり与作は山を出たがらぬ　仙岳

新同人推薦

籾山隆
―薫風・鬼遊・シマ子推薦

吉村一風（いっぷう）
―鬼遊・章・シマ子推薦

岩原喬水（きょうすい）
―紫香・由多香・雄々推薦

前田一枝（かずえ）
―紫香・由多香・雄々推薦

春木圭一郎
―紫香・由多香・雄々推薦

帰郷して何と緑の美しさ　典子
馴らされて緑のよさに気がつかず　たつみ
弱音はくなと緑の風が肩叩く　節子
ふる里の野から緑の便り来る　幸子
野は緑　花子の胸ももりあがる　とみお
蝶おりて来いと緑の葉を伸ばす　螢
狭くても緑したたる庭がある　弘朗

南海川柳会　飯田　悦郎報

ベテランの限度ある目を信じきり　真柳
堪忍の限度袋に詰めて堪え　志華子
出発に使うピストルなら打とう　三男
出発の母の涙を忘れない　真砂
特攻隊出発前夜遺書をかく　東雲
病む妻へブランを立てて行くスーパー　信博
スーパーへ黒い眼鏡の時の人　甘平
スーパーで足りるくらしが板につき　花仔
スーパーに負けた市場でがたが来る　文秋
ライバルにしてスーパーの厚い壁　喜風
スーパーに時を稼がす籠がある　二南
ブロック塀笠が越境してもめる　柳宏子
隣との境界溝石よく洗う　眉水
境界をゆっくり越えたかたつむり　一度
境界があるとは知らぬ細雪　重人
即席の茶漬けが美味い三次会　柳伸
即席の話小鳥を掌にのせる　悦郎
即席で済ませ寛ぐ妻の昼　庸佑
即席がふえて助かるミスミスター　しづ子
アドリブの演技で沸かす芸の幅　勝美

むらくも川柳会　藤井　明朗報

眺めにも酒にも酔わす花の土手　正朗
夫婦だけで酔うのもいいね花むしろ　文子
酔い心地あしたのことは思わない　秀子
酔う程に無口な舌が回り出し　一葉
酔えばまた昔の秘密ひとつもれ　幸夫
無口にも酔わせて聞きたいことがある　島子
白酒にほんのり酔うてひなまつり　カツ子
好きだから何も釣れぬに夜が明ける　利
何よりも温い言葉は誰も好き　林蔵
好き同士　世の荒波に手をつなぐ　百代
大自然好きで農家の嫁に行く　ヤス子
好きですと言えない傘をさしてやり　義良
空が好き尺取虫が天を指す　寿美子
過疎の町春の眺めは日本一　はる代
山桜眺めてつまむ握り飯　よし子
道すがら桜眺めて墓参り　竹乃
お見合の写真眺めて良い日待つ　仲子
一年中　草に追われる畑仕事　さくら
甘い辛い知って人生下り坂　昭子
若草が萌えていのちに出合う春　ふさえ
せち辛い人生一歩春の風　寿
香辛料ピリッと効かす母の味　八重子
牛市の朝へ別れの草をやる　保子
久しぶりじっと眺める老母の顔　芳子
草花の野趣が生きてる活けてある　明朗

川柳塔鹿野みか月句会　土橋　螢報

武田帆雀（ぶたほじゃく）
—紫香・由多香・雄々推薦

美田旋風（みたせんぷう）
—紫香・由多香・雄々推薦

福田多可志（ふくだたかし）
—紫香・由多香・雄々推薦

西原艶子
—紫香・由多香・雄々推薦

上田俊路（うえだしゅんろ）
—紫香・由多香・雄々推薦

加本義良（かもとよしろう）
—薫風・紫香・堀江芳子・明朗推薦

病床のこころの友に音楽を　保子
音楽聞かせて牛の乳しぼる　喜与志
透き通る瓶に詰まってくる情け　諷人
錆びたナイフが私の胸に刺さってる　正道
大切な人が隣にいてくれる　幸代
いただいたこの幸せを大切に　信江
大切な亡母の遺影の塵払う　富恵
大切に育てた娘　虫がつく　かつみ
猫だって大切な物知っている　夕峰
大切に仕舞ったはずが見あたらん　節子
大切な千羽の鶴が一羽欠け　静生
大切な男がひとり幸せだ　きみゑ
老いふたりこころの絆大切に　静江
名曲へ酔うて一汽車乗りおくれ　かつ乃
はらはらとさせてナイフを研いでいる　くに子
満足をしようビールの中ジョッキ　明美
ふところにひとつの愛を大切に　芙美
ブーム去るステレオ隅に浪人中　弘子
カラオケの一円玉で古稀おどる　幸枝
なまくらなナイフ煩悩よう切らぬ　しげる
町の灯にふる里想い子を思う　睦子
野の花も瓶におさまり美しい　智恵子
悲しみをおぼろに覗く昼の月　八重子
音楽を聞いて笑顔をとりもどす　久枝
ふる里の町で八十年　息を吸う　汲香
音楽に合わせもみじの手が動く　和子
湯の町に移りぴんぴんしています　隆風
大切にされて育たぬ自立の芽　早苗
音楽の好きな人なら嫁に行く　きみ子
大切な男と情を温めあう　美っ千

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

若葉萌え鐘楼の幟高くなびき　明吉
萌えるもの萌えて埴輪の目が丸い　作二郎
僕の腹抑えれば四方丸くなる　悟郎
四の五のと言わせておけば癖になる　一笛
風邪ですら四季それぞれの癖がある　吉太郎
四角うに生きて孤独な影法師　(小)英子
あの人がまさかと思うモンタージュ　諷云児
漫画家の好む顔ですおたかさん　露児
似顔絵へ子は正直に皺の数　杜的
母の日の母の似顔絵みな若い　芳子
母さんの似顔絵にある泣きぼくろ　ただし
亡母に似た顔が鏡の中にある　とく子
抱き上げる赤子ミルクの匂いする　(玉)英子
おさな児のあくびミルクの匂いする　富子
やんちゃですミルク育ちの婆ちゃん娘　登志実
できないよ母に立退き話など　万之助
その道のベテランという深いしわ　福一
年金の余徳で妻が派手になる　明光
限りある生命愚直に生きる日々　登代子
お隣も同じ名字の城下町　薫
よく笑う女に戻る再診日　つえ子
児の内緒聞けば何でもない話　すて
とび降りた猫のあとから首を出し　しげお
しんし張り下をくぐって今日は　博史
怒らすとすぐ飲みに出る癖がある　白渓子
通り抜けわたしの短冊揺れていた　きく子

石飛水煙
—薫風・紫香・代仕男・きみえ推薦

伊藤芳正
—薫風・紫香・代仕男・きみえ推薦

伊藤寿美
—薫風・紫香・代仕男・きみえ推薦

尼れいじ
—薫風・紫香・代仕男・きみえ推薦

木村明人
—紫香・鬼遊・迷観子推薦

山本希久子
—薫風・鬼遊推薦

出雲川柳会紀行

高杉千歩

四月二十日、出雲吟行。栞主幹以下十四名を乗せたバスは、途中、久世インターまで駆けつけて下さった吟平さん、ふさえさん、秀香さんと一瞬の逢瀬も懐かしく、旧交を暖め、再会を約して一路出雲へと向かった。

久家代仕男会長初め皆さんの笑顔に迎えられ、文子さんの案内で今岡旅館着。一風呂の後、JRで来られた薫風理事長もまじえて出雲の同人の方々との前夜祭が賑やかに盛り上がった。

二十一日は、尼緑日和の快晴。出雲大社、日御碕の「灯台の夕陽神話を抱きよせる」の句碑に再会、改めて感銘を受けた。島根ワイナリーで途中下車、ワインの試飲に舌鼓、義理堅く二本、三本と土産は増えるばかり。遙山亭忌追善句会にふさわしい立派な大会場は溢れるばかりで、栞主幹から原独仙氏に感謝状贈呈、薫風理事長のお話の後、披講に入る。塔誌でお馴染みの方たちの呼名に胸躍らせ、きゃらぼくの秀句賞二つに絶賛の拍手、熱気に包まれて盛会裡に終了。懇親宴で山本朱紅さんの自作自演のマリオネットのダンス、民謡踊りが披露され、去り難い思いを残して海潮温泉行のバスに乗車した。

八岐の大蛇の神話の斐川を渡り、三刀屋の御衣黄桜を見物、満開の八重桜の中に、みどり色の桜は一際映えて千載一遇の眺めに刻を忘れ、陽の沈むころ山水館に到着。野天せせらぎ風呂で疲れをほぐし、二日目の宴は川柳塔貸切りの宿でますます元気旺盛、楽しい大会の一日が暮れた。

二十二日もまた晴天に恵まれ、荒介さんたちの迎えのバスで名残りの桜が美しい中にも荘厳な熊野大社に参拝、護摩木に願事を書きさて神殿におみくじが三十円とあり、安さにひかれて一本頂いたが、中吉でよいみくじだった。「間違うて三百円入れたんで、お釣り頂けまへんか！」「それでは、あと九本とって下さい」。商魂たくましい神官の言葉に唖然、せつない世の中である。

足立美術館で久々に大観、栖鳳、好運にも龍子特別展に出合って感動、陶酔する。枯山水の庭を眺めながら珈琲を賞味、米子への車中から大山を目前に眺め、梨の花にいっそう旅情をそそられた。

米子ホテル胡兆で、きゃらぼくの皆さんと一緒に昼食会。ここでも雑詠とやらで即吟、最後まで作句に悩まされ、さすが川柳塔の旅だと感無量。三日間の旅で、川柳への絆が深くなった思いがした。

出雲の皆様、きゃらぼくの皆様、ありがとうございました。残り少ない頁に数行、書き尽くせなかった気持ちの一端を記し、旅の思い出とします。

正朗ご夫妻のさりげない思いやり
バスの中で聞いた文子さんの民話
ちかしさんの明るい笑顔と優しさ

大会における特選句、次のとおり。

仰げば雲に路郎師と緑之助　弘津　柳慶
みどり萌え柳は風を鬩るのか　林　荒介
ときどきは初心を屋根に干している　金築　雨学
バランスを少しくずしたお月さま　長谷川博子
少し余裕が出来てあちこち痛くなる　藤東　清子
みそ汁のおいしい妻につながれる　新　正子
やかんから注ぐ工場のうまいお茶　石垣　花子
喜びをいずも訛りで握手する　堀江　芳子

城北川柳会吟行

松本　ただし

統一地方選後半の投票日、童心にかえった十五人が遠足の心で阪神の奥座敷、有馬で四月例会を兼ねた一泊二日の吟行を行った。大阪から一時間そこそこの行程である。六甲山脈の木々は、春から初夏への明るい緑の衣替えに懸命だった。案内書によると静かな山あいにのぼる湯煙が見つかったのは、日本中が神様ばかりだった時代らしい。ヤマトを平定された神武天皇も、ここで戦勝祝賀会を開かれたのではと思いをタイムスリップさせてみる。空は晴れ渡って同じ太陽がその時も照らしていたかも知れない。

バス停から宿舎までゆるやかな上り坂が続き、左手に六甲川が十米余り下で岩を洗っている。広くもない道を隔てて、緑に囲まれた旅館や会社の保養所が屋根を並べている。その間を縫うように自家用車、タクシーが排気ガスを撒きながらかけぬけてゆく。どこのリゾート地でも体験する車に乗れば人、歩けば車が邪魔になる車公害の地獄がここでも待っている。神経の擦り減る文明の業が湯の町のそぞろ歩きにもついてくる。

少し行って流れに別れて右へ足を延ばし、宿泊所かんぽセンターのロビーに腰を下ろす。遅い昼食をすませて、早速、城北四月句会。兼題「賭ける」「ゆっくり」「夫」の選、披講が小夜子、典子、史風さんの順に進み、続いて先に投句済みの「花」と「おどる」と自由吟の秀句と併せて六句を俎に乗せる勉強会。それぞれ長い人生の過去とダブらせて句の背景を模索した言葉のやりとりに、充実した時の流れは一時間近くに及んだ。

おどり終え越えた山坂など想う　典子
柳吉のような夫と法善寺　小夜子
啓蟄と関係なしに腹の虫　達子
一生を賭けた女の獣聞く　公一
期待かける花へ肥料をやりすぎる　典子
ゆっくりとやがて一気に花の雲　ただし

句会の後、疲れをほぐしてくれる湯に身体をゆっくり預けて六時から夕食。特別料理に舌鼓を打ち、適当に五臓六腑をかけめぐるアルコールが軽い心をなお軽くしてくれる。他の客との相席で歌こそ出なかったが、談笑はばずみにはずんだ。日帰りの人の去った館内はすっかり落ちつきを取り戻し、窓外は闇の木立に包まれていた。部屋では思い思いの席を占め、投句披講の後、小さな輪がいくつかできて雑談が川柳談義になり、古川柳に始まって素材のとらえ方、心象句の批判、はては選者の態度、資格まで議論の輪を広げた。

翌二十二日、早朝から入浴、オイシイ顔で朝ごはん、チェックアウトまで川柳遊びに時を過ごす。「さつき」「やすい」の折り句にA組典子、満津子、登美子、小夜子、右近、白峰、ただし、B組公一、久留美、静子、達子、春蘭、八重子、史風、司会倫子の皆さんの組合せで相手チームの句の作者当てでA組が三対二の辛勝となり、拍手のうちに二日間の満ち足りた吟行のお開きとし、うち揃って有馬の宿を後にした。

年二回の私たちの吟行風景でした。ではまた、秋のその日をお楽しみに。



柳界展望

編集部

★第36回岸和田お城まつり協賛の川柳入選者の表彰が**4月12日**に行われ、市長賞に芳地狸村、観光協会賞に島崎富志子、佳作に古野ひで・原さよ子の各氏が選ばれた。

★NHK学園川柳九州大会は**4月14日**、由布院で開かれ、本社同人の各氏が大会大賞（特選）・秀作・佳作賞に輝いた。

〈**大会大賞**〉

山頂を競う男の背番号　山田　高夫

〈**秀作**〉

丹後ちりめん雪の重さも織り添える　桜井　千秀

〈**佳作**〉

内田　結実
安平次弘道　桝本　露児
山本希久子　青枝　鉄治
羽津川公乃

★尼崎春の川柳大会が**5月3日**、サンシビック尼崎で開かれたが、本社同人の次の各氏が入賞した。

・天位句

引き出しの奥に手ごわいメモがある　春城　年代

きっちりと昼　棟梁の腹時計　住谷　石舟

・秀　句

奥山美智子
小池しげお
西出　楓楽
高杉　鬼遊

★日本川柳協会の大阪・兵庫・和歌山地区の常任理事改選が行われ、**6月9日**の総会で承認される。新常任理事（15名）次のとおり。

礒野いさむ・西尾栞・梶川雄次郎・橘高薫風・山本翠公・野村太茂津・西田柳宏子・広瀬反省・牧浦完次・黒川紫香・住田英比古・田中正坊・小松原爽介・柏原幻四郎・去来川巨城

★第16回全日本川柳和歌山大会（**平成4年**6月14日）の開催準備が進められており、県民文化会館大ホールの使用許可も決定、前日の13日はバス2台で市内を観光、前夜祭は東急インホテルで開くことに決まった。

★ふあうすと川柳社会長の去来川巨城氏は、このほど兵庫県文化功労賞を受賞。また、同氏は作品集『さんれい抄』を発刊した。

★年間賞発表ふあうすと川柳大会は**5月4日**、170名が参加して兵庫県福祉センターで開かれ、本社同人の春城武庫坊氏が秀句賞を受賞した。

かち取った自由に愚痴がついてくる

▽**同人消息**△

■飯田悦郎氏（本社理事・八尾市）は**5月12日**の八尾市文化連盟まつりで文化功労者として表彰された。

▽**ご芳志**△

■山内房子さん（故山内静水氏夫人）から亡夫供養として金一封拝受しました。

■原独仙氏（出雲市・本社参与）からも金一封拝受しました。

▽**おことわり**△

■5月号に古川覚然坊氏を新同人として紹介したが、同氏はかつて同人として在籍したことがあり、今回、復帰されたものです。

▼**訂　正**▲

■**5月号**・P49上段13行目「堀端靖子」→「堀畑靖子」

京都塔の会	25日(火)午後1時から 屑・刻む・両手	京都府南労働センター　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1　松川杜的 句会費 350円　投句料 62円切手3枚
岸和田川柳会	27日(木)午後6時から 集まる・糸口・うとうと・液	岸和田市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7－36　植山武助

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

6月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
堺川柳会	2日(日)午後1時から 脱ぐ・貧しい・休憩・自由吟	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 古い・花道・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 街灯・マスコット・毛虫	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 指・揺れる・豊か・許す	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 朝・怪しい・ためらう・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわを 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
八尾市民 川柳会	11日(火)午後6時から 流れる・カラオケ・蛙・かび	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
川柳 ねやがわ	16日(日)　正午から すじ書き・再会・ふれあい・自由吟	寝屋川市秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス秦公民館前 〒572 寝屋川市春日町6−9　高田博泉 句会費 1,000円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 六・狭い・電気・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(水)午後6時から 比較・見栄・意外・略	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
富柳会	20日(木)午後1時から 氏神・内祝・五月蠅い	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(金)　正午から 無駄・恥・温もり・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3−8−8　川島諷云児 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南海 川柳会	21日(金)午後6時から 常用・毛虫・野心・味覚	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
川柳 東大阪	22日(土)午後6時から タイミング・一生・暇・濡れる	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5−6−23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から 円満・重ねる・ワンマン・(縁起)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8−31−11　塩満　敏

編集後記

★一年中が何かの記念日で埋まっているが、個人にもそれぞれ記念すべき日がある。私にもそのような日がいくつかあるが、その一つは六月一日、一枚の紙切れによって〝軍隊〟という別世界の人間になった召集の記念日である。日本の敗色いよいよ濃くなった昭和十九年のことだけに、旗も歌もなく、葬列のようなさびしい応召風景であった。

★入隊したのは、野間宏の小説『真空地帯』の舞台にもなった歩兵第三十七連隊（中部第二十三部隊）、もとより志願したのではないから正真正銘、〝一つ星〟の陸軍二等兵である。軍隊については、人それぞれの思いがあり、長い歳月はいまわしい思い出まで美化することもあるが、私は今もってあの非人間的で、虚偽に満ちた集団を絶対に許すことができない。

★ところで六月号の発行で一年も半ばになる。世紀末のことだから何時、何所でどんな事件が突発するかも知れないが、何と言ってもあの「湾岸戦争」は、今年のニュースのベストワンになるのではないだろうか。さてこれに対する我が国の対応だが、右往左往・朝令暮改、全くもって恥ずかしいかぎりであった。

★米国の圧力に対して「もうしばらくすると、世界はドイツ人が優秀な兵士であってほしいと思わなくなるだろう」と発言したワイゼッカー大統領の毅然とした姿に学ぶべきだろう。今回の掃海艇派遣は、私には、「平和日本」への晩鐘のように思えてならない。（正）

○本誌に連載中の「大空のこころ」は、回を追うごとに路郎先生の偉大さを浮き彫りにしてくる。今後ますますの薫風氏の筆の冴えを楽しみにしている。

○同人であった義母は、体が弱かったため、あちこちの句会にお伴をした。その頃、何度か会場で路郎先生にお目にかかっているはずなのに、記憶が全くない。当時二十代だった私は、川柳に手を染める気もなく、のほほんと句会の終るのを待っていたからだろう。今となれば大変残念に思う。

○昭和三十七年頃、先生をわが家にお迎えしたことがある。足のお加減が悪いとかで、座敷に椅子を持ち込んで座っておられた。

「近頃、足が冷えて困ります。人間は足から死んでゆくのです」

などと雑談されているところへ挨拶に出た。以前から義母にとても偉い人だと聞いていたが、川柳に無縁だった私にとっては、単に〝気難しそうなお爺さん〟でしかなかった。けれど、人の心の奥底まで見透してしまうような、生一本な目がとても印象的であった。

○ただこれだけの先生の思い出だが、私の心の床の間に大切に飾ってある。（ふ）

●所謂主義者と言われる人がいる。天下国家を論じ、人類や人民の事を考え、信念を持っている人々だと思う。ところがこれらの人が主義に走る時先ず切り捨てるのは親兄弟や友人という最も身近な者達である。苦労して育ててくれた親達の所には近寄りもせず、世界平和だ社会福祉だとデモや選挙には、やたら熱心である。まるで親や身内は人民ではないかのように…。

一方、短歌や俳句を趣味とし花鳥風月をこよなく愛すると言いながら、人間を蔑み傲岸な人がいる。偽者かも知れないが、ここらの所が私にはよくわからない。

●芸術は創作である。作者が居て作品がある。そして力を持った作品は作者がどんな人かとは関係なしに一人歩きするようになる。卑近な例では〝一杯のかけそば〟というのがある。口や筆は調法なものではある。

●では川柳はどうか。勿論文芸としてひとり立ちする立派な作品もあり、想像や願望の句もある。けれども川柳は人間であるという先師の言葉に同感している私は作者と作品は正真正銘一体であって欲しいと願っている。偽りや驕りや意地悪な気持をなくしていかねばと常常自戒している。（射）

本社6月句会

日時　6月7日（金）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点西南角
おはなし　野村太茂津
兼題「港」　佐藤奏月選
「弱い」　西出楓楽選
「メンバー」　春城武庫坊選
「来る」　玉置重人選
「父」　西尾栞選
席題　1題当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社7月句会　8日（月）

兼題　「舞う」「人妻」「風」「迎える」「文楽」

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　小出智子選
課題吟（3句）
「葉書」　板東倫子選
「焼く」　野田素身郎選
「かすか」　門谷たず子選
初歩教室「同居」（3句）　辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

9月号課題吟「白」「吹く」「動物」

お願い

川柳塔社では現在、同人と誌友を増やす運動をすすめています。各柳社（会）におかれましては、この際、新同人の推薦ならびに誌友の紹介をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

川柳塔社

NHK川柳作品募集

課題「ドラマ」　橘高薫風選
ハガキに3句　6月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　6月23日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「泳ぐ」　森中恵美子選
ハガキに3句　6月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
半年分　三千八百円（送料共）
平成三年　五月二十五日印刷
平成三年　六月一日発行
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
発行所　川柳塔社
電話（06）六六一―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成三年五月二十五日　印刷
平成三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七六九号　川柳塔　六月号
定価　六百円（税込　五十円）

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

代表者　大矢喜一

豊津店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL（06）330-0006㈹
FAX（06）388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL（06）388-6166㈹
FAX（06）388-6886

第6回 国民文化祭文芸大会

〈川柳募集要項〉

課題と一次選者（各題2句・1題2人選）
「水と緑」　大野　風柳・神田仙之助
「広　場」　斎藤　大雄・吉岡　龍城
「醤　油」　亀山　恭太・尾藤　三柳
「暖　流」　時実　新子・佐藤　正敏
「空　港」　山田　良行・関　永華

募集期間　4月1日～7月31日
応募料　1000円（郵便小為替）
応募方法　200字詰原稿用紙（B5判）に各題ごとに記入し、同形の別紙に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・職業・電話番号と大会・懇親会参加の有無を書いて左記へ。
送付先　〒280　千葉市亥鼻2—5—3
千葉県庁亥鼻別館　第6回国民文化祭千葉県実行委員会事務局
「文芸大会・川柳部門」係
分科会　11月23日（土）正午から
会　場　日本コンベンションセンター
二次選者　浅田扇啄坊・安藤亮介・伊藤紺矢
川崎火呂志・白井花戦・平井吾風
河野十九人・松沢敏行・江口東白
加賀美白英子
賞（予定）　文部大臣奨励賞・知事賞ほか
作品集　応募者全員に配布

雑誌　05703—6